

物語の執筆者

カボチャツキ—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過去の物語。それは誰が書いたのか分からない。

1話目は幕間の物語になっています。この小説はプロローグからお読み下さい。

目次

幕間の物語

クー・フリーン

プロローグ

第一話

英雄候補と炎上汚染都市

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

英雄と二人の聖女

第八話

第九話

第十話

第十一話

第十二話

第十三話

第十四話

第十五話

第十六話

ローマに通ずる道の先は未来か破滅か

第十七話

第十八話

第十九話

53

45

37

31

25

19

11

1

58

63

69

76

84

93

99

106

113

120

125

137

第二十話	147
第二十一話	155
第二十二話	162
第二十三話	170
第二十四話	180
第二十五話	189
第二十六話	195
第二十七話	202
第二十八話	209
第二十九話	217
第三十話	224
第三十一話	230
第三十二話	239

悪は人理に太陽を登らせる

第三十三話	245
第三十四話	251
第三十五話	258
第三十六話	266

幕間の物語

クー・フリーリン

ケルト神話には数多くの英雄が存在する。その中で最も有名なのは誰かと聞かれば皆が口をそろえて彼の名を出すだろう。クー・フリーリンと。

クー・フリーリン、幼名セタンタ。彼は太陽神ルーと王の妹デヒティネを親に持つ英雄である。彼には豪快な逸話が多い。そんな彼が最初に成し遂げた偉業はクランの番犬を返り討ちにした事件だろう。この番犬は非常に強く数人の大人を返り討ちにしたそうだ。

しかし、考えて欲しい。いくら神の子供だったとして、こんなことを子供ができるだろうか？ 答えは否である。だが、実際にセタンタはこの偉業を成し遂げた。

今から語るのはセタンタがどうやってこの偉業を成し遂げたのか、歴史の表では決して語られなかった、歴史の裏の物語である。

◇

セタンタ、年齢7歳は悩んでいた。その悩みの種は彼が所属するハーリングのチーム

が勝てないことだ。彼自身は優秀である。しかし、チームメイトに恵まれなかった。このまま負け続けるのは彼の性格上合わなかった。よって何とか打開策を出すためにチームメンバーと会議することになった。

「これ以上の負けは許せない。どうにかして勝ちたい。みんな意見を出してくれ」

セタンタの問いかけに一人の少年が意見を出した。

「あのー、噂の人に監督になってもらうのはどうでしょうか？」

「……それしかないか」

渋々頷くセタンタ。噂の人物はマッスルさんと呼ばれる7歳の少年である。何故マッスルさんなのかは分からないが教えるのが上手らしい。しかし、教育された隣の村の少年は性格が変わってしまったらしい。

セタンタは勝つためには背に腹は代えられないとマッスルさんの家を尋ねた。そして出てきたのは普通の少年だった。ただし雰囲気は只者ではないことが明らかであった。

「何者だ？」

セタンタは震えた。これが同世代の少年なのか、どう考えても歴戦の戦士じゃないか。

「あなたの教えを受けたいのです。どうか俺たちをハーリングの試合で勝たせてください

いー」

「……別にいいけど、俺の教えはスパルタだよ。命を懸けることになるけどそれでもいいか？」

「はい！ どのような厳しい訓練でも耐え抜いてみます」

「分かった。では明日、ここの近くの山に来なさい。1週間の山籠もりをするから、その準備もしてきなさい」

「はいー」

セタンタはこの人に師事したら自分は確実に勝てると思い高揚した。しかし、翌日、彼とチームメンバーは後悔することになる。自分たちはなんて馬鹿なことをしたのだろうか。

◇

翌日、山に到着した一行、マッスルさんは語りだした。

「これから君らに教えるものだ。みなからマッスルと呼ばれている。かなり厳しいと思うが頑張ってくれ」

「はい、マッスル師匠！」

こうして訓練が始まった。彼が最初にしたのは彼らの持ち物の食べ物をすべて預かることだった。

「さて、君たちに技術を教えても体が追いつかなければならないから今回はマッスル強化を中心にする。最初に走り込みとマッスルトレーニングだ」

なるほど、やけにマッスルを強調するな。これがマッスルさんの由来かと納得したメンバーは、案外普通な訓練に拍子抜けしながらも午前の訓練を終わらせた。

「腹減ったー。飯はなんだろう?」

「さあ、でもあの人ならおいしい料理を作ってくれそうですね」

楽しそうに戻ってきた彼らが見たものはマッスル師匠が猪を丸焼きにして食べているところだった。そして彼はセタンタたちを確認すると人数分のナイフを渡した。

「あの、これは何ですか?」

「ナイフだ。さっさと昼飯を狩ってこい。なければ飯抜きだ」

「はあ!!」

これには腹が減ったメンバーが切れた。

「何言っているんだ!!」

文句を言った瞬間、彼はマッスル師匠にコブラツイストを食らった。

「貴様らは強くなりたいたいと言った。なら黙ってやれ。貴様らが話している言葉は□はい□のみだ。分かったらさっさと行ってこい」

あまりの痛さに声のない叫び声をあげているメンバーを見て焦って飛び出すセタン

タたち。

「ちなみに逃げ出したら、生き地獄を味わわせてやるから逃げるなよ」

「はい！」

そして彼らは命がけの狩りが始まった。セタンタは無事に猪を狩ったが、他の者ではできなかった。

「獣一匹狩ることができないのか。しかし、セタンタはよくやった。食べるがよい」

セタンタが美味しそうに食べるのを羨ましそうに見るメンバーにマツスル師匠は言った。

「貴様たちは今晚も狩りに行かなければならない。今から狩りの方法を教えてやる」

「え？ いきなりですか？ それよりこれがハーリングの試合で役に立つとは思えないのですけど？」

驚いた声を出す少年に今度は十字固めを食らわす師匠。

「先ほど言ったことを忘れたのか？ 貴様らが言っているのは□はい□だけだ。しかし疑問を持ちながら訓練しても成長には繋がらないから教えてやろう。筋肉を付けるのに一番いい訓練は実践だ。実践ならば無駄な筋肉が付かないからな」

メンバーは□だからハーリングとの関係は？□と思っただけ黙ることにした。彼が怖いのだ。

「ではまずは実戦を見せよう。着いてこい」

そしてセタンタを残してメンバーを連れて行ったマッスル師匠は、返り血を浴びながら猪を仕留めてきた。その猪を最初だけということでもメンバーは食べることを許されることになって喜んだ。彼らはマッスル師匠に一生着いていこうと決めた瞬間だった。

◇

そして夜、独自で狩りに行かせたメンバーの中でやはりセタンタが最初に戻ってきた。

「お疲れさん」

フランクに接してくるマッスル師匠に驚いたセタンタは質問した。

「さつきと雰囲気の違いますね」

「ああ、あれね。あれは役作りだよ。昔、こういう仕事してたからねその時の癖で」

「昔って、あんた何歳なんですか?」

「さあな、もう忘れたよ」

意味の分からなさに混乱しているセタンタを置いてマッスル師匠はさらに語る。

「君は厳しくしなくても結構できるから別にいいかなと思ってるね。他の子たちは根性が足りないな。スパルタだったら死んでるかもしれないね」

「スパルタってなんですか?」

「最強の国」

「へえ」

興味を持ちさらに質問しようとしたところで残りのメンバーが戻ってきた。

「遅い！　しかし、よくやった！　全員ちゃんと狩れているな。明日からは訓練はさらに厳しくなるから覚悟するように！」

「はい！」

マッスル師匠の変わり身に感心するセタンタを置いて彼はおいしい調理の仕方を伝授するのだった。こうして一日目が終わった。

◇

そして無事に1週間の厳しい訓練を生き抜いた彼らは試合に望むことになった。

「君たちは俺の訓練を耐え抜いた。自信を持って。ここらへんで君たちに勝てるチームは私が指導したチーム以外は存在しない」

「はい！」

「よし、敵チームをやっつけてこい」

「はい！」

選手が整列する。敵チームは弱小チームであるセタンタのチームをにやにやと見ていた。しかし、試合が始まると一気に表情が変わった。

セタンタのシュートは敵選手を吹き飛ばした。他のメンバーのパスは目で追えないレベルで早かった。

この試合を観戦に来ていたコノア王はドン引きした。☒あれ、私の知っているハーリングと違う☒と思った。その感想を置いておいて、その中でも人外の動きをしているセタンタを鍛冶屋のクランの館に誘った。そして試合終わりに来るとの返答をもらい去っていくのだった。

ここで本来なら、鍛冶師のクランにセタンタが来ることを言うつもりだったのだが試合が異常な光景のせいで言うことを忘れるのだった。

そして後半戦も終わり、結果は圧勝だった。敵チームも負傷者を大量に出した。確実にトラウマになっただろう。

胸上げをして大喜びした後に各自解散となった。たまたま帰り道が同じだった、マッスル師匠とセタンタは館の前まで来ていた。

「じゃあ、世話になったな。ありがとよ」

「気にしなさんな。じゃあな」

訓練期間に一気に仲良くなったセタンタとマッスル師匠は相棒と呼んでも違和感がないぐらいの関係になっていた。

別れを告げた後にマッスル師匠が歩いていると後ろから大声が聞こえた。戻ってみ

るとセタンタが大きな犬に襲われていた。セタンタは犬を恐れ追い詰められていた。そこに声が聞こえた。

「何を恐れているセタンタ！ あれぐらいの獣何度も仕留めただろう！」

「けど、あの時は武器があつた！」

「武器なんて飾りだ。本当の武器は己の肉体だろう！ 相手の犬が怖いならお前も犬になるのだ！ 猛犬だ！ 猛犬だ！ お前は、猛犬になるのだ！」

「あああああああああああああああああ！」

セタンタは叫ぶと飛び掛かってきた番犬の攻撃を躲し、犬に跨るとそのままマッスル師匠に教えられた締め技を犬に使った。そしてセタンタはその番犬をそのまま殺したのだった。



この騒動により、自慢の番犬を失い嘆く克蘭に、セタンタは自分がこの犬の仔を育て、更にその仔が育つまで番犬として克蘭の家を守ると申し出た。そしてマッスル師匠に言われたとおりに克蘭の猛犬を意味するクー・フリーンと名乗ることになったのだった。

そして番犬として強くなるために少しの間マッスルさんに師事するクー・フリーン。この師弟関係が後にとある女性の耳に入る。そのことによつてマッスルさんが恐怖の

どん底の叩き落とされるのだが、それはまた未来の話。

プロローグ

第一話

俺はある日、寿命で死んだ。幸せなことに長生きして、家族に見守られながら死ぬことが出来た。次の人生なんて考えたこともなかったし、転生なんぞ起ころはずもないと思っていた。実際に小説家であった俺は小説家でありながら、いや、小説家であるからこそファンタジーのようなことは起きないと信じていた。

しかし、『事実は小説よりも奇なり』とはよく言った物だ。まさか、本当に存在していたとは。

これは俺が死んですぐのこと、名前の分からない何かに出会った。まあ定義するならば『神』という存在なのだろう。

神様が言うには俺の書いた小説を気にいってくれたらしい。小説家冥利に尽きるとはこのことである。散々褒めちぎってくれたあとに相談事を持ち掛けてきた。

『過去に面白い物語いっぱいあるよね』

「ありますね」

『実はあれってほとんど実話なんだよ。結構編集されてるけど』

「へえー」

『その感じ信じてないね。けど仕方ないか、いきなり魔法があるやら、なんやら言われても信じられないしね』

「そうですね」

『まあ、そんなことは別にいいんだ。僕が言いたいのはね、君にそれらの物語の執筆者になって欲しいんだよ』

「? まあ、話を読んで自分風には書けばいい感じですかね?」

『いいや違う、君が、見て、感じて、そして書くんだ。過去の偉人の物語を!』

「いやいや、無理ですって! もう死んでますし」

『もちろん蘇らせてあげるさ、しかも君は何度でも転生させてあげる。君が生きているのはまさしく物語の中さ!』

これは、まずい。転生させるのは物語の中。こいつとの会話が真実なら自分が信じていなかったことが実際に起こる世界である。つまりドラゴンやら怪物やらがいる世界に連れて行かれるということだろうか。

「あの一、それは、ちよつと、困りますというか」

『では、行ってらっしゃい!!』

神様のような存在が言った瞬間身体が透け始めた。

「せめて、会話して下さいよー!!」
叫ぶと同時に俺の意識は消えた。

そこからは何度も人生を繰り返し、真実を物語りにしていった。

ある時は、

「エルキドゥはギルガメツシュと会話をする中で『わかるとも』と言うが実は何も理解してなかった。……あつはつはつはつは！ 書いてて笑ったけど絶対に理解してないわあいつ。この前、適当な名前の人を美人つて褒めた時に『わかるとも』って言うたけど、俺が言ってたの男だったし！」

俺の中でやつは知ったかの地位にいる。

「それとギルガメツシュは獅子と戯れていたが、よく見ると襲われていただけだったつと。いつもの笑顔浮かべてたけど、冷や汗大量にかいてたしな。こう見ると二人とも馬鹿だろ。後世の人が馬鹿だと思いうように書いておこう！」

「……なあ、エルキドゥ」

「なんだい、ギル」

「これから、この男がどうなるか分かるか？」

「ああ、分かるとも」

「はっ?」

友人二人から襲撃され執筆作業を邪魔され。

また、ある時は、

「アルゴ号のメンバーは脳筋だらけ。メデイアは危険度やばい、ヘラクレスは筋肉が人間の皮を被ってる、アタランテは攻撃がアタランテ。……日本ならこのダジャレ受けたかな」

「困りますよ、こんなこと書かれたら」

「うわ、メデイア様!? いつからそこに?」

「初めからいましたよ、うふふふふ」

「これは、えっと」

「私とイアソン様が両思いだと書いて下さい」

「……イエス、ママ」

「すまん、イアソン様。あなたの妻はメデイア様になってしまった。……これ絶対に未来で後悔するだろあの人」

「この時代は書くこと多いなあ。」

また、ある時は、

「アーサー王貧乳で食いしん坊だった。円卓の騎士は人妻好きが大変多かった。モードレッドは兜をいつもとらないが、この前、俺ってイケメンじゃねって言ってたからたぶんイケメンだろうって」

「兄上、少しお話が」

「ん？ 後ろから胸が貧相そうな声が」

「死にたいようですね、兄上」

「落ち着けアーサー王、あなたはいつ見てもかっこいいですね」

「……ありがとうございます。しかし、これとそれとは話が別です」

「oh」

ビームを食らって気絶したり。

また、ある時は、

「スカサハはよく男に襲いかかったと。これだけ見たらメイヴと同じだな。あんな恰好してるし、案外あの人も……後ろから嫌な予感」

俺が先ほど座った場所に槍が刺さっていた。

「私に喧嘩を売ってきたことは評価しよう。そして死ね」

「ちよ、つまつてー！」

槍を片手に追いかけて回された。

そうやって、忙しい人生を送って来た俺が再び転生したのは西暦も2000年ほど進んだ日本であった。一番初めの人生と同じ時代、同じ国ということもあり平和に暮らせるだろうと考え過ぎていた。

だが、神様が言っていた（初めの奴な）ことを忘れていた。俺は物語から抜け出せないということ。

今度の人生では、考古学者兼小説家という一風変わった職業についていた。考古学者になった経緯は昔の未解読の文字を読めたのがきっかけで、付けられたなんちゃつての職業である。

読めた理由は、俺が書いたからですけどね!! そして読めることをいいことに少しあいつらの恥ずかしいエピソードを広めてやった。

例えば、アーサー王は女装趣味の変態になったし、ギルガメッシュは葉っぱ一枚で歩き回る裸族へとの世界でジョブ変更した。

そうやって、自由気ままに過ごしていた俺だが、ある日、人理保障機関カルデアという国連承認の機関からスカウトが来た。スカウトの理由は、人理を守るためには過去に

行くことがある、よって今の時代で過去のことに詳しい俺から過去の人の生活などの情報を教えてほしいという理由だった。

しかし、過去の経験からこれは面倒事であると気付き断ろうとしたが、さすがは国連全ての逃げ道を封鎖され俺は泣く泣くカルデアに所属した。

ちなみに、カルデアは簡単に言えば未来を守ろうという集団だった。

その後、とんとん拍子で進んでいきカルデアに移動した俺は魔術師たちに知識を授けながらのんびりと過ごした。

カルデアにいたロマニ・アーキマンという男と仲良くなった俺は暇な時は彼とよく話していた。俺も過去にあったことがあるような気がしてついつい話しすぎた。もしかしたら誰かの生まれ変わりなのかもしれない。

ある日、ロマニ（ロマニのあだ名）から「ソロモン王についてどう思う？」と聞かれたから、「無趣味っぽい人でダビデの息子だから、たぶん今の日本にいたらドルオタになつてると思う」と言ったら驚いた顔をしていたのが印象的だった。

また、ロマニとの会話でどうやって未来を守るのかを聞いたところ、驚く事実が発生した。

何と、過去の英霊を呼び共に戦ってもらうのだとか。これを聞いた瞬間辞めたくなっ

たが、まあ、生まれ変わってるし、バレナイことを祈ろう。

もしばれたら何をされるか分からないからだ。

そうやってばれないことを祈りながらついに人理修復するためにレイシフトという違う時代に行く準備が整い出発することになった。

俺が彼らが帰ってきたら誰か連れてくるだろうなと思いつながら部屋で寝ていると警報が鳴った。

英雄候補と炎上汚染都市

第二話

「何？ これ何か起こったの？」

人生を何度も繰り返しているせいか緊急事態でも焦らなくなった俺は重い腰を上げ部屋から出る。

「よかった、君は無事だったんだね！」

部屋を出るとロマンと見たことが無い男子、高校生ぐらいだろうか？が走ってきた。

「ロマン、これ何があった？」

「分からない、けれど管制室で異常があったらしい！ ほら、君も一緒に来てくれ！」

「え？ 俺は力ないから自室で待機したいのだけど」

「冗談言うな、君も普通に魔術が使えるだろう！」

「ここに来てちよつと教えてもらっただけだけどな」

そこから、行きたくないのが正直なところだが仕方ないので着いて行く。道中、少年

——名前を藤丸立香君——と軽く自己紹介しながら管制室につく。

「管制室が炎上してる」

ロマンの呟きが聞こえる中全員が呆然と立ち尽くした。部屋は炎に包まれ瓦礫が落ちていた。ここでは、マスター候補生たちが過去に向かうためにレイシフトをする予定だったのだ。なのにこの現状では生存は絶望的だ。

すると、警告音が聞こえる。異常事態だからこの部屋を閉鎖するらしい。

「人類の未来を消させる訳にはいかない。君たちも速く避難するんだ！」

いち早く正気に戻ったロマンは来たところを戻っていった。

「おい、藤丸君、君も速く避難するぞ！」

隣に声をかけ避難させようとしたところどこにも彼はいなかった。

あれ、さっきまでここにいたよね？

「マッシュー……！」

いないと思つたら瓦礫の中へと彼が進んでるところだった。

「馬鹿野郎！ 速く戻らないとここは閉鎖されるんだぞ！」

「けど、マッシュが！」

マッシュとは確かカルデアの職員の人だったはず。

その間にも藤丸君はどんと奥に進んでいく。もう間に合わないだろう。

ちくしょう、もう知らないぞ！

仕方ないと心の中で呟きながら来た道に戻ろうとしたところ、身体が動かなくなつた。

!?! この現象は、まさか!?

俺は何度も人生を体験していく中で何度もこの経験をした。そして決まってこの現象が発生したのは英雄が運命の分岐点に差し掛かる時だ。例えば、アルトリアが聖剣を抜いた時など。これはあの神なる存在がやったことだと確信している。この状態になつたら俺は必ず出会う。

では、この場で英雄へとなる可能性があるのは、彼、藤丸立香だろう。

ならば、俺はここから逃げ出すことは出来ないだろう。俺は諦めながら座る。唯一の出口であつた扉も閉まつた。すると何かアナウンスの様なものが聞こえてきた。内容がうまく聞こえなかったが俺の名前と藤丸君の名前が聞こえた。どうなることやら、と考えていると意識を失つた。

そして、目を覚ますと炎上していた部屋から炎上している町へとジョブチェンジを果たした風景があつた。

ここどこ? 周りを見渡しながら歩いていると身体が何か黒い人がいた。

「すみませーん、ここどこですか?」

「フハハハハハハハ、マダココニモ獲物ガイタトハナ」

「…… すみません、人違いでした」

あかん、この人話し通じない人や。一瞬で悟った俺は走り出した。

「逃ガス筈ナカロウ！」

何か薙刀の様な物を振り回しながら追いかけてくる謎の男。追いつかれたら死ぬだろう。

「ちくしょう！ 誰でもいいから助けてくれ〜」

叫びながら走っていると前にロープを深く被った男が急に表れた。

「そのまま、走れ——」

やる気のなさそうな声を出した男は昔見た覚えがある杖を出して炎を出した。

あれはルーン文字か！ 俺を追いかけるのに夢中だった謎の男は炎が直撃して、そのままさらさらと砂のようになって消えた。それをどこか別世界のように思いながら見ているとフードを被った男が話しかけてきた。

「普通なら男なんて助けないが今回はサービスだ、運が良かったな兄ちゃん」

「ああ、助けてくれて感謝する。命拾いしたよ」

感謝を述べながら手を出す。向こうも応じるように手を出してきて握手する。その時顔が見えた。その顔は俺が知っている者だった。

「セタンタ……」

「あん、お前に名乗った覚えはないが……」

セタンタ、またの名をクー・フリーン。彼はケルト神話に出てくる英雄である。なかなかはやめちな人生を送った。彼の人生を本にしたのも俺でありその関係で彼は結構な馬鹿をやった関係である。

そして彼の隠してほしそうな物語も書いてしまったのだ。もちろん彼からは了承をもらった。酔っ払ってる時にだけだ。

だから、バレたら殴られるかもしれん。よって知らん顔をしておこう。

「いや、その杖見たらピンと来た感じかな。それと俺の名前は夏目春樹だ」

「……まあ、いいか。ここではその名を呼んでくれるな。キャスターと呼んでくれ」

「オーケー」

「で、なんで生きてる人間であるお前がここにいるんだ？」

俺自身が不思議だが、自分に起こったことを軽く話した。

「なるほどねえ、じゃあ、あつちでドンパチしてるのもお前さんの仲間か？」

「さあ？ 見てないから分からない」

「それもそうだな。俺は気になるから今から行くがお前さんはどうする？」

「野暮なことを聞くな、付いて行くに決まってるだろキャスター」

「……ふはははは、こいつはいいや。よし行くぞ！」

「あいよ！ どうやって俺を連れていくの？」

「あん、そんなもんこうやってに決まってるだろう!!」

クー・フリーンは俺を担ぐと思いつきジャンプして移動した。その移動方法は戦闘力がほとんどなかった俺を面倒事に連れていくときにクー・フリーンが俺によくやってきた行為だった。

第三話

「や、やめ。降ろしてくれ——!!」

「あつはつはつはつは、あいつもよく叫んでたな!」

高所から落ちていくあの身体がふわつとする感覚を味わいながら落下していく俺とクー・フリーン。覚えてろよ、歌を歌って恥ずかしい目に味わわせてやる。

担がれたまま目的地に到着する。

「よ、よかった。死んでない。生きてる? 生きてる?」

「いや、死んでるね」

「死んでるのはお前だよ。そして今回も死ね!」

「それは無理な相談だなマスター」

「誰がマスターだ。そして俺がマスターなら言うこと聞け!」

「そいつは無理な話だ、それに奴さんも睨んでるぜ」

クー・フリーンが指差した先にはまたまた黒い人と、ぼろぼろになったエロい格好した嬢ちゃんとオルガ・マリー、そして藤丸君がいた。

どう見ても襲われています、はい。

「さてと、ここでお前さんはどう命令するんだ？」

どこか試すような口調で尋ねてくるクー・フリーン。

「逃げろって言ったら逃げるのかい？」

「分かっているんだろ、俺がどういうやつか？」

こいつはどんな存在になってなっても変わらない。俺は笑いながら言った。

「突っ込んでこい、馬鹿野郎」

「あつたりめえよ!!」

クー・フリーンは嬉々として黒い人に突っ込んで行った。それを見ながら藤丸君たちに話しかける。

「藤丸君、それにマリーも無事でよかった」

「夏目さん、無事だったんですね」

「何とかな、それにマリーも無事だったんだな」

「当り前でしょう!! けど、あなたが来てくれたことに感謝しているわ」

オルガマリーとは年齢が近いことから仲良くなつてよく話す関係になった。向こうは俺のことをどう見てるかは分からなかったが、俺から見てマリーは親戚の子供のよう
に思えて、甘やかしてしまったのだ。

彼らと話しているとクー・フリーリンが再び敵を燃やして勝利した。あいつ、なんでも燃やすな。この町が燃えた原因もあいつがやりすぎただけじゃね？

疑っているとクー・フリーリンがエロい嬢ちゃんにセクハラしながらこつちに来た。俺にも触らせて下さい、お願いします。

「先生も無事だったんですね、安心しました」

「おう、何とかな。君も無事でよかったよ」

一応、勉強を教えていたのでマスター候補生から先生と呼ばれている。

全員が集まったので軽く話し合っていると、通信が繋がりがりロマンも加わり話しあった。

まとめると、やはりカルデアのマスターは藤丸君を除き全滅。他にも被害が大きいこと。そしてここにいるメンバーでこの特異点の異常を解決して修復しろとのこと。

俺は関係ないなー、と思っているとクー・フリーリンがある点を言いなおした。

「おい、ひよろいの。マスターはここにもいるぜ」

それは誰だい？ 誰もが疑問に思いながらクー・フリーリンを見ると、奴は俺を指差した。

「こいつだ、夏目もマスター候補だ。実際に俺と契約してるし」

「え？ 何してるのお前？ なんで毎回俺を巻き込むの？ 髪の毛筆るよ。お前のゲイ

ボルグ当たらないってみんなに広めるよ」

「そう、怒りなさんな。あれは必要なことだったんだ。それと俺のゲイボルグはちゃんと当たるからな」

「自分の心臓に？」

「そうそう俺の心臓に……アンサズ！」

「頭が、髪が燃える〜！」

笑顔で火を放たれたことにより俺の頭が燃える。あついで、誰か消して！

「転げまわっていると藤丸君が服をばさばさして消してくれた。クー・フリーン怖いよ。」

「ま、まあ春樹がマスター適性があるということはそれだけ藤丸君の負担が減るってことだ」

「そ、そうよね。今はこんな状況だもの。人は多い方がいいわ」

「その先生が燃えているのですが……」

「いいのよ、あれはサーヴァントとのコミュニケーションだから」

お前ら許さん。

頭の火から解放され、軽く天パ状態になりながら会話に戻る。今日はもう疲れたと言うことで近くの学校で休むことになった。

そして学校で藤丸君とマシユちゃんが寝る中マリーと話す。

「マリーが無事でよかった。管制室が火の海になってたから正直諦めてた」

「……そんなことないわよ」

「え？ どういうことだ？」

その時見たマリーの顔は死ぬことを決めた時の顔をしていた。

「だって、私は死んでるもの」

血の気が引いていくのを感じる。

「あなたは知らないかもしれないけど、もともと私はこうやってレイシフトできなかったの。けれど、こうやって出来ている。おそらくだけど死んだ関係でできたのかもしれないわ」

「じゃあ、マリーはこの特異点を修復したら……」

「もう仕方ないのよ。私は神様なんて信じたことなかったけど、これは神様がくれた時間なのかもしれないわ。これから助けることができないう藤丸とマシユを助けるためのね」

「けど!!」

「春樹もあの子たちのことよろしく頼むわね。あなたを教師として呼んだのにこんなこ

と押しつけてごめんなさい」

納得できない事もある。いや、納得できない事しかない。けれども彼女が覚悟を決めたのだ俺も覚悟を決めるべきだ。

「……ああ、任せとけ。こう見えてもいろいろ無茶をやってきたんだぜ」

「ふふ、あなたただの小説家でしょ。何言ってるのよ」

泣きそうに笑いながらマリーは空を見た。俺も釣られて空を見た。この空は何も見えない。

第四話

心の中に納得が出来ない感情がありながらもその日は寝ることにした。何度も見て来たのだ例え命に変えてもやらなければいけないことを。そしてそれをやってきた英雄たちを。

そして次の日、クー・フリーンからマシユちゃんの宝具のことや、敵の親玉がアーサー王であることが聞かされた。

俺知ってる。その人めっちゃ知ってる。会いたくない感情に支配されながらも諦めて進む。そして、俺たちは近くの山に到着した。その山の中に変な洞窟があった。

小学生ぐらいなら肝試しに使えそうだなどのんきに思っていると後ろから声が掛る。

「ココから先には行かせんよ」

出て来たのは浅黒い男であった。凄い筋肉が盛り上がっているな。

「おっと来なされた。アーサー王のファンだぜ」

「別にファンになった覚えは無いのだがね」

「知り合い？」

「ああ、アーチャーだ。いつでも気に食わない奴だよ」

凄く嫌そうな顔をするクー・フリーン。馬が合わないのだろう。

「さて、こいつの相手は俺がする。先に行け！」

「行かせると思うか？」

「逆に聞くが俺が何もしないと思うのか？」

おお、火花が散ってる。これは熱い戦いになるぜ！

観客気分で二人を見てみると、藤丸君たちは洞窟の中へと進んでいく。どちらを見るか迷ったが俺も着いていこう。

そう思い歩きだしたら、クー・フリーンに肩を掴まれた。

「おいおい、マスターがサーヴァント置いて行く気か？」

「おいおい、サーヴァントがマスターを戦闘に巻き込むつもりか？」

にやっと笑うクー・フリーン。

「当り前だろう」

「やっぱ、お前死んだ方がいいよクソ犬」

「俺は飼い主がいないと寂しんだよ……避ける！」

「緊急脱出！」

クー・フリーンと話していると俺たちに向かつて攻撃をしかけてくるアーチャー。俺の知ってる矢と何か違う！

「こっちは急いでいるんだ！」

「はっ、かかってこいよ！」

自慢の杖を燃やしながら槍のように振り回すクー・フリーンと剣を持って迎撃するアーチャー。俺の知ってるアーチャーとキヤスターとなんか違う。

そのままジャンプして離れていく二人。洞窟の前に置いてかれる俺。あいつは何がしたかったのだろうか？

疑問に思っていると頭に声が聞こえてきた。

『すまん、無理やり連れていくつもりだったがミスった。もう戻るの面倒だから先に行ってくれ』

『お前、いい加減にしとけよ。ひとりぼっちとかこっちは泣きそうだぞ』

『こういうのも慣れっこだろ、相棒』

『……ああ』

相棒とは懐かしい呼び方をしてくれる。もしかしたら気付いているのかもしれない。けど、あいつ頭悪そうだしないや。

それじゃ、行くかと洞窟を進んでいると広い場所に出る。そこではマシユちゃんと黒

なくなったアルトリアがいた。

マシユちゃんにはボロボロになりながらも盾を構えていた。その盾からは不思議な模様がでていた。これがクー・フリーンが言っていた宝具の開放と言う物なのだろう。一方で黒いビームを放つアルトリア。

状況は分からないが攻撃を防ぎきったようだ。それにしてもあの格好どつかで見たな。

そう思っていたら俺の頭に稲妻が走った。あれは一時期黒色にハマったアルトリアがしていたコスプレの格好ではないか。俺が小さい子供を見るような目で見ているのに気付いたアルトリアが泣きながらビームを放ってきたのはまだ覚えている。

あいつ、あの格好気に入ってたんだな。

少し生温かい目で見ているとアルトリアがじつと俺を見ていた、怖い。顔を引き攣らせながらアルトリアを見る。

「……その男名前は？」

「藤丸です」

俺が来たことに少し驚きながらも藤丸君はすぐに言い返してきた。

「ちよ、夏目さん勝手に俺の名前を名乗らないでください！」

「……オルガマリーです」

「私の名前も止めてよ、春樹！」

「春樹と言うのか。貴様の目線がかなりイラツとした。よつて貴様から殺してやる」

目線で殺すなんて言われたの初めて。

「どんな目で見ていたのよ！」

「見てない、見てない！ そんな変な目で見てないよ。ただ、変わった格好をしているなつて」

「夏目春樹という名前は先ほど聞いた。アーサー王は女装の変態だと広めた者の名前だったな」

「……同姓同名ですよ」

誰だ、こいつに俺の名前出した奴。殺してやる。

「あの時は男であると書いていたと思つたのだがな」

ぼそつと呟いたアルトリアの声にびくつとなる俺。もしかしてばれたのか。確かにあいつは勘のいいやつだったが、ばれるはずはない。

「まあいい。私ができることは決まっている。ここで貴様らを滅ぼすことだからな」

何かやばそうな黒い光を剣に集め出すアルトリア。再び防ごうと盾を構えるがボロボロで立っているのもやつとなマシユ。

万事休すと思つていると声が聞こえた。その声の命令に従いすぐに叫ぶ。

「来い、キャスター!!」

「待たせたな! ほら、速く次のも言え」

「宝具を放て!」

「あいよ!」

何か呪文らしきもの唱えたと思つたら樹の巨人が出てきた。あれって、悪趣味な処刑道具じゃね?

そう思っていると予想以上に素早い動きをした樹の巨人に捕まりアルトリアは燃やされた。

どうやら、いきなりで対応が出来なかつたようだ。知っている者同士が戦うのを見るのは正直きついが、これからも起こることだろう。

いきなりであつたがこの戦いは俺たちの勝利で終わったようだ。

第五話

決着がついた。それはあまりにもあつきりとした終わりだった。が戦いとはこういうものなのだろう。

クー・フリーンが放火した場所の火は段々と消えていきアルトリアの姿が現れる。と
ころどころ焼けているがまだ生きているらしい。

勝負つてあつきり終わらない時もあるよな。

「こういう風にやられるとは思ひもしなかったぞ光の御子よ」

「人生、何が起こるか分からない事の方が多いだろうよ」

「そうだな」

二人の話しが終わったのかこちらへと顔を向けるアルトリア。一瞬俺を睨みつけてきたがすぐにマリーや藤丸君たち方へ向く。

俺は何もやってないよ。今回は。

「お前たちの勝ちだ、マスターたちよ。しかし、グラントオーダー、聖杯を巡る戦いはまだ始まったばかりだ」

うそん、まだ続くのこの戦い。

「しかし、私に勝った褒美だ受け取れこの聖杯を」

そしてどんどんと何故か俺に近づいてくるアルトリア。いや、来ないで！ 藤丸君たちと離れどんどん後退する俺の手を掴み何か不思議な水晶体を俺に渡してきた。

これには厄介事の匂いがある。速く藤丸君に押しつけよう。そう思い移動しようとしたがアルトリアが手を離してくれない。すると、顔を俺の耳元に近づけてぼそつと言った。

「覚えておいて下さいね兄さん。あなたが女装癖の変態と言ったこと後悔させてあげます。これが最初の仕返しです。気を付けて下さいね」

「お前は相変わらず物騒だな。それと何に気を付けるの？」

尋ねたがアルトリアの身体が粒子のようになって消えて行つた。最後まで教えてよ。軽く次に何が起こるのか恐怖していると今度は藤丸君たちと話していたクー・フリーンが来た。

「お前と会えて本当によかった。それにあの坊主たちともだ。もし呼びだすことがあったらランサーで呼んでくれよ相棒」

「ランサーで呼んだらお前の攻撃当たらないでしょ？」

「んなことねえよ。じゃあ、またな」

「ああ、またな相棒」

俺の相棒と言う言葉に少し嬉しそうにしながらアルトリアと同じように消えていった。

ふう、疲れた。こんなことがこれからも続くと思うと鬱になるな。そう思いながら白い獣、名前はフオウだったかなを撫でているマシユたちのところに行く。

「お疲れ様、藤丸君、マシユちゃん、マリ―」

「はい、お疲れさまでした先生」

「お疲れ様です」

みんなが俺に返事をする中マリ―だけはぶつぶつと考え事をしていた。

「おい、マリ―」

「あつ、ごめんなさい。少し考え事をしていたわ」

「所長、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ」

藤丸君が心配する中で俺は暗い顔をしていた。ここでの修復とやらは終わったということはマリ―と別れるということだ。これから待っている残酷な未来に悲しくなっている上の方から声が聞こえてきた。

「いやはや、まさか君たちがここまでやるとは想像もしていなかった。まったくもって想定外だよ」

「レフ教授!？」

「何、レフ教授だつて!? そこにいるのかい?」

驚いた声を出すマシユちゃんと言。俺だつて驚いている。だつて、彼はマリリーの近くにいたはず。つまり巻き込まれ死んでいるはずだ。なのにこんなところにいるはずがない。

そう思っているとマリリーが嬉しそうに前へ進み始めた。

「レフ、生きてたのね! みんなが死んでカルデアもあんなことになってどうすればよかつたのか分からなかつたの!」

「所長待つて下さい!」

「マリリー! 許せ!」

やばいと感じた俺はマリリーに追いつきそして飛びこむように彼女の足を掴んだ。

「ぶへえ!!」

いきなり足を掴まれたことにより顔からダイブするマリリー、かなり痛そうである。

「何するのよ春樹!!」

「怒るのは当然だが落ち着け。いきなりこんなところから出てくる奴はおかしいに決まつてるだろ」

「レフは、レフはそんなことない!」

「いいや、オルガ。彼が言っていることは正しいよ」

「レフ？」

「全くもって腹立たしい。ロマニも殺したつもりだったのに生きています。そして残りカスだと思つて見逃していた最後のマスターがここまで活躍した。そして何よりもただの物書きであるお前がここにいることが不愉快だよ」

目をぎよろつかせこちらを睨むレフ。俺だつてここにいたくていたんじやないよ。言いたいけどもう少し黙つておこう。

「さらに、オルガ、死んでいるはずの君がここにいることも許しがたいことだ」

レフ教授のマリーが死んでいるという発言に驚くマシユちゃんたち。

「さて、すでに死んでいるオルガに見せたいものがあるんだ。それにはお前が持っている物が必要なんだ。だからそれを返してくれないか物書き」

「それつて何だ？」

「君がアーサー王からもらった物だよ。それはね俺にとつてとても大切な物なんだ」

「これはそんなにいいものなのか？」

アルトリア、嫌がらせで渡してきた水晶のことかな。こんなものを渡してきた辺り後世に変態と伝わったことを根に持っているのだろう。

「ああ、それは聖杯と言つて願ひ事が叶うものさ」

え？ マジで？ そんな便利な物だったのこれ。じゃあ今使えばいいんじゃない。

一瞬で閃いた俺はすぐに声に出した。

「マリーを生き返らせてくれ!!」

俺が言ったとたん聖杯が輝き、そしてマリーの姿が消えた。失敗したか？ そしてそれを見ていたレフ教授が震えだした。

「……き、き、貴様よくも、よくも、そんな下らないことに聖杯を使ってくれたな!!」

さきほどの穏やかな話し方を止め荒ぶる口調へと変えた。先ほどから言いたいことを言ってくるこいつに少しでも言い返そう。

「やかましいわ！ 目の前に願う事が叶うものがあつたら誰でも願う事だろうが！ ドラゴ○ボールでもギャルのパンティを欲しいって言つてただろ。誰かが願うかなえる前に回収しなかつたお前が間抜けなんだよ！」

「き……や……ま」

「もう一つお前のミスを教えてやるよ。それはな藤丸君を残したことだ。俺には分かる。こいつは英雄になる！」

「ふははは、英雄になるだと？ すでに人類に未来が無いのにか？」

「だからなんだ。人類つてのは未来があるから生きてるんじゃない。生きてきたから未来があるんだ」

「なるほど、物書きらしい言葉使いだな。だが宣言してやろう。人類は滅びの運命にあるとな」

「なら、物書きらしく俺も言つてやろう。今から始まる物語。この物語は必ずハッピーエンドで終わる。そうだな物語の名は滅びの運命に抗う物語。先ほどのアルトリアの言葉を借りてこう名付けよう」

藤丸君がマシユがレフ教授が見てる中で俺は叫んだ。

『Fate／Grand Order』とな！」

「そんな物語今すぐ終わらせてやる！」

レフが何かしようとした瞬間洞窟が崩れ始めた。なんだこれは？

「ちっ、この特異点も限界か。次にきさまに会った時は殺してやるぞ物書き。ここで死ななければな」

そして消えていくレフ。

「洞窟が崩れます。いえそれよりも空間が!? ドクター! 速くレイシフトをして下さいー!」

「ごめん、頑張つてるけども間に合わないかも。その時は意識を失わないように気合いで耐えて。ほら宇宙空間でも少しは生きれるだろう?」

「もう黙って下さいドクター。怒りで殴りたくなります」

何か二人が漫才みたいなことをしている間にどんどん崩れていく洞窟。そして俺の足元が崩れてきた所で意識を失った。

第六話

「……頭がいてえ」

酷い頭痛に悩まされながら目を覚ます。周りを見てみるとどうやらカルデアの医療室のようだ。無事に帰ってこれたということだろう。

本当に良かった。それより他の人たちが気になるな。

ベッドから立ち上がり部屋を出る。ここは吹雪が吹いているせいかな朝なのか夜なのかわからない。

そのままぼーっと歩いていると第一村人発見。

「おつす、ロマン。元気？」

「ああ、元気だよ、つて春樹！ 目を覚ましたんだね！ よかった。今から見に行こうとしてみたんだよ」

「おかげさんでな。それでみんなは無事か？」

「ああ、みんな無事に帰還したよ。それに所長もちゃんと生き返ったよ！ 本当に信じられないよ。まさしく奇跡だね」

「そりや、本当によかった。生き返ってなかったらレフに無駄に恨まれることになるからな」

軽口を叩きながらマリーが生きているという事実には涙が出そうになった。

「レフ教授かあ」

ロマンが悲しそうに呟いた。俺自身は彼とはあまり関わらなかつたがロマンは共に研鑽した仲だ。いろいろ思う所があるのだろう。そしてマリーも。

「あつ、君に伝えることがあるから今すぐ管制室に来てくれないか？」

「あいよ」

返答して、共に移動する。そこには藤丸君やマシユちゃん。そしてマリーがいた。ついでに新人類ダヴィンチさんもいた。

「夏目さん、目を覚ましたんですね！」

「おはようございます先生。無事でよかったです」

「ああ、みんなも無事でよかったです」

みんなに声をかける中でマリーが泣きそうな顔をしながら俺の胸元に飛び込んできた。

「春樹、無事でよかつた！ 目を覚まさないから死ぬほど心配したじゃない！」

「そりや、悪かつた。ただこうして目を覚ましたんだ許してくれ」

「いいわよ。ただし、お礼を言わせなさい」

「言うなら笑顔でな。小説家は笑顔のハッピーエンドが好きなんだ」

マリーは泣き笑いしながら言った。

「ありがとう！」

「おう！」

この笑顔なら命をかけた価値はあったと思うな。

「さて、感動の再会をしているところすまないが、少しいいかい」

「それは無粋すぎるでしょ、ダヴィンチさん」

「もちろん分かっているさ。しかし、事態は思った以上に切羽つまっている状態だからね。すまないが話させてもらうよ。ということでもロマンよろしく」

「ええ!! ここで僕に振るのかい? まあ説明していくよ」

おそらくだが、泣いているマリーに代わりロマンが任されたのだろう。

そして、説明された内容をロマンの説明が長かったのでまとめると、人類はマジで滅ぶ5秒前レベル。

今このカルデアの周りは何も存在していない。つまり、外部とは連絡が取れないということ。

よってこのままだと人類は滅びるが、その運命を変えるために過去に存在する人類の

ターニングポイントで起こった異常を七つ修復しなければならない。

これができるのは俺たちだけだということ。

「マスター適性者48番、藤丸立香。そして特別顧問、夏目春樹。両名に告げる、僕たちが人類を救うのなら、2016年より先の未来を取り戻すなら、君たちはこれから、七つの人類史と戦わなければならない。その覚悟はあるか？ 君たちにカルデアの人類の未来を背負う力があるか？」

「自分にできることなら」

「俺も出来ることはするさ」

覚悟を決めた俺たちの顔を見て満足するロマンとマリィ。そして落ち着いたマリィが言った。

「では、人類の未来を守る戦いの作戦名を伝えます。カルデアが行う作戦名を春樹の宣言を借りてこう名付けます。人理守護指定・グランドオーダーと。私たちは必ず人類の未来を取り戻します！」

「はー」

全員が同意して気合を入れた。これは藤丸君が英雄になる物語。そして俺が歴史を紡ぐ物語になるだろう。

でも勢いで同意したけど、俺は冒険に出ないでここでずっと藤丸君の物語を見ときた

いな。雰囲気的に何も言えないけど。

「それじゃあ、次の特異点の対策のために英霊を召喚しようじゃないか」

そして、ダヴィンチさんの提案により召喚することになった。

「召喚できる回数は三回！ 春樹は二回。藤丸君は一回召喚しよう」

「分かりました」

「分かった」

そして召喚専用の部屋で召喚を開始。まずは藤丸君からだ。

「特異点で回収したこのきれいな石を使えば召喚できるよ」

「はい!!」

藤丸君が意気揚々と石を使った。すると、出て来たのは浅黒い人物。前の特異点で見たアーチャーだった。

「アーチャー、召喚に応じ参上した。これからよろしくな」

「こちらこそ、よろしく」

仲良く握手する二人。いきなり狙われたトラウマがよみがえる俺。

「さあ、次は君だよ。春樹」

すると、俺の背筋に寒気が走る。

「……やりたくないっていうのは」

「なしだよ」

「ういす」

嫌な予感がする。お願いだから普通なのきて。

願いながら石を三個使う。そして出てくるサーヴァント。

「問おう、殴られる準備は出来てるか？」

出て来たのは最後に物騒な発言をして消えたアーサー王ことアルトリアだった。

「ごめん、ダヴィンチさん。部屋に忘れ物したから帰ります」

「残念、逃がしません！」

「ぐはー」

気持ちのいいボディーブローが直撃した。だから召喚は嫌だったんだよ。俺が倒れている横でマリーがアルトリアにいろいろ質問している。主に前の特異点で記憶があるとか何とか。

それよりも俺の心配してくれよ。泣いていると、誰かが背中を擦ってくれた。誰!?

「大丈夫か？」

心配してくれたのはさつき召喚されたアーチャーだった。やだ、かつこいいい。

「藤丸君がいいなら、この青いアホ毛とアーチャーを交換しないか。いやして下さいお願いします」

「それは……ちよつと」

「お願いだからよく。してくれよ」

「兄さん？」

「すまん、今の話は無かったことにしてくれ。俺は最高のパートナーを当ててしまったな。ははははははは」

妹が怖い。

「さて落ち着いてきた所で次もいってみよう」

促されて再び入れると出て来たのは前と違い青タイツを履いたクーフリーンだった。

「召喚に応じてやってきたぜ相棒！」

「……イメチェンした？」

「馬鹿野郎、これはランサーの格好だよ」

「攻撃当たらないの引いちゃったなあ」

「そのネタはもうしつげーよ」

笑いながらハイタッチする俺たち。こうして再び会えるのは嬉しいものだ。

しかし、前に出会ったこいつらを召喚するとは思っていなかったなと考えていたらダヴィンチちゃんが補足してきた。

「おそらくだけど、前に出会ったことによって縁が出来たんだろう」とのこと。

縁なら他にもあるかもしれないが、まあ時間が近い縁が優先されるのだろう。

そういうことなら、これから先の特異点で新たな出会いをしていったら召喚に応じてくれるかもしれないな。

「さて、こうして戦力の強化も出来たんだし、次の特異点を観測したらすぐにも行ってもらうわよ」

「はい!!」

こうして俺たちの戦う準備は特に何も無く（俺は殴られたが）終わったのだった。

第七話

カルデアの深夜、とある一室で三人の男女が集まっていた。

「やはり、所長のレイシフト適性は無いままですね」

コンピューターを触りながら言ったロマンに対してオルガマリーはさして残念そうな顔をせずに頷く。

「まあ、予想通りだわ。もともと無かったのに死んだら適性が出来るなんてありえない話だもの」

「しかし、君が生きているなんて信じられないよ。あのレフが持っていた聖杯という代物はすごいな。まったく研究したくなるよ」

聖杯に対して興味を示しているダヴィンチを無視して二人は話を続ける。

「ところで春樹に聞いてくれましたか、あのこと？」

「ええ、聞いたわよ。でもはぐらかして何も答えてくれないのよ」

「やはりですか」

どこか納得したように頷くロマン。

「何が前世家からの知り合い、よ馬鹿にして」

「しかし、話してくれない理由も謎ですが、春樹がアーサー王の名前を知っていた点も謎ですよ」

「そうそう、アーサー王の方も兄さんって呼んでたのも気になるのよね」

「召喚の時にぼそつと言ってたやつですよ。他にもレイシフト中の映像を見直していたのですがクーフリーンとの仲も初めてにしては仲が良すぎるんですよ」

「そうそう。本当に謎よね。いつかは話してくれると思うのだけど」

「その時を待つしかないですね」

二人が残念そうにしていると聖杯から二人の話しに興味を持ったダヴィンチが微笑みながら言った。

「いやいや、実は本当のことを言ってるかもしれないよ、お二人さん」

「? それはどういうことよ?」

「だから、前世から知り合いつてやつさ。意外に過去から現代に生まれ変わっている者もいるかもしれないってことさ。ねえロマニ」

その言葉にびくりとロマンは身体を反応させる。

「う、うん。その可能性も無きにしても非ずかな」

「どうしたのよ、焦った顔をして」

「何でもないですよ所長！」

不思議に思いながらもどうでもいいかと思考を切り替えるオルガマリー。結局この日は夏目春樹に対する疑問は解けないのであった。

ところ変わって、ある個室でアーサー王とクローフリーンが話していた。

「しつかしあの時殺しあっていた俺たちがこうして協力して世界を救うなんて驚きだねえ」

「全くです。しかし世界が滅ぶのなら何とかしなければならぬのも事実です」

「分かっているよ。まあ今回は良いマスターに出会ったんだ。存分に暴れさせてもらおうとするわ」

感慨深そうに頷く二人。するとアーサー王、アルトリアが思いだしたように尋ねた。

「そういえば、あなたは兄さんと知り合いのようですね？」

「そういうお前さんもな。どうやって知り合った？」

「私の場合は生まれた村が同じで共に育ったのですよ。血は繋がってませんがよく世話をしてくれました。そういうあなたは？」

「俺の場合も似たようなものだ。生まれた所が同じでよく一緒に馬鹿やった仲だ。と言っても何かしようとしたらあいつ変な察知能力を発動して逃げるもんだから同行さ

せるのに苦勞したもんだぜ」

「私の時もよくケイ兄さんと遊びに誘ったら逃げ出していましたね。口癖のように☒お前らといたら痛い目に合う☒と言っていましたよ」

「奇遇だな。俺の時も言っていたよ」

二人でおかしそうに笑う。

「そうですか。そういえば兄さんはよくあなたのことを話していましたよ」

「おつ、なんて言っていた？」

「無謀と言う字を人の形にしたらあんなやつになるって」

「あははははは、そりやあ適切だな。さすがは小説家だ」

「あなたの時もですか？」

「あん？ あんたの時もか？」

「ええ、私が王になった時に☒お前の物語書いたら売れそう☒って言って書いてましたね。もちろんいらぬことまで書いてましたが」

「俺の時もだよ。槍は絶対に当たってると言って外した時からよくお前の槍は当たらないって笑われたもんだ」

「相変わらず、どこでも話を書いているんですね」

「だろうな。案外俺たち以外の英雄とも知りあいだったりしてな」

「ありえそうだから兄さんは怖い」

「あいつは面倒事の神様に好かれてるんだろ」

「そうでしょうね」

そうやって昔話に花を咲かせていくのだった。

「ぶえつくしよん！　ぶえつくしよん！　くしやみが二回……誰か俺の噂してるな」
一方、噂をされていた男、夏目春樹は無駄に高い察知能力を発揮していた。

英雄と二人の聖女

第八話

ある日、第一の特異点が発見された。よってさつそくレイシフトを行うことになった。

特異点でやることは主に三つ。聖杯の探索、特異点の修正、召喚サークルの設置だ。まあマシユちゃんやんがやってくれるので俺は藤丸君のサポートさえすればいいだろう。

「では、さつそくレイシフトに取りかかるよ。ちなみに藤丸君達はしっかりと僕たちがサポートするよ」

「私も共にサポートするから安心してね」

サポートにマリーがいると安心できる。ロマンよりかはしつかりしてそうだし。しかし、初めてのレイシフトだ。どの時代に行くのだろうか。不謹慎だが違う時代に行くというSF体験にわくわくしている俺がいる。

胸の高鳴りを抑えながら俺たちはレイシフトした。

目を覚まして辺りを見回すとアルトリアやクー・フリーン、藤丸君たちも無事にいた。ちやんと成功したようだ。

安心していると藤丸君とロマンの会話が聞こえてきた、そして空を見るとどつかい光の輪があつた。あれが異常の原因っぽいとのこと。

そんなもん見たら分かるわ！ 心の中で突つ込みながら歩いていると歩兵を発見。

「あれは倒すべきエネミーでは？」

「いや、俺には前にやらせてもらったゲームに出てきた××こは○○の村だよ××つていうやつにしか見えないぜ」

「私の考えでは初めに主人公の前でやられる脇役かと」

三人で悩んでいるとマシユちゃんが言ってきた。

「とりあえず殴って捕まえましょう。峰打ちなら可能なはずです」

そう言つて走り出すマシユちゃんとその後ろで呆れたように溜息をつくエミヤ（アーチャーの名前を教えてもらった）の二人に任せて俺たちは傍観する。

「盾に峰つてあつたつけ？」

「あんなもん全部峰だろ。でも、あんなもんで殴られたなら死ぬよな」

「だよな。マシユちゃんの理論つてどつかの侍の逆刃刀で殴ったから死にませんぐらい無茶あるよな」

見ていると上手いこと峰打ちしたらしく兵はびびりながらどこかへと走って行った。

「……あの兵士、すごく丈夫だな」

「……ああ。痛がりながら全力疾走してるもんな」

「二人とも何をぼうつと見てるのですか！ 早く彼らを追いますよ」

アルトリアに促されて、兵を追いかける藤丸君たちを追いかけたのだった。

そして到着したぼろぼろの町と負傷した兵たち。戦争は今休戦中のはずなのに不思議である。

「ほれみろ、やっぱり町に案内してくれる奴だっただろ」

「いえ、まだ諦めません。ここから敵が出てきてあの兵士が襲われるはずですよ」

「お前らうるさい。藤丸君が話聞いているだろ。それとアルトリアの予想は当たりそうだから、そんな物騒なこと言うの止めて」

話を聞いていると火刑に処されたはずのジャンヌ・ダルクが蘇り、魔女となって王様を殺してそのままフランスを滅ぼそうとしているらしい。

記憶が曖昧だから確証はないが、聖女から魔女にジヨブチェンジって変わりすぎでしょジャンヌ。まあ、あんなことされれば誰だってそうするだろう。

ぼんやりと考えていると骸骨兵士が現れた。

「ほら、敵が現れて襲われたでしょう?」

そのドヤ顔腹立つな。それよりも。

「今回も手を出さないのか?」

「ああ、あれぐらいなら嬢ちゃんでも余裕だしな」

「ええ、彼女には成長してもらわなければなりません。何しろあの盾を持っているのですから」

最後にぼそつと呟いた声が俺に聞こえた。そういえば俺もあの盾見たことがあるよ
うな、ないような?

そう思っていると骸骨を軽くあしらったマシユちゃんが戻って来た。無事でなによりです。

その後さらに話を聞いてみると再び何か襲ってきた。

「なあ?」

「何だ?」

「あれって何?」

「そりやドラゴンだろ」

「そうか。なあ俺たちに向かって口を向けてね?」

「ああ、ありや火炎放射を出す前だな」

それを聞いた瞬間俺はダツシユで街のなかに走り出す。

「ドラゴンとかあほだろ！ 誰だよあんなもの呼んできた奴は？」

逃げる俺を背に会話が聞こえてきた。

「彼は何に怯えているのでしょうか？」

「あいつ、俺といた時に髪の毛をドラゴンに燃やされたんだ。それ以来ドラゴンが苦手なんだよ」

「どうりで、私が竜の因子を持っていると聞いた時に顔をひくつかせていたわけですか」

「まあ、今はそんなことどうでもいい。おら！ アーチャーちゃんと働け！」

「言われなくとも分かっている！」

「お前も働けよクー・フリーリン」

後ろを向いて叫んでいると誰かにぶつかった。

「いたっ！」

「ああ、すまん前を見てなかった……」

「こちらこそ、ぶつかってしまい申し訳ありませんでした。それよりも兵士たちよ、共に武器を持って戦って下さい！」

呆然と見ている俺を置いて勇敢にも前へ出て戦いに行った彼女は、俺がぶつかった相手は、死んで魔女になったとされていたジャンヌ・ダルク、本人であった。

第九話

無事に敵を殲滅した俺たちは突如現れたジャンヌへと話しかけた。

「あなたは？」

「私はルーラーのサーヴァントであるジャンヌ・ダルクです」

「ジャンヌ!？」

「それって魔女になったはずじゃ？」

「その話は後です。ここから移動しましょう」

不思議がる藤丸君たち。つまり、ジャンヌは二人いるってことだろう。

そう考えているとジャンヌが気まずそうな顔で移動を提案してきた。兵士と共にいるのが居心地が悪いらしい。

俺たちは同意して移動しようとしたところマシユちゃんにぼこられた兵士がジャンヌに話しかけた。

「やはり、今フランスを滅ぼそうとしている聖女は偽物なのですね？」

「……分かりません。もしかしたら私なのかもしれません」

「そうですか。しかし、私たちを守ろうとしてくれたあなたを見て私はあなたを信じてみようと思います。あの青年もそう言っていましたし」

「あの青年とは？」

「はい。何か不思議な青年でして数日前にふらつとこの街に来たのですよ。そして私たちにフランスを襲っているジャンヌは偽物だ。本物は王様は殺す可能性があるが共に戦ったフランスの民を襲うはずがない」と力説していたのですよ」

「その青年は？」

「分かりません。演説した後にここも危ないから逃げる」と言って走っていったので「分かりました。……相変わらずですね、あの人は。お話ありがとうございました。では私たちは行きます」

なんとなくだけで、その青年って俺っぽいなと思っていると話が終わり、俺たちは近くの森に移動した。

そこでお互いの事情を話し終えた俺たちは協力すること。そして敵の本拠地であるオルレアンに情報収集しながら移動するということまで決めて今日は寝ることにした。

藤丸君は疲れたらしくらしくすぐに寝てしまった。俺も寝ようと思ったが思うように寝付けなかつたのでサーヴァントたちの会話に混ざる。ちなみにマシユちゃん

ジャンヌは違う所にいる。

「どうした、春樹、眠れないのか？」

「ああ、寝かしつけてくれる彼女がいらないからな」

「なら、わ、私が一緒に寝てあげましょうか？」

「俺、包容力ある人がいいからパス」

「殺します兄さん」

「お、落ち着けアルトリア。美人な顔が台無しだぞ」

「その言葉は聞き飽きました」

いつも通り殴られる。

「で、この時代にもお前さんはいるのかい？」

この時代にもって、俺がいろいろ転生を繰り返していることに気付いたのか。……ま

あ、違う時代の人が出会ったら分かるよな。

少し驚く俺にクー・フリーンは続ける。

「さつき、兵士が変な奴の話をしてた時に反応してただろ？」

「……よく見てるな。さすが覗きのプロ」

「勝手に変なプロにするな。それで？」

「ああ、確かにいたよ。彼女と共に同じ村で育ったよ。戦争も衛生兵として参加した。

その後は彼女の人生を書きながらフランスから飛び出したかな」

「どうしてですか？」

「……分からない。たぶんだけど逃げ出したんだ。大切な人が目の前で処刑されて、その後は狂った友を助けることも出来なかった。だから逃げ出したんだ」

「……そうですか。それで彼女には話さないのですか？」

「話さないさ。今は忙しいからな。まあ、俺もそろそろ寝るわ。おやすみお二人さん」

少し無理やりだった話が切る。楽しい思い出もある。しかし、それと同じぐらい辛い思いでもあるのだ。ジャンヌが死んでからは大変だったのだ。

「ああ、さっさと寝ろ」

「おやすみなさい兄さん」

空気を読んでくれる二人。やっぱりお前らはイケメンだよ。

そんなこんなで翌日はなかなかの目覚めであった。

「では次の町に向かいましょう」

「はい！」

元氣よく返事をしたマシユちゃんに続き街に向けて歩いてみるとカルデアから通信が入った。出てきたのはマリーだった。

「あなたたちの行く先にサーヴァント反応が探知されたわ気を付けて！ ……けど物凄
い速さで遠ざかっていくわ。私たちに気付かなかったのね」

そのことに安堵している俺たちにマシユちゃんから不吉な情報が届けられる。

「街が燃えています！」

異常を探知した俺たちは街に急行したが、酷いものだった。生存者はなくドラゴンや
ゾンビが残っているだけだった。ジャンヌが顔色を悪くしていたが全員で敵を排除し
ていると再び通信が入る。

「気を付けて、先ほどの反応が戻ってきているわ！ 数は5しかもとてつもなく速いわ
！ 気を付けて！」

迫りくる敵に対して身構えていると現われたのはイメチェンした黒いジャンヌとそ
の仲間。

知ってる奴と知らない奴がいる。確かに何度も転生は繰り返して英雄に出会ってい
るがやはり出会えていない英雄もいるらしい。

俺がどのような基準で転生しているか分からないが、神様の気まぐれだろう。

それよりもあの黒いジャンヌはあの時のアルトリアに通じるものがあるな。などと
考えていたら普通のジャンヌが嫌いらしくポロクソ悪口を言う黒ジャンヌ（今命名）

二人で何度も言いあう。そしてどうやら主の声とやらが聞こえないらしい。俺的に

は元から聞こえてなかった説が強い。

やれどちらが本物だなんだと小難しい話は終わったらしく黒ジャンヌがサーヴァントをけしかけてきた。

俺の記憶が正しければヴラド三世と殴り愛聖女に……誰？

あのきわどい格好した人は知らないな。さすがにあんな格好した女性を見たことがあつたら思いだせる。

「よし、さっそく来たな！　ここは俺たちに任せときな！」

「やったれ！」

ヴラド三世の前にクー・フリーンが行き、SM女性の前にアルトリア、エミヤはデオンのもとへ、マシユはあの……名前は……何だっけな女の前に。そしてジャンヌが黒ジャンヌの前に立ったのだった。

第十話

アルトリアがSMの格好をした女性に対して一方的な試合をする中、ランサー同士であるクー・フリーンとヴラド三世は睨みあっていた。

「余に血を捧げるのは貴様か？」

「残念ながら違うね。お前さんは誰の血ももらえねえよ。ここで俺にやられるのだからな」

「やれるものなら、やってみせろ」

少し話したところで槍兵同士の苛烈な戦いが行われている。

違う、あいつは……、ヴラドはそんなこと言わない。確かにオスマン帝国の兵士を串刺しにした。でもそれは国を守るためであった。あいつ自身が血を、戦いを求めたことなどなかったはずだ。

しかし、実際にサーヴァントで召喚されたあいつは血を求めている。

「っは、やるねえー！　ここまでの腕だ。さぞ活躍した英雄だろう？」
「そちらもな」

お互いに実力を確認しながらも戦いを続ける。

「ランサー、そいつはヴラド三世だ！ 宝具とかは分からんが頑張れ！」

「なるほど、串刺し公か。さっすがマスターよく知っている」

「ほう、この少しの時間で余の真名に気付くとはやるな」

まるで人事のように話すヴラドに少しイラつく。

「何感心しているんだ！ お前も血が欲しいとか、らしくないこと言っていないでさっさと正気になれ！」

「……ドラキュラのモデルにもなった余に対して、らしくないか」

戦闘をしながら少し考え込むヴラド。

「そら、戦闘中に考え事している余裕があるのかい！」

「くっ」

段々押されていく中ヴラドはクー・フリーンとの距離を取り俺の方をじっと見てきた。

「あそこまで残酷なことをした余にそんなことを言ってくれたのは一人しかいなかった。そしてありえないと分かっているがそれでも余の勘が告げている、お前が余の友である」と

「……」

「ここで何と答えれば良いのか迷った俺が黙っているとヴラドは笑った。

「小娘に命令されてつまらないことをさせられたと思っていたが嬉しいこともあるものだな」

「ああ、それには同感だ。友に再び会えるつてのは嬉しいものだ」

「ほう、あいつは貴様とも友人関係だったのか」

ヴラドに対して同意を示したクー・フリーンがヴラドを遠くへ蹴り飛ばす。蹴られたヴラドは体勢を立て直しながらもすぐ近くに走って来たクー・フリーンへと反撃したのだった。

エミヤとデオンが均衡した戦いをしている中、デミサーヴァントであるマシユは苦戦していた。杖から出る謎の光を盾で防いでいるがじわじわと追い詰められている。

「がんばれ、マシユ！」

応援する藤丸に応えようと、反撃するチャンスをうかがっているマシユに後ろから声が掛る。

「マシユちゃん気を付けて！ そいつ今は聖女のフリしてボンオーマンみたいなことしてるけど実際は殴った方が強いから。脳みそ筋肉だから。竜を鎮めたつて言うけど本当は竜を拳で沈めただけだからね！」

「あ？ 誰だ今そんなこと言ったやつ！ ほこるぞ！」

急に荒々しい声を出した彼女に呆然とするマシユは、あることに気付いた。

「竜を鎮めた聖女？ 彼女はマルタですね！」

「そう、そんな名前だった！」

「おいてめえ！ そこ動くな鉄拳制裁してやる！」

「口調、誤魔化せよ！」

「……、動かないでください」

「遅いけどな！」

「やっぱり殴る！」

会話をしながらマルタは不思議な気分であつた。聖女なのにやることはフランスを滅ぼすことであつてげんなりしていたが、今しがたした会話は昔何度も繰り返してやつた気がする。

自分があの人のような言動をした時に☒頭、大丈夫？☒と失礼なことを言ってきた弟とのやりとりそのものだった。

自分やラザロが神を信じなさいと言つても☒……おつちよこちよいの神様つてかわいいよね。俺は金星の神様がかわいいと思う☒なんて馬鹿なことを言つていた弟だ。

その後には殴り飛ばしたがその話は置いといて。彼が自分の弟と重なるのは偶然ではないだろう。初対面の自分に対して真名をあてて脳筋とまで言ったのだ、あれはやはり

一番馬鹿だった弟だろう。

ならば殴り飛ばすのは確定ね。

なんとか目の前のサーヴァントを倒さないように狂化に抗いながら聖女マルタはそんな風に考えていた。

ところどころで戦闘が起こる中、戦場に突如ガラスの馬車が走りこんできた。

すごい、綺麗だね！

なんて考えていると出て来たのはマリー・アントワネットとモーツァルトだった。彼らのことはもちろん知っているがそこまで深い仲にはならなかった。

「ヴィヴ・ラ・フランス！ うふふふ、正義の味方として参上したわ！」

なかなか派手なセリフと共に突入してきた、マリー・アントワネットは黒ジャンヌに對して宣戦布告した。

「さて、私は革命を防げなかった王妃だけど、今回はフランスをあなたから守ってみせるわジャンヌ・ダルクさん」

「ちつ、あんなやつに邪魔されるなんて。全員撤退よ！」

そんな彼女たちの乱入に少し分が悪いと考えたのか撤退の命令を出す黒ジャンヌ。

「逃がすと思っているのですか？」

「あらあら、聖処女様は恐いですね。ええもちろん逃がさせてもらいます。ワイバーン！」

黒ジャンヌがワイバーンに命令する。各サーヴァントへと襲いかかるワイバーン。

トラウマが蘇る俺は逃げようとするが身体が動かなくなる。

「ただ、はたして神様は俺に何を望んでいるのだ。何？ このまま食われろってこと？ 藤丸君の物語をまだ一章ぐらいしか書いてないよ？」

そんなことを考えていると頭上に影がかかる。

そしてワイバーンに身体を驚掴みにされる。食べるつもりではないのかな？

「ちよ、何やってんだ馬鹿野郎！」

「また、逃げ遅れたのですか!？」

自分のサーヴァントから少しひどい言葉が投げられるが答えている余裕が無い。

「痛い痛い！ もつとやさしく掴んで！ こう見えてもデリケートなの俺。平成の日本で引きこもってたから！」

叫びも虚しく俺は救出されることなくそのまま敵サーヴァント御一行と合流し、黒ジャンヌが乗っている竜に降ろされた。

「あのー、何で俺を捕まえたのですか？」

「それはあなたがこちらのサーヴァントの真名を知っていて面倒だったことと、あの二

人があなたを連れて来いと注文してきたからですよ。マスターとしてサーヴァントの願いは聞いてあげないといけませんから」

ニヤニヤと俺を見る黒ジャンヌ。やはりノーマルジャンヌそっくりである。

ちなみに隣を見ると懐かしそうな顔をするヴラド（比較的安全）と指をボキボキ鳴らしているマルタ（比較的危険）がこつちを見ていた。

死にませんようにと願いながらジャンヌに襟首を掴まれながら連行されるのだった。

第十一話

「のんびり空の旅と言えばいいのか困るが竜の上に乗って移動なんてなかなかできないものである。」

竜に啜えられて移動したことは結構あるけどな！

のんびりしていると黒ジャンヌたちから情報が入る。なんでもリヨンでサーヴァントがいたらしいが、残念ながら倒されたらしい。

その情報に耳を傾けているとマルタがこちらを見て昔遊びで使っていたハンドサインを送って来た。

なににな……実はそのサーヴァントは生きている。へえ、生きてるんだ。よかったね。

その情報は嬉しいので早速伝達する。

『もしもしもしもし、こちらイケメンマスター。オーヴァー』

『こちらイケメンランサー。オーヴァー』

『こ、こちらイケメンセイバー。オーヴァー』

『……みんなでノツてくるなよ、反応に困るだろ』

『こつちとしては、捕まった直後にそんな余裕そうに連絡してきたお前に困ってるわ』
『兄さん、相変わらずしぶといですね』

『うん、そんなこと冥界の神様にも言われたわ。それよりもいい情報、リヨンにいい感じのサーヴァントがいるってさ』

『あん？ その情報信用できるのか？』

『そこは安心して脳筋でも優しさには溢れてる人からの情報だから』

『まあ、目的地には困っていたところですよ。あなたの無事もついでに藤丸に伝えておきましよう』

『俺の無事をついでにしないで。それと頼みます』

必要なものは伝えたので黙っておこう。

そして時間が経つこと数十分、彼女の本拠地である城に到着した。俺も竜から降ろされて周りをキョロキョロしているとめっちゃやかいかい竜がいた。

こいつ、どつかで見たことがあるような、でも竜なんてみんな外見同じだしな。竜の判別方法なんて色と形態以外ないしな。

でも、みんなに伝えようと思つて念話してみたが伝わらない。どうやらここにはアンテナが立ってないようだ。

「さて、この男は空いている部屋に放り込んでおきなさい。その間に私はあらたなサー

ヴァントを召喚します」

「どうやら、数で不利と悟ったらしく兵を増やすようだ。誰が出てくるのか気になるが移動を促されたので渋々移動する。」

「そして通されたのは普通の部屋だった。外装が趣味の悪いことになっていたので警戒していたが安心した。」

「俺を部屋に通した後、ヴラドは先に済ませる用事があると出て行き、俺の部屋に残ったのはマルタであった。背後に死刑用BGMが流れている。」

「さて、久しぶりね。馬鹿」

「出合いがしらに拳骨を食らわせられる。頭がぐわんぐわんする。この聖女、攻撃力に極振りしているに違いない。」

「あのさあ、人のこと馬鹿って言うの止めてくれる。確かに頭の中に筋肉しかないから名前がおぼえ……」

「俺の目の前にあつた高級そうな机が真っ二つに割られた。」

「何か言った？」

「いえ、私は馬鹿です。さすがマルタ様、頭がよろしいようで」

「ふふ、ものわかりがよくて助かります」

「この人が丁寧に話す時は威嚇を意味しているのではないかと思っている。」

「さて、いろいろ言いたいことがあるけど監視されてそうだから下手なこと言えないわね」

「じゃあ、何しに来たの？」

「嫌がらせよ。あそこまで言われたら仕返ししたくなるのが普通でしょ」

「姉さん、聖女止めたら？　むしろ死んだら？」

「聖女として出てきた私にそんなこと言われたら困るのだけど、それと私はもう死んでるから。それであんたは何で生きてるの？」

「それは山よりも深く海よりも高い理由が……」

「腹立つから早く言え」

「理由って言われても、神様の嫌がらせとしか」

「あんた、神様からも聖女からも嫌がらせされるなんてよっぽど徳の低い生き方してるのね」

「やかましい！」

「あはははは！　まあ本当のところはあんたともう一度話したかっただけよ。しつかり

しなさいよ」

「……分かってるよ姉ちゃん」

「ふふ、それでよし！　じゃあね」

嬉しそうに笑いながら出ていくマルタ。相変わらず心配性なんだから。

少し時間が経ってからヴラドが入って来た。

「……久しいな友よ」

「ああ、元気にしてた？」

「ふっ、ああ元気にしてたともし」

ヴラドは目の前の机が壊れてることに若干引きながら椅子に座った。

「お前さん、どうして血を求める変態みたいになってるの？」

「どうやら狂化されたことが原因らしい。それと血生臭い逸話が残っているからだろ
う」

彼をモデルにしたドラキュラも関係しているのかもしれない。

「ふーん、大変だな」

「全くだ。しかし貴様は余よりも大変な目に会っているようだが？」

「分かる？」

「ああ、国を救うため余と共に生きた貴様が今度は世界を救うために生きるとは、難儀な
奴だな」

「死んだ後に呼び出されるお前の方が難儀だろ」

「その通りだな」

お互い笑う。気難しいやつではあったが責任感が強くない奴だった。懐かしい話をしているとヴラドが立ちあがった。

「さて、余も長時間ここにいては何を言われるか分からん。すぐに出ていくとしよう」
「じゃあな」

手を振り出ていくのを見送る。さて、俺と話したがっていた二人は帰った訳だ。

ここから逃亡することは不可能。ということとは助けが来るのを待つべきなのだろう。

藤丸君の活躍はあとで記録を見せてもらおう。

そう考えていると予想外の第三の客人が入って来た。

「あら、あんた生きてたの？ あのと二人に八つ裂きにされたと思っていたわ」

相変わらず物騒なことを言っている黒ジャンヌであった。

「残念、俺の代わりに机が八つ裂きにされたよ」

「そのようね」

下の机を確認してヴラドと同じように座る黒ジャンヌ。

「何か用で？」

「別に？」

お互い無言の時間が続く。お願いだ、話すか出ていくかしてくれ。

俺の思いが通じたのか黒ジャンヌは話しだした。

「あんた、私と会ったことある？」

「？ いや、初対面だが」

「そうよね。なんでかな出会ったことがあるような気がするんだけど」

ジャンヌと同じ記憶を共有しているならその可能性もあるのだろう。

「俺からも質問していい？」

「別にいいわよ」

「お前さんはフランスを滅ぼすんだろ？」

「ええ、そうよ！ 何、今ここで止めてみせる？」

「いや、さすがに俺には無理でしょ。それよりその後はどうするんだ？」

「……その後？」

「ああ、その後だ。正直な話、俺もこんな国滅んでもいいと思っっている。英雄を妬み殺す国だ。そんな国は腐るほどある。そのたびに滅べと思っっている」

「あら、気が合うじゃない。仲間になる？」

「それは止めておこう。それよりもその後だ」

「……別に考えてないわよ。滅ぼした後のことなんて。特にこの国への復讐以外にやりたいことなんてありませんし」

この特異点が滅んだ後に世界が滅びることは知らないみたいだな。

「……それは勿体ない」

「勿体ない？」

「ああ、結構長いこと生きてきたが世の中にはおもしろいことがたくさんある。なのにあんたは国を滅ぼすなんてつまらないことで満足しようとしている。それは勿体ないか？」

悩むそぶりを見せる黒ジャンヌ。

「……それもそうね。なら滅ぼした後にしたいことでも考えておくわ」

どうでもいいと言われると思ったが意外にあっさり和前向きな考えを見せる黒ジャンヌに少し驚いた。

まあ、藤丸君が止めると思うが再びどこかで召喚される可能性があるのだ、その時にもたのしんでもらいたいものだ。

「それがいい」

「じゃあ、大人しくしときなさいよ」

黒ジャンヌは適当に手を振りながら出ていったのだった。

第十二話

「あんた、いろいろ面白いことを知ってるって言ったわね？」

部屋で横になっていると勢いよくドアが開けられ黒ジャンヌが入って来た。

「言っただけど、それが？」

「そう、それならちよいどいいわ」

「何が？」

「私は今からあいつらを皆殺しに行きます。けれどもあんたは生かしておいてあげる。

他の二人も気に入っているようだし」

「うんそれは分かったけど、なんでちよいどいいの？」

「私があいつらを殺してフランスを滅ぼした後は暇になるでしょ。だからあんたは私に面白いことを教えなさい！ いいわね！」

「あ、ああいいけど」

「よっし。じゃあ私は行ってきます！」

そう言ってジャンヌは再びドアを勢いよく開けて飛び出していった。

昔のやんちゃな時のジャンヌみたいだな。

しかし、いまいち情報が入ってこないせいでよくわからないが、どうやら黒ジャンヌは新たなサーヴァントと共に再び出撃したらしい。

この間に脱出しようとする部屋を出たのはいいが道が分からない。どうしたものかと悩んでいると昔の姿とはかけ離れた懐かしい顔に遭遇した。

「おや、あなたは確かジャンヌが連れて来た……」

「……お前、ジルか？」

昔よりも主に目が変わってしまった彼はジル・ド・レエ。フランスの指揮を担っていた男である。

「私の名前を知っているとは、あなたは何者ですか？」

「ただの捕虜だよ」

「ただの捕虜が勝手に歩き回るのはいかがかと思えますがね」

「捕虜にだってトイレに行くぐらいの人権は欲しいものだ」

「おっと、確かにあなたの言っていることは正しい。ではお連れしましょう」

「これは親切にどうも」

さて、まさかこんなところでジルとエンカウントするとは思っていなかった。これでは脱出することは不可能だろう。ここは大人しくしておけということだな。

ジルに連れられてトイレに向かう途中、ジルはひたすらジャンヌの素晴らしさを語ってきた。

そうだね、可憐だね。とてきとうに返しているとジルは悲しそうに呟いた。

「あの時は、楽しかった。私とジャンヌと彼でいつも夢を語り合っていました」

「……どんな夢だったんですか？」

「ふふ、何の変哲もない夢ですよ。私はこのまま国を守りたいと、ジャンヌは田舎に帰り親とのんびり過ごしたいと、彼は小説家になりたいと語っていました」

懐かしい話だ。そして……。

「叶わない夢ですね」

「ええ、フランスが！ 神が！ 彼女を裏切らなければ！ こんなことにはならなかったのに！ ジャンヌも彼と結婚して幸せになっていたかもしれないのに！」

ん？

「ジャンヌさんは彼のことが好きだったのですか？」

「ええ、彼は鈍感で気付いていませんでしたがジャンヌはあきらかに彼を意識していました」

マジで?! 全く気付いてなかった。どうしよジャンヌと再会した時ちよつときまざり。

「しかし、あなたはジャンヌを大切に思っている。ならば結婚には反対なのでは？」
「いいえ、私はジャンヌを大切に思っているからこそ結婚して幸せになつて欲しかった。
残念ながら叶わない夢ですけどね」

「……」

何も返答できなかった。

その後、俺にとつても懐かしい話が部屋に帰るまで続いた。

「案内してくれてありがとう」

「いえ、私もあなたと話せてよかったです。あなたは彼と似ていますね」

「あつたことない人と似ていると言われても変な気分ですけどね」

「それもそうですね」

ジルは満足したように部屋から出ていった。

さて、状況を整理するにやはり脱出は不可能だ。ということは助けが来るのを待つべきだ。果報は寝て待てとも言ううしな。

少し寝ると外が騒がしくなつてきた。不思議に思っていると二人の人物が中に入つて来た。

「こんな状態でも寝てられるあんたが羨ましいわ」

「全くだな」

入って来たのはマルタとヴラドであった。

「どうしたの？」

聞きながら、彼女たちの顔を見てどんな返答が返ってくるのかは分かっていた。

「これから最後の戦いになりそうだからお別れを言いに来たのよ」

「余も同じだ」

「……うん。そんな気がしてた」

そんな顔してたら分かるよ。

「そんな顔しないの。これが永遠の別れって訳じゃないでしょ。こうやって縁が出来たのだからまた召喚なさい」

「余のことも頼むぞ。この槍は今度は国ではなくお前を守るために振るわさせてくれ」

「……運が良かったらな」

「なら、安心ね。私はこういう時は運が良くなるのよ」

「余の場合は不安だな」

「安心しろ、俺も頑張って召喚するから」

☒なら、安心だ☒ そう言って二人は出ていった。死ぬことが分かっているのだろう。物語の中で自分たちが悪役になっていることを知っているのだろう。

しかし、俺が願うことができるのは再会できることである。

彼らが出て行ってしばらくすると城の中がうるさくなってきた。不思議に思つて部屋から顔を出すと目の前にワイバーンがいた。

「くあwせd r f t g y ふじこーpー」

意味不明な叫び声をあげているとワイバーンの首が切断された。

「兄さん、無事ですか？」

「おう、探したぜ相棒。生きてるか？」

「死ぬ直前だったけど生きてるよ」

「よかった。攫われてから心配してませんでしたけどね」

「無事でよかったです。これっぽっちも心配してなかったがな」

仲間からの信頼が辛い。

泣きそうになりながら今までの話を聞くと、リヨンにいたのはジークフリートだったらしく、彼を仲間に入れてからは快進撃だったらしい。そして今は残った黒ジャンヌとジルを追い詰めているのだとか。

「結末を見に行こう」

彼らを連れて居そうな場所に行くとジルが膝をついているところだった。

「やはり、あの私はあなたが作った者だったのですね」

「勘の鋭い方だ」

「どういふことか分からずに首をかしげていると後ろから誰かが来た。

「待ちなさいよ！　つてあんた誰？」

「いきなり逃げ出すとは……あなたは誰でしょう？」

「誘拐されていたもう一人のマスターです」

俺たちのように部屋に合流した二人の女性サーヴァント。この着物着た子つてヤン

デレの標本みたいな子じゃなかったけ？

昔を思い出しびびっているとジルが語った。

彼女は、黒ジャンヌはジルの思いにより聖杯の力で作られた存在だったらしい。通りで彼女は俺に対して『会ったことがあるような気がする』という風に考えていた訳だ。

ジルが俺に対して懐かしいと、俺たち三人の想い出を大切にして作ったジャンヌなのだから。

国を憎むジルと国を憎まないジャンヌ。結局、彼らは戦うことになった。

そして、藤丸君に援護をしてもらったジャンヌが勝利したのだった。

悲しそうな顔をしながらジャンヌがジルに近づく。

「ジル、今までありがとう。だから安らかに眠って下さい」

「ええ、そうさせてもらいましょう。……ジャンヌ、地獄に行くのは私だけで」

ジルがジャンヌを見て、そして俺を見て微笑んだ気がした。

ジルは笑いながら死んだ。そこに救いはあったのだろうか。どのような人でも笑いながら死ぬことができれば幸せだろう。

そしてジルの手元にあつた聖杯が藤丸君の手元に行く。

『聖杯の回収が完了した！ 時代の修正が始まるぞ！』

身体が薄れていく中で藤丸君はここで出会ったサーヴァントたちにお別れを言っている。

「しっかし、お前さんは今回何もしてねえな」

「ちゃんとお姫様役やっただろ」

「兄さんがお姫様だなんて笑えませんね」

「笑いながら言っても説得力無いぞ」

この物語の主人公は藤丸君なのだ。だったら俺が活躍しすぎることは駄目なのだろう。そうして話していると綺麗な、生きているジルが入って来た。

「ジャンヌ、あなたは生きていたのですか!？」

「……ジル、ここでお別れです」

「!? やはり死んで……なのに死してなお国のために。許してほしい。私たちがあなた

を裏切ったことを」

「大丈夫ですよジル。せめて笑顔で別れましょう」

泣きそうな顔で懺悔するジルとそれを許すジャンヌ。そんな二人を見て俺も言わなければいけないと思った。

「ジル！　ちゃんと周りを見てくれ！　お前がジャンヌを大切にしていたのと同じぐらい周りの奴もお前を大切にしていたんだ！　そのことを忘れないでくれ！」

俺の言葉に驚いた顔を見せるジルと、藤丸君たちと話していたジャンヌが驚いた顔でこちらを見てくる。

「あなたは……まさか……」

そんな声が聞こえる中、俺たちは15世紀のフランスから帰還するのだった。

第十三話

「まさか、春樹がこんなことになるなんて……」

「大丈夫よ、医療班によればバイタルは安定しているしすぐに目を覚ますわよ」

「ここ夏目春樹の部屋ではロマニとオルガマリーが心配そうに夏目春樹を見ていた。彼らが第一特異点であるフランスから戻ってきて2日が経過している。」

戻った当初は無事に特異点を修復できたことを喜んでいたカルデアの人々であったが、夏目が戻ったと同時に気絶したことが、そしてなかなか目を覚まさないことに危機感を募らせていた。

「でも何故目を覚まさないのかしら？」

「レイシフトにおいてミスはなかったはず。他にもいろいろ検査はしたのですが原因は不明です」

心配そうに見ていると、ドアが開き彼のサーヴァントであるアルトリアとクー・フーリンが入室してきた。

「こいつはまだ目を覚まさないのな」

「死ぬことはないでしょうけど心配ですね」

口では心配そうにながらもクー・フリーンはベッドの横にある冷蔵庫を見た。

クー・フリーンはマスターである夏目が冷蔵庫に☒このレイシフトが終わつたら食べるんだ☒と大事にシュークリーム二個を保存していたことを思い出した。ついでの夏目の分とアルトリアの分だけで自分の分を用意していなかったことも思い出した。

クー・フリーンは少し考えると笑いながら冷蔵庫を開けシュークリームを二つ取り出すと片方をアルトリアに渡し食べ始めた。

アルトリアは少し迷ったがもともと自分の分だしいいかと考え、食べることにした。彼女は食べることに關してはあまり迷わないのだ。

「はやく、もぐ、起きてくれないと困りますね」

「全くだ！ お、このシュークリームうめえ」

二人の行動に苦笑しながらロマニが尋ねる。

「なかなか目を覚まさないけど大丈夫かな春樹は？」

「あん？ 心配だけどこいつなら大丈夫だ。例えばどんな目にあつても戦いの途中でこいつがいなくなることはないからな」

「ええ、何があつてもマスターは大丈夫です」

二人のセリフにロマニは不思議な信頼関係があることに気付いた。そして彼らがいるなら大丈夫だろうとオルガマリーと部屋を後にしたのだった。

俺は不思議なことに二つの夢を同時に見ているらしい。どちらも百年戦争が終わり故郷に帰った時の夢だ。夢で俺は友人と再会した。しかし、友人の死に方が何故か2種類存在した。

一つ目では奥さんと幸せに暮らし、老後笑いながら死んだと聞いた。二つ目は奥さんと結婚したがそれからしばらくして病で死んだ。

俺の記憶では老死だったはず。では、もう一つのほうは何だろうか？ 分からないけど考えなければならぬ気がする。しかし、考えようとしたところで俺は夢から覚めてしまったのだった。

「ふわあ。よく寝た。今何時だ？」

手元の時計を確認したところ時刻は20時と出ている。あのレイシフトの後の記憶が無いのだが、ここは自室なので無事に戻ってきたのだろう。

自分の安全も大切だが、先ほど見ていた夢のほうが大切な気がする。死に方が異なる百年戦争時代の友人。

俺たちがレイシフトしたことと何か関係があるのかもしれない。そう考えているとおなかが鳴った。

どうやらしばらく何も食べてなかったようだ。そういえば冷蔵庫にエミヤ作の

シュークリームがあつたはず。

そう思い冷蔵庫を開けると……無い！ どこにもない！ おかしい、確かに俺はフランスに行く前に入れておいたはずだ。

俺はベッドから起き上がると誰か知っている人がいないかとみんなが集まっているであろう食堂に向かった。

食堂の入り口に到着して中を見てみると藤丸君やそのサーヴァント、そしてアルトリアたちもいた。

「あつ、先生。起きたのですね。よかったです」

俺の存在にいち早く気付いたマシユちゃんが俺に声をかけたことでほかのメンバーも俺の存在に気付いた。

「夏目さん、元気そうでしたです」

「おう、藤丸君も元気そうだなによりだ」

「やつと起きたか。いつまでも寝てるから心配したぜ」

「嘘つけ」

クー・フリーンと笑いながら近くの椅子に腰を下ろす。俺の中の直感が囁いている。こいつは俺のシュークリームのありかを知っている。むしろこいつが犯人な気がする。

「それよりさ、俺のシュークリーム知らね？」

「知らん」

「ええ、知りませんね」

クー・フリーンに聞いたはずなのに何故か返事してきたアルトリア。よく見ると視線が泳いでいる。

「……なんでお前まで答えたの？」

「気分です」

無表情でお茶をすするアルトリア。もしかしてこいつが2個食ったのか？

二人を睨みつけているとキツチンのほうからエミヤがシュークリームを持ってきた。

「ほら、注文されたシュークリームだ。もう一つ食べたいとは困ったものだ」

そう言いながらも少し嬉しそうなエミヤは置いておき、気になるセリフがありました。

「もう一つって何？ アルトリア？」

「……おいしいものは何度も食べたいということですよ」

「これから1週間飯抜きにするよ。でも正直に言ったら許してやるから言ってみ。俺のシュークリーム食ったの誰？」

「クー・フリーンです」

「ちよ、おま!!」

迷うそぶりを見せることなく仲間を売ったアルトリアだった。

「お前、1週間男子トイレ掃除な」

「そんなのないぜマスター!」

焦った顔でこちらを見るクー・フリーンを横目に俺はエミヤから許可をもらい少し多めに作られたシュークリームを食べるのだった。

第十四話

食堂でクー・フリーンに罰を与えた後、適当に腹ごしらえをした。その後、ロマニたちに会いメデイカルチェックをしてもらった。

その結果、やはり体は健康そのものだった。結局、気絶した理由は分からずじまいだったが俺としてはあのフランスの夢が何か関係しているのだろうと考えたが憶測の範囲から出ないのでもう少し確証が持てたら誰かに聞いてみよう。

そんな訳でさらに翌日、恒例の召喚をすることにした。いつものダ・ヴィンチさんなどのメンバーが集まっている。

「さて、今回も召喚するんだけど、ここで一つ問題が発生する。それは僕たちが原因ではあるけどレイシフト中に行けるサーヴァントは一人三人で合計六人しか無理なんだ。ちなみにマシユはそこに含まれないから安心してレイシフトしてもいいよ」

「はい！」

「フオウ！」

嬉しそうに返事をするマシユちゃんとフオウ君。あんまり外に出たことがないと言っていたので、冒険することが楽しいのだろう。フオウ君のことはあんまり分からない

いです。

「じゃあ、誰かがやられた場合は残りのメンバーで特異点を攻略しなければならぬんですか？」

「いや、そこは安心してほしい。一人やられた場合はこちらからすぐに新しいサーヴァントを派遣することができる。それにやられたサーヴァントも霊基は登録してあるから一日も経てば再び派遣できるようになるよ」

「なら安心ですね」

ほつとする藤丸君にロマニは厳しい顔つきで言う。

「けれども、マシユは例外だ。彼女はデミサーヴァント、つまり生きているサーヴァントだから、気を付けてくれよ」

「はい」

緊張しながらも覚悟を決めた返事をする藤丸君。ここらへんはさすが英雄（候補）だ。

「そこまで不安になることはないよお二人さん。なんとたつて歴代の英雄たちが君たちを守り、そして戦ってくれるんだぜ。大船にのったつもりで気楽にいこうよ」

「そこまで気楽になられても困りますけどね。でも大丈夫よ、あなたたちはすでに第一特異点を修復したんだから！」

ダ・ヴィンチさんのセリフに苦笑いしながらもこうやって藤丸君たちを褒めるマリ-

は少し所長らしくなってきた気がする。

「はー！」

元氣よく返事をするマシユちゃんも藤丸君に周りも優しい笑みを浮かべた。

「では早速、召喚していこう！ どちらからやる？」

「前は藤丸君からだし今回も藤丸君からどうぞ」

「分かりました」

藤丸君は意気揚々と召喚サークルに近づくと虹色の石を3個使った。

そして出てきたのは……

「セイバー、ジークフリート。召喚に応じ参上した。好きなように命令してくれ」

出てきたのは白髪の剣士ジークフリートだった。彼とは友人関係であった。いい奴ではあったが他人を優先するばかりで自分のことを蔑ろにしていた。すぐに謝るし、生前も他人を優先して最終的には騙されて死んでしまったのだ。

本当に馬鹿な男だった。俺が何度も他人を優先するんじやなくて自分を優先しろと言つても聞かなかつた。それで喧嘩をしてもすまないとしか言わないのだから腹が立つ。

ジークフリートがみんなに挨拶をしていつて最後に俺の番になった。

「ジークフリートだ。よろしく頼む」

「夏目春樹だ。よろしく」

「ああ、マスターだけでなくあなたも守ってみせる」

「そんなことより自分も優先してくれジーク」

「え？」

「すまん、気にしないでくれジークフリート」

「あ……ああ」

しまった。昔みたいになってしまった。別に俺であることがバレたことで特に困らないけど、なんか気まずいのだ。

こつちをじつと見てくるジークの横で再び召喚する藤丸君。そして召喚されたのは見覚えのある彼女だった。

「サーヴァントルーラー、ジャンヌ・ダルク。再び会えてよかったです」

「こつちこそ、会えて嬉しいよ。これからよろしく」

「はい！ よろしくお願いします」

今度はジャンヌが来たようだ。

これまた、こう、再会しづらい相手だ。生前のことは置いておいても、ジルからあんな話を聞かされたのだ意識せざるをえない。でも俺がああ俺であることはバレてないし大丈夫でしょ！

そう樂觀視しているとジャンヌが俺の前に来た。

「またお会いしましたね」

「そうだな。これから長い付き合いになると思うからよろしくな」

「ええ、共に人理を修復しましょう。それよりも質問があるのですが」

「残念、今の俺は質問を受け付けてないんだ」

「やばいよ、なんか目が怖いよ。獲物に狙いを定めたかのような視線である。」

「却下します。あなたは私の質問に答えなければなりません」

「そんなこと言われても知らんがな。拒否したいけどこいつ脳筋だからな。ごり押しばかりで全然話を聞いてくれないのだ。」

「……ちよつとだけな」

「ええ、十分です。あなたはフランスの最後でジルを心配するようなセリフを言ってしまったね。あれはどういう意味ですか？」

「どういう意味もなにも歴史であいつが狂気に身を落とすのは分かっているのだからあのセリフを言ってもおかしくないだろう」

「前まで自分の正体がバレてもいいって言ったの取り消すわ。バレたらろくでもない目にあわされそう。」

「そうですか。では最後の質問です。私とあなたは生前にもあったことがありますか

「？」

ドキッとしたり。心臓がバクバクしているのが分かる。ここで下手なことを言ったらバレル。

どうする？ 誰か助けてくれないかな。周りを見てみると俺とジャンヌの会話には気づいているが傍観をするつもりらしい俺のサーヴァントたち。

ヘルプコールを出すのが、自分で何とかしろとしか言ってくれない。役立たずめ！

「どうしたのですか？ 早く言ってくください」

ぐいぐいと近づいてくるジャンヌ。ああ、肩つかまれた。痛い。こいつ筋力強いよ！

「ああ、えーと、無いです。さすがにそんな馬鹿げたことあるわけないでしょ」

お願い見逃して。そう願っていると後ろから声が聞こえた。それは俺を一気に絶望へ突き落とす声だった。

「その方は嘘をついていますわよ」

「え？」

後ろを振り向くと藤丸君と藤丸君に抱き着いているサーヴァントがいた。それはフランスで最後に見たヤンデレの見本みたいな子だった。

「やはりですか。分かっていますがこの期に及んで嘘を吐かれたことには腹が立ちま

す」

「え？」

「横からすまない。俺とも生前に出会ったことがあつただろうか？」

「え、いや、ない……です」

「それも嘘ですわ」

「やはりか。また会えて喜ばしいな。友よ」

「え？」

「あなたと再び会えたことを神に感謝します」

「え？ 神はろくでなしばかりだよ」

ギリシヤ神話を見てみる。

「それは本当のようです」

「そうですか」

笑顔で近づいてくるジャンヌを見ながら俺は心の中で思った。

やつぱり神様でいいやつは少ない。そしてジャンヌが信じている神は絶対にろくでなしだ、と。

第十五話

「ふん！」

「ぐっ！！」

顔を近づけてきたジャンヌにヘッドバットを食らった。顔を近づけてきて少しドキドキしたのがっかりだよ。あのどうやって着けているのかが分からない鉄のやつが当たってとても痛い。

おでこを抑えているとジャンヌが抱き着いてきた。

「会えてよかった。あなたに伝えたい言葉があります。聞いてくれますか？」

聞ける状態だと思いますか？ 聞き返したいけどまだ痛くて声が出ない。

「私はあなたのことを……」

「にい……マスターは召喚を控えています！ そこまでにした方がよいと思いますよ」

ジャンヌが何か言おうとしたところ突如アルトリアが割り込んできた。

「……そうですね。まだ人理修復という問題が残っているのですからこんなことしてる場合ではないですね」

「ええ、その通りです」

ジャンヌが俺に抱き着いているので顔は分からないが何か恐ろしい顔をしてる気がする。クー・フリーンが顔を上げるのは危険だと伝えてきている。

言わなくても雰囲気に分かるよ。女性って怖いよね。

「さて、話も落ち着いてきたし春樹君の召喚を行おうじゃないか」

ジャンヌが離れたところでダ・ヴィンチさんが話を戻してくれた。さすが万能人、こんな時でもいい仕事をしてくれる。

そして俺は赤くなつたであろうおでこを抑えながら虹色の石を3個ほど放り込んだ。そして出てきたのは約束をしていた彼女だった。

「マルタです。共に世界を救いましょう」

「……うん」

来てくれて嬉しいけど、特異点でのバイオレンスな記憶が蘇る。こんなスケバンみたいな人じゃなくもつと俺を癒してくれそうな人がいい。

今のところ女性で癒してくれそうなのがないのが問題だ。マジで脳筋ばかりじゃないか？

「頑張りましょうね。えーと……」

「夏目春樹。好きなほうで呼んでくれ」

「では春樹で。これからよろしくね」

「うん、よろしく」

まだ聖女モードでいる間に次に進めよう。マルタ姉さんが周りに挨拶している間に次の召喚に移る。そして出てきたのは……

「ヴラドだ。貴様を守るためにここに参上した！」

「ヴラド……！ よく来てくれた！ お前が来てくれるのを待ってたよ。お前みたいなまともな人と一緒にいたかったんだよ。これからよろしくな！ 本当にお前に守られるなんて俺は幸せだよ！」

あなたが全ては遠き理想郷（アヴァロン）です。

「う……うむ、任せてくれ。ランサーとして、そして護国の英雄としてお前を守ろう」

「かっこいい！ 尊敬しています。結婚してください」

「そ……それは遠慮しておこう」

「断り方もかっこいい！」

ヴラド三世マジでかっこいいです。何よりも彼のいいところは俺に物理的にも精神的にも優しいところである。しかも王様なのに手芸もできるといふ完璧さ。

俺がテンションをあげていると後ろから頭を掴まれた。

「ねえ、春樹。なんで私の時は微妙な顔をしていたのにヴラドさんの時はそんなに嬉しそうなの？」

「え、いや、ほら同性だから、こう、話が合うから嬉しいなやつです。はい」
あつ、頭が割れそう。

「そんなことより、女性サーヴァントにあまり興味を持っていなかったのは男が好きだからなんですぬ兄さん。だから、マーリンと仲が良かったんですぬ!! 信じてたのに!!」

何でそこで疑っちゃうのアル? マーリンはどう見ても女性好きじゃん。

「私の時も私よりもジルと一緒にいることが多かったのはそういうことですね」

ねえ、ジャンヌ。ジルは俺と君の間の結婚を祈ってたんだよ。たぶん英霊の座で涙流してるよ。

周りから一気に声がかかる。そんな一気に声をかけられたら返事できないよ。そしてお願いだからクー・フリーンとヴラドはさ、そんな青ざめた顔でこちらを見ないで誤解だから。

藤丸君も引かないで、マシユちゃんとヤンデレちゃんも藤丸君を守るように前に立たないで。

泣きそうになりながら、俺は弁解する。

「俺はちゃんと女性が好きです。マーリンやジルとよくいたのは友達だからです。決して恋愛的なものではありません」

「本当ですか？ 神に誓えますか？」

「それは無理」

「怪しすぎます」

だから俺は神様をあまり信じてないから。それと神に誓うって言っても日本人では一生のお願い並みに軽いからさ、その言葉。

「無罪だから。ちゃんとそっちの女の子に聞いてみてくれえ」

疲れた、泣きそうだ。後、頭を放してください姉さん。

「ええ、女が好きという言葉に嘘はありませんでした」

「それなら……納得します」

絶対に納得してないことは分かるが、蒸し返してもこちらが責められそうなので何も言わない。

ただ、召喚するだけなのにボロボロになった俺は忘れていた3回目の召喚をする。

「サーヴァントアヴェンジャー。召喚に応じ参上しました。安心してください、きちんと仕事はしますから。ほらこれが契約書です」

出てきたのはジャンヌの黒色だった。いろいろ驚いていると先ほど言っていた契約書を渡してきた。あ、フランス語だ。内容は簡単に言うが悪いことしません、それと頑張ります。というやつだった。

「そこにいる聖女様と一緒に戦うのは嫌ですが我儘はいりませんのでどうぞ使ってください」

「あ……ああ」

彼女はフランスを滅ぼそうとしていたはずだ。そんな彼女が味方になるのは少し違和感を感じるがヤンデレさんが嘘だ！嘘と言わないので本当なのだろう。

少し驚いているとさらに黒ジャンヌが続けて言った。

「それにジルにもあなたを助けてくれと言われましたから」

「え、ジルに会ったの？」

「いいえ、会ってはいません。しかし、ここに召喚されたときにお願ひされた気がしただけです。感覚的なものですけどね」

「……そうか」

ジル、お前はどこまでも真面目だな。

「これからよろしくな。俺は夏目春樹。好きに呼んでくれ」

「ええ。では春樹と呼びましょう。私のことはオルタと呼んでください。それとちゃんと面白いこと教えて下さいな」

頷いて握手した。彼女とはあまり関わりはなかったが面白いことを教えると約束したのだからちゃんと教えてやろう。ここでのもともとの仕事は教師だったし。

こうして俺たちはたぶん頼りになる仲間を加えて次の特異点に備えるのだった。

第十六話

二人の召喚が終わり各々が自分の部屋へと帰っていくなかロマニ、ダ・ヴィンチ、オ
ルガマリーは残っていた。

「やはり彼は何度も人生を送っているみたいだね」

今まで嘘だと思っていたことが真実であったことに驚きを隠せない三人。

「本当にそんなことがありえるの？ サーヴァントたちが言っていたから嘘だとは思わ
ないけど信じられないわ」

「……普通ならありえない。前世がある人間ならまだ可能性がある。けれども、春樹は
その数が異常だ」

「……ふむ、確かに異常であると言わずにはいられないね。すでに5回以上人生を繰り
返している。おそらくだけでもっと多いだろう」

ダ・ヴィンチが言い切ったところで全員が黙る。ありえない真実だ。しかし実際に起
きているのだから信じるしかない。

「私のような人間からみたら運命なんて信じるつもりはないけど彼がマスターになった

のは運命なのかもしれないね」

「そうですね」

「そういえば彼が冬木で言ったセリフを覚えているかい？ 藤丸君が英雄だといっていたやつ」

「ああ、モニター越しから見えていたが今でもしつかりと覚えているよ。それがどうしたんだい？」

「この時オルガマリーは半死だったのであまり覚えていない。

「なに、初めて聞いたときは粹のある言葉だと思っていたけど今ならこう思える」藤丸君が主人公の物語が本当に始まっていたということがさ」

「……この物語の結末はどうなるのかしら？」

不安そうな顔のオルガマリーにダ・ヴィンチが言った。

「分からないさ。ハッピーエンドで終わる物語もあればバッドエンドで終わる物語もあるのだから」

「そうですね。結局は分からない。しかし、勝つ可能性があるなら前を向いて戦いましょう。物語の登場人物はみんなそうしてきたんですから」

ロマンの言葉にオルガマリーも戦わなければならないと思いはじめ。

「そうですね。直接は戦えないけど彼らを支えましょう。そして未来を取り戻しましょう」

！」

「はい！」

ロマニが大きく返事をして。ダ・ヴィンチが笑った。まさしくそれは絵のモナリザだった。

◇

司令塔三人が話しているころ藤丸立花は清姫から逃げ切り無事に自室へと帰っていた。

「無事に戻ってこれたようだなマスター」

「うん」

疲れ切った顔でベッドに座った藤丸へエミヤは紅茶を入れる。

「私の勤だが君には女難の相が出ているよ」

「うん、自覚した」

「しかし、もう一人のマスターに比べたらマシだがね。君は清姫のたぶん勘違いで追かけられているが彼はリアルで前世から追いかけてられているからな」

「あー」

思い出すのもう一人のマスターでありいろいろ教えてくれる夏目のことだ。藤丸から見た夏目は☒達観し過ぎている人☒だ。フランスでの戦争、そこで人の死を初めて

見た藤丸だった。あまりの光景に気持ち悪くなった。しかし、夏目はその光景に対していつも通りだった。そこに驚いたのを覚えている。

他にも不気味な雰囲気を出すレフに対して啖呵を切っていたのもかっこいいと思っ
てしまった。

「なあエミヤ、俺は英雄になれると思う?」

「ん? 急にどうしたんだ?」

あまり藤丸らしくない質問に目を丸くするエミヤ。

「夏目さんに言われたんだ。俺が人理を修復して英雄になるって」

「なるほど。確かにやり遂げたのなら君は英雄と呼ばれるのに相応しい人間になるだろう。君はどう思う?」

「俺は……分らない。正直サーヴァント同士の戦いも怖かったし、戦争も怖かったからさ。こんなビビリの俺には無理かもしれないって。夏目さんならできるかもしれないけど」

「どうしてだ?」

「だって、サーヴァントたちともあんなに仲がいいし戦闘でも特に変化なかったからさ。他にも話を聞いたら何度も人生を繰り返し返しているっていうしなんか世界が違うよ」

「……これは私の意見だが恐れないことが英雄の条件ではないだろう。そしてサーヴァ

ントたちとならこれからいくらでも仲良くなれる」

「けど……」

反論しようとする藤丸に☒最後まで聞くんだ☒と言いつける。

「君はフランスでは恐れながらも立ち上がり戦った。そして現地ではサーヴァントたちが君に協力してくれただろう？」

藤丸はフランスで出会ったマリーアントワネットやモーツアルトたちを思い出した。

「歴史に名を残すような彼らが君のために戦うと言ってくれたんだ。それは凄いことだ。そしてそんな彼らと共に特異点を修復をしたんだ。自信を持ってもいいと私は思うね」

「……うん、そうだね。俺頑張るよ！ ありがとうエミヤ」

エミヤに感謝の言葉を告げた藤丸はベッドから立ち上がった。

「元気が出たしちよつと体を動かしてくるよ」

「ああ、頑張りましたまえ」

藤丸は嬉しそうに笑い出て行った。それを見送ったエミヤは過去の自分を思い出し笑った。こうして自分が助言する側になると思っていなかった。

そして紅茶を楽しんでいると藤丸の悲鳴が聞こえた。その後、清姫の声も聞こえた。どうやらサーヴァントと仲良くしているようだ。

◇

召喚が終わった後、部屋に戻ろうとしたところ何故かジャンヌが俺についてきた。「ここには俺の部屋しかないよ」

言外にあつちに行けと伝える。

「そんなこと言わないで下さい。召喚されたばかりなのだから親交を深めましょう」
ヘッドバットしてきた女性が言う言葉ではないと思います。

「それもいいと思うけど一先ず休ませてくれよ。こう見えても召喚って体力使うんだよ」

「確かにそうですね。なら明日にしましょう」

部屋に入ろうとしたら違うやつが来た。

「どうしたのオルタ？」

「え、いや。初めての場所ですから、その、それに自分の部屋も分かりませんし」

まるで借りてきた猫のようにしおらしくなるオルタ。何故だ保護欲がそえられる。

「そこらへんの空いてる部屋を使っていいよ。いろいろあつてほとんど空いてるし」

「あなたの隣の部屋は空いてますか？」

「ごめん。アル…アーサー王とクー・フリーンに取られてるわ」

「そうですか…」

そんな泣きそうな顔をしないで。

「あーその。せつかくだし話するか」

「はい！」

そして俺はオルタを部屋に入れて日本が誇るサブカルチャーを教えてあげるのだった。

◇

「私は追い返したのにオルタを入れるなんて……許しません！」

「貴様は何をやっているのだ？」

追い返されたジャンヌが柱の陰から二人を睨みつけ、それを見たヴラドは思わずため息を吐いたのだった。

ローマに通ずる道の先は未来か破滅か 第十七話

新たな戦力を召喚して数日が過ぎた。みんながのんびりと過ごす中、俺は第一特異点の記録を書いていた。俺は直接見ることは叶わなかったが、ちゃんと映像に記録されていたので問題ない。

「まだ、仕事終わらないのか？」

そう尋ねてきたのはクー・フリーンである。最近ハマっているゲームをしているところである。

俺もゲームしたいな。でも、サーヴァントたちと格ゲーしても勝てないからな。こいつら平然とチートみたいなことしてきやがるからな。

この前もただの弱攻撃で嵌められて負けた。クー・フリーンに優しさはない。

今もアルトリアと弱攻撃の百裂拳を打ち合っている。俺の知ってるゲームと違う。

「終わらないなあ。今はアルトリアがでつかい竜にビームブツパしてるところ」

「ああ、そのあたりか」

「しかし、なんで剣からビームが出るのかねえ？」

「さあ？」

「一応言っておきますがビームではありませんからね！」

訂正してくるアルだが、あれはどう見てもビーム以外の何物でもないからな。

アルトリアの言葉を聞き流しながら、違うところを見てみると、パソコンに嘯り付いているオルタが幸せそうな顔をしながらパソコンでゲームをしている。彼女はどうかから日本のサブカルチャーにはまった様だ。

その後ろではヴラドが編み物をしている。相変わらず器用なようで俺がくしゃみしたのを見ていて作ってくれているらしい。

俺、男だけど、ヴラドに惚れてもいいだろうか。

マルタは今は部屋にいないが普段なら寝転がっている。他にもジークフリートやジャンヌ・ダルクも来て結構人気があるのだ俺の部屋は。

そういうこともあって、俺はマリーに頼んで大きめの部屋に移動させてもらった。

するとどうだろうか、移動して前よりも大きな部屋となったことでサーヴァントたちの溜まり場となつてしまい、本末転倒となつてしまった。

騒がしいが、どこか懐かしい気分で仕事をしているとマリーによる呼び出しがかつた。

『第二特異点が観測されました。至急マスター二人は集合してください』

今、第一特異点が盛り上がってるから、もう少し待ってくれえ。

「おい、呼ばれているぞマスター？ 行かなくていいのか？」

「この中の誰か要件だけでもいいから聞いてきて。仕事からだからさ」

「どう考えても要件は特異点のことだろう」

はあ、とため息を吐きやれやれといった雰囲気を出すヴラド。分かっているからマジレスはやめてくれ。

俺もため息を吐きながらマリーの元へ向かったのだった。

◇

俺が到着したところ既に藤丸君やマシユちゃん、その肩にフォウ君が居た（どうやら今日の清姫ちゃんとの鬼ごっこは終わったらしい）。

「よく来たわね、春樹。要件は分かっていると思うけど特異点の修復よ。詳しくはロマニに説明してもらおうわ」

「じゃあ、説明させてもらおうよ。今回の向かう先は1世紀のヨーロッパだ。具体的には古代ローマだね」

それを聞いた瞬間、俺の鼓動が急激に加速した。あの人の場所だけは勘弁願いたい。

ダ・ヴィンチがやれ皇帝に会いたいだの言っているが俺はひたすら勘弁してほしい。特にネロ帝だけには会いたくないのだ。

「さて話は戻すけど転移地点は帝国首都だよ。ちなみに聖杯の正確な場所とかはいまいち判別できなかつたよ。すまないね」

「大丈夫です。先輩やみなさんで突き止めてみせます」

「うん、ありがとうマシユ。行き当たりばつたりになるかもしれないから念入りに準備していいこう。一先ず、どのサーヴァントを連れていくか決めてきてくれ。そうだな……今から一時間後に再びここに集合してくれ」

「はいー」

そういうことで俺たちは各自の部屋に戻りどのサーヴァントを連れていくのかを決めることにした。

◇

「さて、そういうわけで君たちの中から三人、次の特異点に行ってもらわなければならないので前回召喚した三人に来てもらうことにしよう」

全員が真面目な顔をして頷いた。しかし、よく見るとオルタの目がパソコンを捉えている。☒覚悟決めています！☒って顔してるけど未練たらたらなのがよく分かる。

ゲームで盛り上がっているとところなのかもしれないけど、俺も仕事の途中なのでその気持ちわかるけど我慢して下さい。

「さて待機組は自由にしていいってさ。何か問題が発生したら呼び出しがあるからそ

れまでは寛いどいてくれ」

「分かりました。ご武運を」

「あいよ、やばくなつたらいつでも呼べ」

そう言つてアルトリアとクー・フリーンはTVの前に座りゲームを再開し始めた。こいつら……。

何かやり返したい気持ちがある中、ヴラド、マルタ、オルタを引き連れて再び集合場所に戻つた。

◇

俺が戻つてくると藤丸君も準備ができたらしくジークフリート、ジャンヌ、清姫、マシユちゃんがそろつていた。彼も今回は新メンバーでこの戦いに臨むらしい。

「では、準備してくれたまえ」

ダ・ヴィンチに促され、いつものレイシフトをする機械に入る。

「さて、準備はできたようね！ では第2特異点のことよろしく頼むわね！ レイシフト開始！」

マリーの声を最後に俺たちは第2特異点ローマに向かった。

第十八話

レイシフトが無事に成功して周りを見てみるとどこかの小高い丘であった。俺自身、どこか懐かしいと感じている。これは魂が覚えていたのだろう。

後ろではマシユちゃんや古代ローマの新鮮な空気に感動している。

「ふむ、やはりあの光る輪はあるようだな」

ヴラドの声に従うように上を見てみるとフランスと同じようにあの輪っかが存在している。あれが何か不思議に思っているとサポートのロマニから通信が入った。

『そこはローマの首都じゃないのかい？』

「ここは丘陵地だと思いますよ」

『おかしいな。どうして失敗したんだろう。時代はあっているんだけどなあ』

「そういえば古代ローマのどの時代なの？」

『それはネロ・クラウディウスが統治する時代だよ』

ええ？

「ちよ、ちよつと待って。そんな話聞いてんないけど？」

『言つてなかったかい？ それなら謝るよ』

「すまん、藤丸君。俺は頭痛が痛くなってきたし、腹痛も痛くなってきた。ここらへんで人理修復するまで居ておくから頑張ってきてくれ」

嫌だ、帰りたい、おうち帰るー。

「ちよ、夏目さん。言っていることがめっちゃくちゃになってますよ。それにまだ何もやってないじゃないですか。ほら頑張りましょう！」

「それだけは勘弁を！」

そんな会話をしていると遠くから戦闘をしている音が聞こえてきた。

「どこからか大規模な戦闘をしている音が聞こえてきますドクター」

『戦闘？ おかしいなこの時代はそんな大きな戦闘なんてなかったはずなだけだな』

「つまり、何かの異常ですね。行くよマシユ」

「はい！」

走っていく藤丸チームを見送る俺。

「何やってんのよ！ ほら私たちも行くわよ」

「ちよっと待って」

「行かなくていいのか？」

「調子が悪いもので」

「何言ってるのよ。ほら、行くわよ！」

「ちよ、お願い引きずるのはやめてください」

藤丸君を追うように走り出す俺のチーム。ちなみに俺はマルタに引きずられながら向かった。

◇

現場に着いたら大部隊と小部隊が戦闘をしていた。そして小部隊を指揮しているのはジャンヌやアルにそっくりな女性であった。

「あの女性を助けようみんな！」

そう言って飛び出す藤丸君の後ろで俺は震えていた。

「やっぱり、あの人だ。怖いよー。捕まるよー」

「あんた、さつきから嫌がってると思ったらあの女性に会いたくなかったのね」

「あの女性とどのような関係なの？」

「そんなこと聞くなオルタ！ トラウマが蘇るだろう！」

「え？ すみません」

「そんなことより、あやつらに加勢するぞ。敵は人間のようだし手加減もするように」

そう言うのとヴラドが先行しその後マルタとオルタが着いていった。

戦闘は見事なものでヴラドやオルタは大活躍した。オルタは炎による攻撃が得意だったので手加減は大丈夫かなと思ったら、いつも持っている旗で人を吹っ飛ばしてい

た。俺の知っている旗の使い方と違うな。そして何よりも凄かったのはマルタであった。前回は祈りによる不思議な攻撃をしていたのに今回は祈りと殴りのコラボレーションであった。

敵が拳によって吹っ飛んでいくのは悲惨な光景であった。

そんなこんなで戦闘がひと段落すると、小部隊を指揮していた女性が近づいてきた。

「援軍感謝する、そなたたちは首都から来たのか？」

「ええ、そんなところですよ」

できるだけ視線を合わせないようにしている俺の代わりに藤丸君が会話をしてくれている。

「か弱そうな少女や屈強な男性が混ざって戦うとはなんとも素晴らしいものだ。気に入った。余と共に戦うことを許そう」

「あ、ありがとうございます」

一緒に戦うという言葉に俺の震えが増していく。これは逃げられないかもしれない。

俺が絶望している中、コミュニケーション力E Xの藤丸君が円滑に話を進めてくれたらしく王都に行くことになった。

◇

王都に向かう途中にネロ帝の叔父であり、サーヴァントでもあるカリギュラとの軽い

戦闘以外は問題なく進めて、無事に王都に到着した。

王都は非常に活気に満ちており、ローマの首都といっても過言ではなかった。人々は笑いあい、今が戦争中であると思わせる要素がなかった。

いろいろなところを見ているとネロ帝が近くの店で林檎をもらってきた。

「どうだ、お前たちもひとつ。甘いものは疲れに効果的だぞ」

「私はいいです」

「じゃあ、俺はもらいます」

そう言ってみんなに配るネロ帝とそれを受け取るサーヴァントたち。

「うむうむ、是非味わってくれ。それでもう一人の男性は」

「いりませぬ」

「本当に良いのか？」

「はい」

「本当に良いのか？」

「はい」

「本当か？」

「はい」

「……食え！」

「……承知しました」

圧力に負けて貰ってしまった。

「え、ええと皇帝は夏目さんのことを気に入っているようですね」

「うむ、どうしてだろうな。少し懐かしい奴を思い出してな。放っておけなかったのだ」
俺は過去に勝てないのかあ。

こうしてみんなが興味津々に周りを見ていると遂に城についてしまった。終わった……。いや、待て、そうだ。俺は夏目春樹であつてこの時代に生きた●●●ではない。そうだよ、俺は何故、過去に縛られていたんだ。人理修復したらこの時代とも別れる。

ああ、なんだか心が軽くなってきた。もう何も怖くない！

俺が一人、悟りを開いていると広間に到着。今、ローマに起こっている現状について確認しようかというところで問題が発生した。どうやら敵の大部隊が責めてきたようだ。ネロ帝は俺たちにその部隊を撃退するように命令してきた。

「一息ついたら、宴会を開くぞ！」

その言葉を聞いてやる気を出すみんな。ローマは温泉など豪華な文化であつた。よつて食事でも大変美味物が多い。当時の俺も結構気に入って食べていたものだ。

敵がいるであろう首都の外に出ると大勢いた。そこで俺は閃いてしまった。ネロ帝との食事にトラウマがある俺としては宴会に参加したくない。ならばじっくりやれば

いいじゃないか。

「全員、敵はどうやら人間らしい。手加減をするようにな」

「了解」

返事をして飛び出すサーヴァントたち。宴会がつぶれることを祈る俺。しかし、俺は忘れていたのだ。神様が俺の敵であったこと。

敵部隊との戦闘が始まって一時間。敵部隊は壊滅した。

そりゃ、そうだよ。だってこっちはサーヴァントだし。

ヴラドやジャンヌ、ジークフリートが武器を振ったら、敵が吹っ飛んでいくし。オルタと清姫ちゃんが火炎攻撃したらみんな逃げていくし。空から亀の怪獣が落ちてきたら逃げるし、当然だよ。

見てて不憫だったもん、敵の兵士が。亀が落ちてくるの見て笑って、あばよとか言ってるやつ居たし。

まあ、そんなこんなで敵をあつさり全滅させた俺たちは城に戻ってきた。そして宴会前にロマネや所長を交えての情報交換を行った。情報をまとめると……。

何故か急に自称皇帝が複数現れた。それを連合ローマ帝国というらしい。そしてその皇帝たちの首都是不明。よって協力関係を結ぼう。ついでにレフ教授がいたら俺たちが倒したいから前線に入れてね。たぶんこんな感じ。情報交換も終わったので宴を

始めた。

みんなは美味しそうに食事をする中、俺はなかなか手を付けられていなかった。

「どうした、食事が口に合わなかったのか？」

「いえ、そういうわけではないのですが、あまりにも美味しそうなのでどれから食べていいのか迷っているのです」

急かさなさいください、お願いします。

「それならば仕方ないな。だが、安心するがよい。ここの食事は全て美味であるからな。どれから食べても満足できるであろう」

「ははは」

心の中で念話を送る。

『ねえ、食べ物の中に毒とか入ってないよね？ 主に睡眠薬』

『そんなもの、入っているわけなからう』

『あなた、さつきから挙動不審だけど何かあったの？ あの皇帝様と』

『いろいろ、あったんですよ。はは』

『あなたも不憫ねえ』

取り敢えず大丈夫そうなので恐る恐る食事をする俺。その横では藤丸君とネロ帝の話が盛り上がっていた。

「ほう、そなたは未来では学生だったのか」

「そうなんですよ」

「楽しそうだなあ。」

「ちなみにそなたは何をしていたのだ？」

「私は小説……話を書いていたのですよ」

「ほう、それは興味深いな。どのような話だ？」

「分からない話をもつまらないだろうとネロ帝が知っている話をチョイスする。」

「いろいろ、ありますよ。例えばギリシヤの神話であつたりなどしていました」

「なるほど、興味深いな。少し聞かせてくれぬか」

「いいですよ」

そして俺はギリシヤ神話（実体験）を話した。ここで気付くべきだった。俺のミスに。

「素晴らしい話であつたな！ 褒めて遣わすぞ！」

「ありがとうございます」

「まるで●●●のようであつたな」

ネロ帝が呟いた名前にビクツとする俺。それは俺の当時の名前である。

「それはどなたですか？」

興味を持ったマシユちゃんが尋ねた。

「うむ、余が気に入っていた劇作家である。とても面白い話を聞かせてくれる奴でな」
「へえ」

「そして、何よりも余を心配もしてくれた。皇帝である余に対しても気さくでな、よく劇について話し合つたのだ」

そう語るネロ帝はそれはもう幸せそうな顔であつた。

「そうなんですか！ それでその方はどちらに？」

あかん！ それ聞いたらあかんやつや！

それを聞いたネロ帝は目をどす黒く曇らせて呟いた。

「逃げられたのだ」

「え？」

「余が幽閉して共にずつと暮らそうとしたのにあやつは直前で逃げだしたのだ。ふふふ、だが大丈夫だ、何があつても見つけてみせるからな」

「えつと、その、頑張ってください」

「うむ、絶対に逃がさない」

怪しく笑うネロ帝を無視して俺は心を無にして食事続けた。ちなみにある種勤のいいサーヴァントたちはその幽閉されかけた人物が俺と分かつたらしく同情的な視線を送ってくる。



当時を思い返してもよく俺は逃げ出せたものだ。いくつもの皇帝と友人やらなんやらと関係を持つていた俺はネロ帝に対しても軽い友人関係であった。

しかし、彼女が皇帝として頑張っている姿を見て、彼女がつらそうな日は励ました。彼女が嬉しそうな日には一緒に笑った。そんな日を送っていたら彼女は俺が欲しいと言うようになった。

俺は断つたのだがそれが悪かった。彼女は俺を手に入れるために本気になった。普段よりも会う回数を増やしたりなどいろいろしてきた彼女だが、俺は変わらずにかかわらず続けた。

そんなある日、彼女が話しているのを聞いてしまった。

「この薬を飲めばあやつは寝る。その間に、ふふふふふふ。これですつと一緒に暮らせるぞ」

恐怖した俺は逃げ出そうとしたが、逃げ出す方法が思いつかずそのままずるとネロ帝との飲み会に参加した。そして……

「おい。この酒を飲め」

「え、いや、自分の分がありますので」

「飲め」

「だから」

「飲まなければ、余、泣くぞ」

潤んだ目にやられて飲んだ俺はすぐに眠気に負けて眠ってしまった。そして目を覚ませば豪華な部屋で寝ていた。

しかし、目を覚ました時にはネロ帝はいなかった。自分の身に何かが迫っていると感じた俺は運がいいことに施錠を忘れていたドアから逃げ出したのだ。ネロ帝には新たな劇の題材を探しに行きますとの手紙を残して。

◇

どうやら、俺は軟禁される手前だったらしい。あの時の勘を信じてよかった。しかし、当時の俺は逃げきっているらしい。頑張れよ、俺。

そうこうしているとダークサイドから帰ってきたネロ帝はみんなと大いに盛り上がり楽しんだのだった。そして宴会が終わり各自の部屋に案内された。そして俺が案内された部屋は例の部屋だった。

「ここでのんびりしてくれ夏目」

「あ、ありがとうございます」

特に違和感を感じなかったのでこの部屋に案内されたのは偶然だと信じたい。

第十九話

「案内感謝します」

「うむ」

そう言つて部屋に入った俺。すぐに出ていくと思つていたネロ帝は出て行かずにこつちをじつと見ている。

「あの、何かありますか？」

「ある。少しゆっくり話でもせぬか？」

「いや、明日も早いですし寝ませんか」

「余は話がしたい」

そう言つと部屋に備え付けられていた鍵をガチャと閉めた。そしてそこに鎖を巻き始めた。

「ここまで心臓がバクバクいったのはいつ以来だろうか。」

「あの……その……どのような話でしょうか？」

「先ほどそなたがしてくれたギリシヤの話、とてもよかったです」

「……ありがとうございます？」

なんだ、何が言いたいのだろう？ それに彼女の目がとてつもなく怖い。ギリシヤでよくいた女性と同じ目をしている。

「先ほどの話はな、●●●もしてくれた」

「はあ」

「その時はな酒を飲んでいた日だな。あやつは酒に滅法弱いのだ。それでな、その話をしてくれた時に言っていたのだ。☒自分のこれは実体験だった☒と」

……え？

「余もさすがに疑った。しかし、話を聞いてみれば嘘ではないと信じれるくらい詳しくあったのだ。それに、皇帝として何度も人間と騙しあいをしてきた余にはそやつが嘘を吐いているかぐらいつきに分かる」

「いつだ。俺は本当にそんなこと言ったのか？ 確かにネロ帝には無理矢理酒を飲まされたことは多かつたし、記憶が飛ぶ日も何度かあった。でも、英雄と一緒にいたら当たり前前すぎて警戒していなかった。」

「それでだな、他にも言っていたぞ。もしかしたら未来にも自分がいるかもしれないと
なあ」

「ひょい」

で、出口は、ふ、封鎖されてる。

「なあ、教えてくれないか夏目、どうしてあやつが実体験として語ったものと同じことを言えたのか？」

「それは……その」

「ならば、当ててみせようか。何、難しい問題ではない。なぜなら、そなたも同じ体験をしたのだろう春樹い」

極上の暗い笑みを浮かべて一歩、また一歩と近づいてくるネロ帝。そして一歩ずつ下がる俺。どんどんと迫られそして壁際に追い込まれる。

「お、落ち着こうネロ。俺たちは分かりあえるはずだ」

「ふふふふふふ、やっといつもの呼び方をしてくれたあ」

おや、選択ミスしたかな。さらにいい笑顔になったネロがもう目の前に来たところで外からドアが叩かれた。

「夏目さん！ 大丈夫ですか！ 大丈夫なら返事してください！ 先ほどドクターから夏目さんのバイタルに異常が出てるって報告がありましたよ」

これは天の助けならぬ藤丸の助け、ありがたい！

「藤丸……」

「何も問題ないぞ、立香！」

ちよ！

「あれネロ帝と一緒にいるんですか？」

「うむ、あの後、酒を飲んでな。そのせいで体調を崩したのだろう。大丈夫だから安心せ
い」

「分かりました！ 夏目さんをよろしくお願いします」

「任せるがよい」

ああ、藤丸の助けが消えたあ。彼は純粹すぎないか？

「……邪魔も入ったし……までにしようか。大丈夫だ、余も今が非常事態なのを理解し
ている。ここでそなたに危害を加えることは決してせぬ。しかしだ、これだけは今、さ
せてくれ」

そしてネロは俺を抱きしめた。ネロが不安になったときによく頼んできた行為だっ
た。俺は●●ではない。しかし、不安になっている彼女を引きはがすこともできな
かった。

「ではな、確認したいこともできたし、余も寝るとする」

「ネロ！」

「なんだ？」

「えーと、おやすみ！」

「うむ、おやすみ！」

そう言うとなろは部屋から出て行った。安心した俺はゆっくりと床に座った。まさかネロがここまでのことになってるとは予想外だった。過去の俺は……ああ、逃げ切れずに捕まっていたし。時間の問題かなあ。

なら、この異常事態中は俺ができる限り彼女を支えてやろう。どうせ、俺が未来に戻っても俺が彼女を支えるのだから。今だけは俺の尻拭いをしてやろうかな。

そう考えた俺は、立ち上がると先ほどの件で藤丸君に感謝を述べようとドアまで行き手をかける。しかし、ドアノブが回らない。

あれ、あれ、あれ!!　なんで、どうして、開かないの?　あ!

そこで俺は思い出した。ここは元々俺を幽閉するための部屋だったことに。つまり、俺は幽閉されたってことか。ふー、落ち着け、落ち着け。俺がこのまま幽閉されることはないだろう。何故なら、俺も戦力に入っているからだ。ならば明日には解放されるはず。

つまり、前世みたいに逃げ出さないようにしているだけ。そう、そうだよな?　考えるのは辞めるとしよう。

◇　そうして俺は心の中の不安を振り切るようにしてベッドで寝たのだった。

◇　翌日、目を覚ますと目の前にネロの顔があった。

「あ、」

「声を出すでない。ただ起こしに来ただけだ。余、自ら起こしてもらえるなんて感謝するべきであろう」

「は、」

感謝の前に恐怖しかないよ。

「では、朝食とするか。すでに全員集まっているぞ」

あれ、みんな起こしに来てくれなかったの？

「ジャンヌがそなたを起こしに行こうとしていたが余がやると言ったら引き下がってくれたぞ」

ジャンヌは負けたのか。

「それより朝食を取ろうではないか」

昨日のネロが嘘のように元気澆刺なネロに安心しながら俺はネロについていった。

◇

朝食は常に和やかに進んだ。ネロも暴走することなく俺の心は安らかだった。この朝食の席で一先ず霊脈となっているエトナ火山にターミナルポイントを設置することになった。

◇

火山に向かう途中、敵も少なくのんびりしているとジャンヌが話しかけてきた。

「今朝、皇帝に何かされませんでした？」

「されてないよ。あんな笑顔の皇帝が何かしてくるように見えるか？」

「昨日の笑顔を見れば誰だって不安になりますよ」

否定できない。

「そういえば、昨日も夜にネロ帝と酒を飲んでいましたよね、夏目さん？」

「どうかなあ」

「？」

嘘を吐きそうになったけど清姫ちゃんがいるのだった。こんな恐ろしいウソ発見器はこれから先も存在しないだろう。

「酒飲んだだけでドクターが焦るようなことが起きるんですね」

『そうだよ。昨日は軽くパニックになったんだよ。だって春樹の心拍数が異常に上がっていたからね。生命の危機に襲われているのかと思ったよ』

「ははは、ネロ帝がいるのにそんなことあるわけないでしょう」

『そうだよ。でも、貞操の危機だったりして？ あははは、そんなわけないよね』

「……」

『え？』

「……そんなわけ、なかったらいいのになあ」

微妙なラインだけど生命よりは貞操の危機だったかもしれない。

『あー、このことは忘れるよ』

「助かる」

「ここで話が終わればよかったのだが。」

「春樹、そんな話、私は聞いていませんよ」

「……はい」

聖女様がお怒りのようだ。ちなみに周りの反応は、ヴラドとマルタはやれやれみたいな感じ。オルタや清姫、マシユちゃんは興味津々。ジークは気の毒そうにこちらを見ている。さすが、女性のせいで痛い目にあつた御仁は女性の恐ろしさを知っている。

「黙っていたら分かりません。何か言ってください」

「俺は悪くないです。悪いのは前世の俺です」

「つまり、悪いのはあなたですね」

「……違う、可能性もあります」

「どうせあなたのことだから、女性を蔑ろにしていたんでしょ？」

どうせってなんですか？

「そういえば、余の時もそんなことあつたな」

「俺の時もあった」

「私もあの時は困ったのよね」

「はあ」

三人でため息を吐くな。

「何というか不幸属性とでも言えばいいのか、厄介な女性によく絡まれていた」

「英雄と仲良くなるせいとかそのつながりで絡まれることが多かった」

「恋愛とは関係のないものでも揉めていたし」

「はあ」

だから、辞めて。

「これも全部神様が悪いんだよきつと」

「主が女性関係のもめ事を引き起こすはずないでしょう」

たぶん、この状況はその主が起こしているものですよ。

その後もジャンヌの追及を躲しながら進んでいくとちよūdい場所があったのでターミナルポイントを設置することにした。途中で幽霊みたいなのに襲われたが簡単に返り討ちにした。

ターミナルポイントを設置後、カルデアのサーバーヴァントと少し会話することになり、俺はアルトリアに☒帰ってきたら話があります☒と言われ、クー・フリーンからは☒護

身術教えようか」と言われた。

「自分の身を守るには敵が巨大すぎるので、助けてください」と言ったら断られた。もしもの時は令呪であいつを犠牲にしようかと本気で考え始めた。

「なんやかんや、サーヴァントたちと交流を深めた俺たちは再びネロのいる城へ戻るのだった。」

第二十話

城に戻ると物々しい雰囲気での戦の準備をする兵士の姿があった。ネロに確認したところ今度はガリアへ行くらしい。ガリアは前線の一つらしくもしかしたら敵サーヴァントがいる可能性があるのだから俺たちカルデアもネロと同行することになった。

地味にネロが普通であることに安心した。

そうしてガリアへの道中で、ネロたちはマッシュと一緒に馬に乗る藤丸に質問した。

「藤丸よ、一人で馬には乗れんのか？」

「乗馬経験がないので無理なんです」

「ふむ、未来では馬は移動手段ではないのか？」

「そうなんですよ」

ふむふむと納得するネロ。ちなみに他のサーヴァントはみな平然と馬に乗っている。みなさん馬が当たり前の時代の人ばかりだからね。藤丸君は一度挑戦したが落馬してしまった。俺はもちろん乗れる組である。こう言うては何だが俺は車に乗っている時間より馬に乗っていた時間のほうが長いのだ。

会話をしているとちよこちよこ敵の兵士が襲ってくるがサーヴァントが軽く倒してしまう。どう考えてもサーヴァントが六人+マシユちゃんがいるこちらに勝てる可能性はゼロでしょう。

再び、会話に戻った俺たちにネロは提案してきた。

「どうだ藤丸よ、客将ではなく余のものとなるか？　ちなみに春樹は永久就職だぞ」

「……考えさせてください」

「……か、か、考えさせて」

「何か言ったか春樹？」

「……ロマン転職しちやいそう。どうすればいい？」

『え？　うん、マジ☆マリに相談してみよ』

上司に相談したら避けられた!!　ま、ま、まあこの特異点から逃げられればいいから大丈夫だ。うん。

『聞いてくれ春樹、マジ☆マリから返信があったよ！　諦めろだつて。他にもあなたはドギツイ女難の相が出るから気を付けてつてき。はははは。それにしてもすごいなマジ☆マリは的確じゃないか。まるで僕らのことを見ているようだ。』

マジ☆マリってネットアイドルだったっけ？　すごいな今の人工知能は。そしてさりげなく上司から見捨てられたことが悲しい。

後、ロマンは俺の不幸を笑ったので後で泣かす。

ネロと会話している藤丸君に軽く嫉妬しているマシユちゃんに癒されながらも無事に俺たちは無事に前線の野営基地についた。

そこでネロが演説したことで兵士の士気が大幅に上がった。ここら辺はさすが皇帝というべきだろう。

のんびりと演説を見ているとロマンから近くにサーヴァントがいるとの情報をもらい探してみると見知った顔がいた。

「お、皇帝陛下はもうお越しか。思ったより早かったね。それで君たちが噂の客将か。とても有能なんだってね。私はブーディカ。今はガリア遠征軍の將軍を務めているよ」

一人はブーディカ。ネロと同時代にブリタニアにいた女王である。俺自身は彼女とはあまり関わらなかつた。彼女を表すなら復讐の鬼とでも言おうか。ローマのやり方も惨いものであつたが彼女の復讐もまた惨いものであつた。ローマの女性は関わりたくない人が多すぎない？

俺は彼女から見たら憎しみに対象のはずだから距離を取ろう。

「君は压制者かな」

「え、いや、違います」

「では、共にこの青空で压制者と共に戦おうではないか！」

「え、ええ。頑張りましょう」

もう一人はスパルタクス。彼とは共に戦った仲である。俺は彼ほど勇敢な戦士を知らないと言つても過言ではないだろう。弱者を守る、それを實際に行動に移せるのはかつこいいものだ。俺に対して☒君は压制者ではない☒と断言された。あつてるけど俺はそんなに弱そうかな？

彼女たちと軽い自己紹介をした後に会話をしているとネロが頭痛によりダウンしたり、敵の斥候が現れるなど軽いアクシデントが発生したが軽く片付けた。

戦いが終わった後にマシユちゃんは何故、ブーディカがローマと共に戦っているのかを聞いた。そこで彼女はローマを恨んでいる、それでも其処で生きる人々のために共に戦うと言つたのだ。全く、英雄とはかつこいいな。俺も機会があつたのなら彼女の生き様を見てみたかったな。

マシユちゃんと藤丸君がブーディカと話している一方で俺はスパルタクスと話していた。

「見るがいい、この肉体こそが反逆の証！」

「その傷は酒飲んで酔つた時に付けた傷じゃなかった？」

「君は压制者だな！」

「違います！」

追いかけないで下さい！

「あははははは、もう一人の人は不思議だね。あんなにもスパルタクスと仲がいい人は見たことないよ！」

「そうですね。夏目さんは不思議な人です」

「そこも楽しそうだねー、みたいね雰囲気で見てるんじゃない。こっちは命がけなんだよ。」

俺が逃げ切って寝込んでいるときにブーディカとスパルタクスが藤丸君チームと戦っていた。なんでも実力が知りたいとのこと。

「俺たちは、はあ、戦わなくても、はあ、いいのかね？」

「片方が分かれば十分なのだろう」

「こひゅー、そんなもんかね」

「春樹、あなた凄いわね、よくあれから逃げ切れたわね」

「ふう、あいつは曲がるのに弱いんだ。猪突猛進タイプだから」

「ふーん」

興味なさげに頷いたオルタの横では無事に藤丸君たちが勝利していた。彼は成長しているらしい。さすがは英雄だ。

終わった後にブーディカがマシユを気に入ったらしく仲良く飯を食べたり、風呂に

入ったらしい。彼女がブリテン由来のデミサーヴァントと気付いたのだろう。俺もこの前アルトリアに教えてもらった。彼女にそのことを告げない理由はまだ早いかららしい。深いことは俺には分からないので置いておこう。

一方で俺はスパルタクスと背中を流し合うという懐かしいことをして一日を眠ったのだった。

◇

翌日、俺たちは偽皇帝なる人物に攻撃をしかけた。

敵はローマ兵ばかりではなく、魔術により生み出された怪物などが出現した。やはりレフがいるのかもしれない。そのことで少し悩んでいると、とうとう偽皇帝と出会った。

ガリアでカエサルつてこれを仕組んだ奴は何か歴史が好きそうだな。

「ふむ、こうして待った甲斐があった。名前を名乗れ美しきものよ」

「余はローマ第5皇帝、ネロ・クラウディウスである」

「よい名乗りだ。ローマはこうでなくてはならない。私も名乗ろうではないか。私はカエサルである」

嬉しそうに名乗った後に彼は今度は俺たちの名前も尋ねてきた。しかし、逆に俺は聞きたいことがあった。

「なんでその姿で召喚されたの？クレオパトラさん泣いちゃうよ」

彼女、俺が寝たいって言ったのに無理やり君の話の話を聞かせてきたし。その中で美貌を褒める話があったはずだ。何か聞かされすぎて頭がおかしくなりそうだった。

「それは私にも分からない。そもそもセイバーで召喚されたことがおかしいのだ。クレオパトラなら、この姿でも大丈夫だ。私たちの仲だからな」

「その自信が羨ましいよ」

「それで貴様は何故、私のことを知っている？」

「……企業秘密です」

睨みつけてくるカエサル視線を横を向いて回避する。あいつ頭がいいからぼろを出さないように気を付けよう。

ネロがカエサルの名前に驚いているとマシユちゃんがレフの情報聞き出そうとしたが教えてくれなかった。しかし、聖杯の存在は確認できた。やはり彼らが持っているらしい。

「さて、話は終わりだ。ここまで敵が多いのだ初めから本気でやらせてもらおう」

戦闘が行われたが一方的な戦いとなってしまった。カエサルも勝てないことは分かりながらも戦っていた節があった。そして消える間に気になる言葉を残していった。

「貴様はその御方であった時、どのような反応をするだろうな」

「あの御方？」

「会えばわかる。お前の美しい顔を見れないのは残念だが仕方ないな」

そうして消えた。ネロは過去の名君を殺したことに何とも言えない顔をしていたがすぐに元気になった。

俺にはそれがから元気であると分かった。

ネロのことそしてあの御方と、気になることが多く出てきたがが一先ず前進したのだから、ゆっくり帰還しよう。

第二十一話

カエサルを打倒して、首都ローマに帰還途中、少し変わった話を聞いた。なんでも古代の神様が近くの島に出現した模様。

神様なんて厄ネタが普通に出てくるあたりローマの闇は深い。

嫌だなあ、見たくないなあと思つていと好奇心旺盛なネロが案の定、興味を示してしまつた。

「と、言うことで余は是非神様とやらに会いたい！」

「そうですね、ドクターはどう思います？」

『うーん、神様というのが少し気にかかるなかな。それにこの時代に神様がいるなんてロマンがあるし行つてみるべきだと思ふよ。春樹はどう思う？』

「断固反対。俺にはドギツイ女難の相が出ている。今回も女性に絡まれるかもしれない」

すでにネロによって当てはまつている女難がこれ以上悪化されると困る。

『でも、女神とは限らないと思ふよ。君は心配性だなあ。はははは』

他人事だと思つて適当に言つてゐるな。今度、お前が寝たときに一気に鼻毛を抜いて

やる。

「魔術師殿も賛成してくれたので早速向かうとしよう。それにこのまま航路で帰るのもいいものだ。余の操船を披露してやろう。楽しみだろう、立香？」

「……はい楽しみです」

「そうだろうさうだろう。春樹を乗せた時も乗り終わった後、無言で何度も頷いていたからな」

吐き気を我慢してたやつだね。

藤丸君が俺のほうを見て全てを悟った様だ。俺は彼女の技術を知っている。あれは運転ではなく暴走だ。安全運転度外視の暴走だ。

「俺は陸路で帰ります。少し気になることが」

「何もないよな？」

「無いんですよねえ。はははは」

ネロが怖いです。

「では、さっそく船の準備をして出発だ！」

兵士が元氣よく返事をする中、カルデアチームは涙を流した。

◇

無事に島に着いた。藤丸君やサーヴァントたちはあの運転に耐えきつた。一方で俺

や兵士たちは寝込むことになった。俺は陸に上がりそこで休むことにした。少しでも動けば吐きそうだ。

「さて、本当に神様とやらはいるのか？」

ネロがあたりを見回すと、ロマンから近くにサーヴァントがいるとの情報が入り探すといた。あの女神が。

最悪だ。やっぱり女性だ。しかもギリシヤだ。これは最悪ですよ！

「ごきげんよう、勇者の皆様。この島へようこそ。人間を待っていたのだけれどサーヴァントも混ざっているなんて不思議ね」

『これは、信じられないな本当に神様だ！』

「ええ、そうよ私はステンノ、ギリシヤの神様よ。ゴルゴン三姉妹の一人でもあるわ」

この女神に何かしら悪寒を感じたのかマシユちゃんもネロが震えている。

話を進めていき、おおまかな話を理解したネロが共に来てくれるように頼みこむが断られてしまった。

グッド。素晴らしい。彼女は来ないほうがいいと思います。

「一緒にいけないの残念だけど代わりに褒美を上げるわ。ここまで来てくれた勇者様だもの。女神の祝福を上げる。この近くに洞窟があるからそこに行ってみなさい。そこには素晴らしいものが待っているわ」

それはトラップだ。言いたいけど気持ち悪いので黙る。

言葉に騙された藤丸君たちが洞窟に進んでいった。そしてステンノは何も話さずに黙っている俺に近づいてきた。

「あなたは行かないのかしら？」

「……」

「あら？ 返事をしてくださらないの？ 無礼な人間ね。私と目線も合わさないなんて」

勘弁してくれ、そして絡まないでください。

「もしかして私に魅了されることを恐れてるの？」

「……」

「これも無視。ひどいわね。ふふふふふ」

返答しない俺に興味を持ったのかステンノは俺の前に来て俺の頬を両手で挟み無理矢理正面を向かせてきた。

そんなことされたら……

「おぼぼぼぼろろろろろろ」

「……」

ステンノの顔面に俺の中の悲しみがかった。ステンノが笑顔のまま固まった。俺

のサーヴァントが☒あちやー☒みたいな顔でみている。

「おぼろろろろろろ」

彼女の両手を放してもらい違うところに吐く。苦しい。

「ふ、ふつつふふふ。ここに妹がいないことが残念だわ。いたらけしかけていたのに」

「はあ、はあ。駄目だ。もう駄目だ。俺は寝るしかない」

彼女には悪いが返答する余裕がない。

「ここにきてまだ無視なんて。あの人間を思い出すほどの無礼さよ」

「ど、どんな人間だったんですか？」

「あら、やっと興味を持つてくれたのね。普通なら教えないけど教えてあげるわ。そい

つはね、三姉妹がいるところに来たの」

なんか身に覚えが。

「そして私たち三姉妹を見て言ったの。メドウーサには将来性があると。そして私たち姉二人には憐みの目で見てきたわ。ああ、思い出しても許せないわ」

それ俺です。だって、体形的に彼女は発育よくなりそうだったけど姉二人は無理だっ

たでしょう。

「それは、無礼な人間ですね。体形のことを話に出す人間は酷いものです」

「私は体形については何も言っていないわよ」

……またやっちゃった？

「言い間違えました、はい。私は寝ます。探さないでください」

「それは無理よね。そう言って昔も逃げ出したじゃない。私たちが課題を出したのに逃げ出したし。今回は何かしらやらせたいわ」

……マギ☆マリの占いは凄いな。俺もマギ☆マリしよう。

「あなたの名前を教えてください。勇者様？」

……南中尋貞なんちゅうえんさだです」

「それ、本名？」

「もちろんです」

「そう、やってくれるわよね。南中尋貞？」

女神の口からそんな言葉を聞くことになるとは思わなかった。

「前向きに検討します」

「……」

「……」

お互いに笑って黙る。

「私の魅了が効かないのね」

「そうみたいですわね」

第二十二話

藤丸立香は疲れていた。女神であるステンノから、褒美という名の試練をやらされたり、褒美だと思つて宝箱を開けたら、意味の分からないエリザベートと謎の狐？犬？猫？のタマモキヤットという生物と出くわすというコンボを食らったからである。

「やつと終わった」と思ひのんびり帰ろうとした瞬間ドクターロマンから夏目春樹がサーヴァントに襲われたという報告が入り急いで戻った。

そこで藤丸立香は困惑した。彼が見たものは襲い掛かったであろうサーヴァントが消えており、顔を青ざめさせて「ふうふう」言っている夏目春樹、その夏目を不憫なものを見る目で見ている彼のサーヴァント。そして何かしらの液体を頭から浴びた女神様がいたからだ。

「あの、どうなっているんですか？」

「あら、勇者様が帰還なさったのね」

嬉しそうにほほ笑むステンノにドキッとしてみまう藤丸。これが女神の恐ろしさかと改めて認識した。

「あなたに聞きたいことがあるのだけど」

「なんででしょうか？」

「彼は本当に南中尋貞？」

『ぶっ』

え？　そこで藤丸の時間が、いやそこにいる全員（ロマン）を含めての時間が止まった。女神さまは何といった？　☒彼はなんちゆうエロさだ☒と方言を使って夏目さんのエロさを聞いてきた？　頭の中の女神像は粉々に砕け散った。その中でロマンはなんとか質問した。

『あの……彼は何かしたんですか？』

「ええ、彼はあろうことか私に体液をかけてきたのよ」

「ええ!!」

そこで再びパニックになるカルデアメンバー。

「ちよっ、なっ」

ジャンヌが何か言おうと瞬間、違う影が夏目に襲い掛かった。

「なぜ!!　余には何もしてくれないのに、ちよつと会っただけの女神にはそんなことしたのだ!!　余ならいつでも受け入れるぞ！」

素早く移動したネロが夏目の肩を掴むと揺さぶった。

「あー」

夏目は魂が抜けたかのように反応しなくなった。

「こらこら、その辺にしときなさい」

そこにマルタがのんびり割り込むと手を放させた。放り投げられた夏目は砂浜に急いで穴を掘って嘔吐した。

「もう、やだ。女性やだ」

そこにヴラド三世とオルタが背中をさすりに行った。彼は確実にサーヴァントとの絆を深めているようだ。

一方で藤丸は困っていた。まさか自分が試練を受けている中で、夏目がそんなことをしていたとは予想していなかったからだ。初心な彼は言葉を選びながらステンノに行った。

「夏目さんはドスケベだと思います」

「藤丸君……あんまりだ」

その呟きを最後に下を向いて制止する夏目。

「え？ 夏目って誰かしら？」

「え？」

「私は彼が本当に南中尋貞か聞いているのよ」

「ここで話が食い違うことに気付く藤丸。」

「彼は夏目春樹っていう名前ですよ」

「へえ、そう。彼の名前は夏目春樹っていうの」

遠くで☒個人情報の漏洩だ。訴えてやる☒と聞こえてきたが気のせいだと思ふ藤丸。

「あのかけられた体液は何でしょうか？」

「胃液よ」

「あー」

その言葉で自分が勘違いしていたことに気付く。

「それでは☒なんちゅうえろさだ☒って言うのは」

「彼の偽名でしょうね」

恐ろしい笑みを浮かべるステンノに彼がまた偽名を名乗ったということに気付いた。

☒せめて分かりやすい名前にしてください☒と心の中で愚痴ったがすでに遅かった。

前にいたステンノは夏目のもとに歩いて行った。夏目は吐き気が収まったのか砂浜

で寝ていた。すでに死にかけの模様。

「ねえ、なんで偽名を名乗ったのかしら？」

「……返事がないただの屍のようだ（裏声）」

「本当に屍になりたいの」

「……回復するまで待ってください」

「もう、私の課題から逃がさないから」

「……はい」

交渉成立したらしく、嬉しそうにこちらに戻ってきたステンノ。彼女はエリザベートとタマモキヤットを見て満足そうに頷いた。

「ふふふ、ちゃんと試練は突破したみたいね。その褒美に本当にいいものを上げるわ。この二人は違うから安心しなさい」

少し疑いの目を向ける藤丸に対してステンノは言った。

「あなたたちが戦っている連合軍の首都を教えてあげるわ」

「本当ですか?! 先輩、これであの試練を突破した意味がありましたね」

「ああ!」

そうして藤丸たちは連合軍の首都の位置を知ることができた。

◇

笑顔で船に乗るネ口達。そこには笑顔が溢れていた。しかし、そこには彼の姿はなかった。

「夏目先生の逃走劇……凄かったですね先輩」

「うん、あそこまで凄いのはルオンぐらいだね。他のサーヴァントも完璧なタイミングで乗り込んでたし」

「余も一緒に行きたかったぞ」

彼らは全員が思い出す。夏目の逃走劇を。

帰りの支度をしている中、唐突に彼は叫んだ。

「令呪を持って命ずる、俺をこの島から脱出させてくれ！」

「了解！ タラスク！」

「余たちも乗るぞ」

「分かつているわよ」

急に出現した亀？ 竜？ に乗り高速で飛んで行った。その光景に目を白黒させる

女神さまが少し面白かったのは内緒である。

「夏目先生はどこまで飛んで行ったのでしょうか？」

「さあ、でも首都の位置は知っているし再会できると思うよ。それにしても女神さまの

お願い達成できないよね」

「そうですね。再び夏目さんを彼女の前に連れてこいは厳しいですよね」

二人してため息を吐く。その一方で無事に陸に着いた。

首都への道中、結局、夏目に会えなかった。

「やっぱいいいですね、先生たちは」

「みたいだね。ドクター。夏目さんたちの位置は分からないのですか？」

『うーん、連絡を取っているんだけど返事がないんだよね。たぶんどっかで寝てるんだと思うよ。めちやくちや辛そうだったし』

確かにと全員で納得していると前からサーヴァントの反応がある兵士が現れた。それを倒して先に進むと兵士の親玉であろうサーヴァントが現れた。

「私の名前はレオニダス。ここから先は我らの防衛地点。我らが攻撃その身をもつて味わいなさい」

「スパルタの王、レオニダス。強敵ですよ先輩」

「分かっている」

「レオニダス？ やはり死者が蘇っているのか？ じゃあ、ブーデイカは」

「そんなことより戦闘ですよ、ネロ帝！」

「……うむ、分かっている。やるぞ立香！」

「はい！」

そして戦闘を開始しようとしたところ空から声が聞こえてきた。

「先手必勝！ これが戦闘よ」

「その通りだ！」

「それより、春樹大丈夫なの？」

「大丈夫よ！」

墜落してきたタラスクにより敵は一気に減った。そして周りに攻撃をしかける夏目のサーヴァント。ちなみに夏目はオルタにお姫様抱っこをされて眠っていた。

「ふうおお。余も夏目をあのように抱きしめたいぞ！」

「それは戦闘が終わってからお願いします」

「それもそうだな！　では突撃い！」

こうして行われた戦闘はマルタの奇襲によって陣形を崩されたスパルタ軍が敗北することになったのだった。

第二十三話

戦闘後、誰が春樹をお姫様抱っこするかという戦闘が再び行われ、話し合い(?)の結果、首都まではジャンヌで決まった。その時、彼女は咆哮して旗を振り回した。その姿はまさに、民衆を導く自由の女神とそっくりであった。

終始にやけ面だったジャンヌを恨みがましい様子で見っていたネロだが、首都近くまで来た時に一気にテンションが爆発した。

首都内に入りパレードのように人が盛り上がる中、民衆は見た。

「おい、皇帝様が抱きかかえているのは誰だ？」

「分からん、しかし、何とも大事そうに抱えているぞ」

「もしかしたら、婿かもしれないぞ！」

「つまり、結婚したのか!!」

「そうに違いない。今は戦争で余裕がないが終われば挙式なされるぞ」

「これはめでてえ！ みんなもつと騒ごうぜ！」

「うおおおおおおおおおおお！」

民衆の声が聞こえ笑顔が最高潮に達するネロ。一方でブスつとした顔になるジャン

又。他の面々は苦笑いしていたのだった。ちなみに春樹は悪夢に魘されているのか苦しげだった。

城内に到着して、すぐ、ネロの配下の武将二人が窮地に陥っているという情報が入った。ネロはすぐに藤丸たちに命令して援護に行かせるのだった。

◇

目を覚ましてみたら誰かに抱きかかえられているようだった。少し気持ち悪さが残るが動けないこともない。動こうとしたらベッドに寝かされた。どうやら俺は女神様から逃げ出すことに成功したらしい。

現状を把握するために薄目で周りを見たらネロが扉を閉めているところだった。

ほっほう。女神から逃げ出したと思ったら、皇帝に監禁されるとは、なかなか強烈なコンボですな。

諦めて寝ようとしたらネロが話しかけてきた。

「春樹よ、寝ていると思うが聞いてくれ」

何だ？

「余はな、少しこたえているのだ。ここまで過去のローマ皇帝と何度か戦ってきた。もしかしたら神祖まで出てくるかもしれない。こうして過去の皇帝たちが出てきたのは余の歩みが間違っているからではないかと考えてしまうのだ」

……まあ、普通こんなこと起こらないし、そんなこと考えてしまっても不思議ではないよな。

「余は第五代皇帝だ。そうなるように歩んできた。でも……」

「そんなこと考えるなネロ」

「春樹？」

泣きながら、そんな顔しながら弱音を吐くなよ。

「俺が思うに、過去のローマ皇帝もそこまで凄い人物じゃなかったよ」

「何を言っている!! あの偉大な人物たちを凄くないだど？」

「これで正しいのか、これは間違っているのか、皇帝とは何だ。たくさんのことに悩んでいた。悩んだ結果、間違った結果、彼らは歴史に名前を刻んだ。そして次の皇帝たちにローマを繋いでいったんだ」

「……」

「今、ネロがやっていることと同じだろ？」

「……うむ」

確かに全員が凄かった。でもネロも十分すごいと思う。

「それに、君が例え間違った道を選んだとしても、それは君が選んだ、君にしか選べない皇帝の生き様だ。最後まで進まなきや間違っているのか、あっているのかは分からない

さ。だからどんな道でも進め、それがローマだよ」

「ローマ……」

「それにカエサルだってお前を見て笑っていた。あいつは認めてなかったらさばつというタイプだよ」

「ふふふ、そうかもしれないな」

「そうそう、辛いときは笑つとけ。第五代皇帝は豪華絢爛に笑え」

「そうだな、そうだとも。余は第五代皇帝ネロ・クラウディウスだからな」

「もし、他の皇帝が出てきても堂々とそんな風に笑つて言つてやれ！」

「もちろんだ！」

泣きながらネロは笑った。俺もそれを見て笑った。

「なあ、春樹。彼らは悩んだ時にはどうしてたんだ？」

「そうだなあ、どつかに息抜きに出かけたり、後は俺によく相談してきてたよ」

「……本当に余と一緒にだな」

「ああ」

「春樹、余も相談していいか？」

「もちろん。どんな時でも相談に乗るよ」

「ありがとう。余は嬉しい！」

ネロは飛び込むようにして俺にタツクルしてきた。その拍子に俺とネロはベッドに横になってしまった。俺が抱き着いてきたネロの頭をポンポンと触っているとネロがすやすやと寝息を立て始めた。

ゆっくり休んでくれよネロ。

ネロをゆっくりベッドに寝かせようとするがネロのホールドが外れない。俺には分かる、このネロから絶対に放さないという覚悟が見える。

俺は諦めて一緒に寝ることにした。

◇

それから数時間後、ネロは目覚めた。俺の顔を見て、かっこ悪いところを見せたなと言ったが見慣れてるから気にしなくてもいいと言ったら赤面して足早に出て行った。

ちよつと胸がキュンつとしてしまった。

今度は部屋の鍵がかかかっていなかったので安心しながら歩いていると藤丸君たちとエンカウトした。

「あつ、夏目さん元気になったんですね」

「うん。元気になったよ。ドスケベな夏目さんは元気になったよ」

いきなりスケベ扱いされたことを忘れん。

「そ、それは……そもそも夏目さんが紛らわしい偽名使ったからじゃないですか!」

「馬鹿野郎! 女神とか厄介なものに名前を知られることがどんなに恐ろしいことなのか分からんのか!」

「それは……いやいや、紛らわしい偽名を使ったことと関係ないですし、話をそらさないで下さい」

「こやつ、勢いで誤魔化されなくなったな。」

「まあ、この話は置いておこう」

「……そうですね」

不毛な争いが長引くだけだ。

「俺が寝てた間に何かあった?」

「そうそう、ネロ帝の配下の客将にサーヴァントがいたんですよ。呂布と荊軻さんなんですよ」

「おお、心強いじゃないか!」

「夏目さん、この二人と知合いですか?」

「うーん、呂布も荊軻も見たことがあるなあ程度だったよ」

「そうなんですか?」

「俺は英雄ならみんな知り合いつてわけでもないしね」

「意外です」

荊軻の時代には俺は後に始皇帝になる人と共にいた。呂布の時は珍しく魏呉蜀のそれぞれにいた。だから、何度か会うことはあったがあまり深くかわらなかつたんだよな。

藤丸君との話で荊軻と呂布、二人とも話がかみ合わないなどの話をしていたらネロに呼ばれた。

「立香、ご苦勞であつたな。そなたの活躍で大事な将を失わなくてすんだ。感謝するぞ！」

「はい！」

「そして皆の者聞け！ これより我らは敵本陣へと攻撃をしかける！ 時間は明日の朝からだ。敵の攻勢も激しくなっているがガリアを奪還した今、我らに勝機はある！」

「おおおおおおおおおおおおおおお！」

「今日は皆の者、よく体を休めるように！ 以上解散！」

俺は隣に立っていた藤丸君に話しかけられた。

「なんだか、ネロ帝元氣になりましたね。ちよつと追い詰められているような感じだったから安心しました」

「俺もだよ」

二人して安心したところで各自の部屋に戻った。そこでサーヴァントたちと軽く話し合うことになった。

「春樹、あなたネロ帝と何かあったの？」

「まあ、励ましたよ」

「本当にそれだけ？ あの様子だったら他にもあったんじゃないの？」

ええい、お前は何が聞きたいんだマルタ。

「ちよつと落ち込んでたから、どんな時にも相談に乗るって言った。他にも頭をポンポンした」

「……それは駄目だね。落ち込んでるときに親身になつてもらつたらやられるわ」

「ネロはそんなちよろくないでしょ」

「いやー、すでにあんたに首つたけの状態ですれでしょ？ 今夜は覚悟したほうがいいわね」

「そんな馬鹿な」

「あなたたちはどう思う？」

果物を食べている二人がこちらを向く。

「余として、今夜が決戦だな」

「私も同感」

「……誰か一緒に寝よ？」

「嫌！」

そんなみんなして嫌がらなくても。

「とにかく、あんたの自業自得なんだから覚悟決めなさい！」

そう言って追い出された俺は風呂に入り、とぼとぼと自室（監禁部屋）に戻った。

そして寝ていると部屋にノックの音が響いた。

「春樹、余である。起きているか？」

「起きているよ」

返事をするとなろが部屋の中に入ってきた。

「少し相談したいことがあってな」

「うん、聞くよ」

するとネロはベッドに腰をかけていた俺の横に座った。距離が近い。

「それで相談って何かな？」

「うむ、明日のことなんだがな、……その……勝てるか心配になってな」

「それなら大丈夫だよ。藤丸君や客将のみんなもいるじゃないか」

「そうだな。それでだな……今夜は……その……」

ちらつちらつとこちらを見ながらためらいがちにネロに俺は昔を思い出した。彼女

は寂しくなったり、心細くなったりするとよく部屋に来て一緒にいてくれと言ってきたもんだ。

「いいよ、ネロが寝るまで一緒にいようか」

「うむ！」

嬉しそうに笑ったネロに手を引かれて俺はネロの部屋に行った。そして彼女が寝たのを見守った後に自室に戻って寝直したのだった。

第二十四話

朝、目を覚ますと体が縛られて動けなかった。そして目の前にネロの寝顔があった。俺の部屋じゃなくてネロの部屋になつてない？

……何があつたの昨日？ 俺は確か自分の部屋で寝たはず。なのに何故俺は簧巻きにされて寝かさせられているのだろう？

何とか抜け出せないかと体をくねくねさせていると隣からネロが起きる気配がした。

「おお、目を覚ましたか春樹。では目覚めのキスをしようではないか」

「!? つちよ、あかん。やめて、この状態で。あつ……」

キスをされてしまった後にネロに話を聞いたところ、一緒に寝ると思っていたのに勝手に消えていたので今度は逃げないように捕縛して連行したとのこと。

俺が間違っているのかもしれないけど、普通は俺のほうに来て寝ない？ そこで捕縛&連行つてパワフル過ぎない？

言いたいことはあるけど無意味なので黙っておく。俺はネロに勝手に出て行ったことを謝つて自室に戻り着替えて食堂に向かった。

食事後、今回の連合帝国首都進撃作戦について説明された。俺は後方でスパルタや呂

布など会話ができない組と待機するらしい。貧乏くじを引かされた。一方で藤丸君とネロは前方で戦うとのこと。

作戦会議も終わりついに俺たちは首都に向けて進んだ。

◇

後方でバーサーカー二人が暴れないようにのんびり進んでいると、敵が襲い掛かってきた。

「全員、混乱することなく迎撃！」

一時、混乱したもののすぐに体制を立て直したネロ軍とサーヴァントたちは敵軍に反撃した。

残された俺は暴走し始めたスパルタクスを抑えるために近づいた。

「スパルタクス、落ち着いてくれ、戦闘はまだまだあるから」

「否、やつらが圧制者である！」

「会話しようよ！ それに彼らは圧制者じゃないって！ 他にも圧制者はいるって」

「共に行こう同士よ！」

「WHAT？」

すると俺はスパルタクスに肩車をされて共に突撃することになった。

「フハハハハハハ、我が愛を受け取るがいい」

「……すげー揺れる。頑張れ俺の筋肉！ 落ちたら頭を引きずられるぞ！ ……あつ」
「このまま行くぞ！」

「……誰でもいいから助けてくれえ！ その敵軍の兵士、止めろおおおおお！」
俺は肩に足を引っかけた状態になってしまった。よって頭をスパルタクスの尻にぶつけながら戦闘をすることになった。

あまりの辛さから逆さ状態で敵兵に助けを求めるために叫ぶと顔を引きつらせて下がった。よく見ると全員がスパルタクスから距離を取り始めた。もちろん味方も。

「何をやっているんだ！ もっと根性出せよ！ ローマだろ!!」
首をかくんかくんさせながら叫ぶ俺に今度こそ敵兵が撤退し始めた。

「ストップ、敵兵、逃げた！ 止まって スパルタクス！」
俺の声が聞こえたのかオルタが戻ってきて助けてくれた。最近、俺の中でオルタへの好感度が上昇中です。

首がむち打ちになった俺は考えを巡らせていた。敵が何をやりたいのかが分からな
いが、嫌な予感がする。主に俺の身に何か起きそう。

前方にいるネ口達に無事を知らせるように兵士に伝えたところ、前からブーディカが
やってきた。

「話は聞いたよ。スパルタクスのことありがとね。今度は私も一緒に面倒見るよ」

「本当にありがとうございます」

報告に行った兵士君、ナイス。俺が将なら褒美をめっちゃ出すわ。

ブーディカが来たことよって落ち着いたスパルタクスと呂布と共に進んでいると前方から叫び声がかえってきた。

何かでつかい敵が出たんだらうなと考えを巡らせていると、こちらにも敵襲があった。

「みんな、またあの二人が暴走したから敵を倒しつつ連れ戻してきてくれ！」

俺の命令に頷いたサーヴァントたちがスパルタクスを追いかけて、俺はその場で待機していた。全方向で戦闘が行われている中、あるところでつかい馬が兵士を踏みつけていた。よく見ると見たことがある赤毛の少年もいる。

あいつ、サーヴァントだ！

やばいと思った俺は令呪を発動しようとしたが、体が動かなくなつた。

またですか!! 最近多くない？

動かないことに焦っていると赤毛の少年が俺の前に来た。

「おや、こんなところに不思議な服を着ている人がいるな。あなたは誰だい？」

「俺はしがない旅人だよ少年」

「あははは、しがない旅人がこんなところでポロポロになるなんてことはないと思うよ」

「俺も少年がこんな戦場のど真ん中で馬に乗って暴れまわるなんてことはないと思うな」

「言われてみたらそうだね。サーヴァントとして召喚されたからか知らないけど僕が戦うことに違和感がなかったよ」

「……召喚されたことは関係ないと思うな。お前の性格が原因だろ。アリストテレスも諦めていたし」

「うん、そうだね。先生にもいっぱい注意されたからね。そしてやっぱりあなたは●●●先生ですね」

「違うと思うな」

「そんなことないさ。不思議と分かるんだよ。普通の人なら絶対に分からないけど先生は他の人とは圧倒的に雰囲気が違うからね。遠目から見るときに☒あ、先生がいる☒って分かったよ。きっと他の英雄たちも完全には分からないかもしれないけど何となく分かる人は多くいると思うな」

「……そんな嫌な情報知りたくなかった」

どおりで、すぐにばれると思った。……自分から墓穴掘つたのもあつたけど。

「さて、このまま先生と昔みたいに関答をしたいけど時間がないから、もう行くね。……そうだし！ 先生も連れて行こう。そのほうが面白くなりそうだし」

「そんなついでで連行しようとしなくてくれません」

「いいからいいから、ほら先生、行くよ」

文句を言う前にアレキサンダーは俺の体を抱きかかえるとブケフアラスに乗って走り出した。

子供に抱えられるなんて恥ずかしい！

撤退していく軍を見てみるとブーデイカも誘拐されていた。この子は一体何がしたいのだろうか？

「アレキサンダー、君は何がしたいの？」

「うん？ 僕はねネロ・クラウディウスと話がしてみたいんだ」

「それは大事なことか」

「とても大事なことだよ」

「……お節介だな、相変わらず」

「それは先生譲りだからね。先生もいろんな人にお節介を焼いて苦労してるんじゃないの？」

「うーん、否定できないのが辛いところだな」

二人して笑ってしまう。こうして話してしまうのも仕方がないだろう。大切な弟子だったのだから。

◇ 誘拐された俺とブーディカはとある部屋に別々に入れられた。途中でインテリヤクザみたいな人がいたが誰だろうか。結構現代の人っぽかったな。それよりロマンと連絡せねばと会話を試みるができない。

「カルデアの魔術師頑張れよ！」

叫んだところでどうしようもないので現状を整理する。

まず、俺の体が動かなくなつた結果、誘拐された。つまり藤丸君が成長するために俺が邪魔だったということだ。これは前回のフランスと同じだろう。アレキサンダーは敵対する気はないと言っていたし死ぬことはないだろう。

◇ 彼らが迎えに来てくれるまで俺は待つて居よう。俺は部屋で横になるのだった。

夏目春樹とブーディカが誘拐された。その情報はネロを大きく動揺させた。ちなみにカルデアメンバーは□また誘拐された。でも大丈夫だろう□と結構薄情なことを考えていた。

「……どうすればいい春樹？」

弱弱しく呟かれた名前に藤丸もまた動揺した。彼にとってサーヴァントとは物語の中の英雄。つまり憧れの存在だった。どのような逆境にも立ち向かい笑ってそれを乗

り越える。そのような存在であると考えていた。

しかし、彼女はどうかだろうか。大事な人を誘拐され、ピンチに立たされた。その彼女は笑顔ではなく悲壮感を漂わせていた。彼は理解した。英雄もただの人間なのだ。大切な人から離れたことを心細く思う自分と同じ人間なのだということ。

この状況でマシユもサーヴァントも何も言わない。だが、藤丸には何となくだが分かった。☒自分がなんとかしなければならぬ☒と。

「ネロ帝！」

「な、なんだ？」

「何を止まっているんですか！ 夏目さんやブーディカさんはあなたの助けを待っているんですよ！」

「余の助け？」

「そうです！」

ネロが顔を上げて藤丸の顔を見る。その顔は決意に満ちた顔をしていた。その顔を見たネロは深呼吸をすると上を見た。

「感謝するぞ、立香。余はどこか弱気になっていたと思う。しかし、ここで止まるわけにはいかない！ すでに荊軻からの情報で敵拠点は分かっている。このまま敵拠点を破き二人を助けるぞ！」

「はいー！」

頷くと藤丸はロマンに情報を求めた。敵がサーヴァントであること。今から行く砦が罠であること。それらの情報を踏まえて藤丸は決めた。

「突撃しましょう！ 敵の罠があつたとしてもマシユやみんながいるなら勝てます！」

「はいー！」

彼の決断に笑つて答えるサーヴァントたち。

「よく決断してくれた、藤丸！ これより我らは敵の砦に攻め込む。みなのものついて参れ！」

藤丸は、自分には何もできないと考えていた。しかし、その考えが間違いであることに気付いた。そして自分もまた今回のように英雄の助けになれるように成長しようとして心へ誓つたのだった。

第二十五話

部屋に置いてあつた椅子に座つて一息ついていると、ふと逃げ出せる気がしてきた。見張りの人も来ないし。早速行動に移すことにした。外に出てみるとやはり見張りはおらず、簡単に抜け出すことができそうだ。

隣の部屋ですやすやす寝ていたブーディカを見つけた。敵に捕まっているのにどうどうと寝るなんて凄いな。

感心しながらも近づいて揺すつてみたが起きない。おそらく魔術で眠らされているのだろう。起こすのを諦めて俺は背負つて彼女を外に連れ出すことにした。

背中にあたる彼女の胸が少し嬉しいです。

邪な感想を抱きながら外に出ると、既に戦闘は終わっていたらしくアレキサンダーが消えるところだった。すると背中中のブーディカが目を覚ましたので下ろした。やはり魔術を使われていたのだろう。

そして俺を見つけたネロは泣きながら抱き着いてきた。俺はネロに対して捕まったことを謝った。そしてマルタ達には「捕まりすぎじゃね？」と言われたので「これも神の思し召しです」と言ったら頭を叩かれた。嘘は言つてないのに。

落ち着いたネロは軍を整えて再び敵本拠地に向けて出発した。兵士の配置を決める際にネロが俺を隣に配置した。目の届かないところに置きたくないらしい。

◇

何度か戦闘が起こる中、敵の首都に到着。やはり、本拠地ということに敵が大勢襲い掛かってきた。兵士は全員が洗脳でもされているのか恐怖心を捨てたかのように特攻してくる。このままではいくら倒してもきりがなく、時間が掛かりすぎるということで敵皇帝を討つメンバーとこの場で敵兵士と戦うメンバーで分けることにした。敵皇帝襲撃チームはカルデアとネロ、荊軻で決まった。

そして荊軻の案内の元、無事に敵城に忍び込んだ。道中にローマとはかけ離れた化物と戦闘を行いながら進んでいくと広い部屋に出た。そこで俺たちを迎えたのはローマの建国の祖ロムルスであった。

「勇ましい、それでこそローマ当代を統べるものである」

「あなたは、まさか……神祖ロムルスなのか？」

「そうだ、私こそはロムルス、ローマである！」

「あなたがいるかもしれないと考えていた、いて欲しくないと願っていた」

「ローマが私であるのだ。ならば私が連合軍の首魁としているのは必然である。ネロよお前も連なるがよい。私はそなたを許してみせよう」

藤丸君は何を言っているのか理解できないという顔をしていた。ロムルスは単語を☒ローマ☒に置き換えて話すことが多いのだ。ちなみに俺は全て翻訳できます。

藤丸君が驚いている前ではネロはロムルスを睨み返した。

「断る。そなたは確かに偉大な人物だ。しかし、あなたが指揮している民はどうだ。笑顔がなくなっただ生きているだけだ。あんなものはローマとは呼べぬ。今、この時代に民を笑顔にできるのはローマ帝国第五皇帝、ネロ・クラウディウスのみ！ 故にこそ、神祖ロムルスよ！ 余はそなたと敵対する！」

その返答に嬉しそうに笑うとロムルスは言った。

「許す、お前の力を見せてみる」

頷くと今度は俺の方を見た。

「久しいな我が友よ」

「久しぶり。お前さんをローマを滅ぼす側に呼ぶなんて随分と良い趣味のやつがいるな」

俺が嫌そうな顔でいるとロムルスは真剣な顔をして尋ねてきた。

「お前は何故そこにいる？」

「人類を滅ぼされないようにするために、それと仕事のためかな」

「否、お前はそこにいなくてもいいはずだ」

「？」

「お前の仕事は英雄の物語を書くことである。それはお前から聞いた。しかし、それだけなら近くで共に過ごす必要はない。英雄が活躍するのを遠くから眺めるだけでもいいはずだ。それなのに何故、再び英雄と共にここにいる？」

彼には俺が英雄たちの物語を書くために転生したことを話した。だってロムルスは勘がいいとかいうレベルではないぐらいにたくさんのことに気付く奴だったからだ。グイグイ尋ねられていろいろしゃべってしまった。

……そしてそんな話を聞いたせいだろう、彼は死ぬ時にいった。☒お前はたくさんの英雄の死を看取ったのだな。そのたびにそんな悲しそうな顔で壊れそうになるのだな。すまない。そんな顔をさせて☒と。

確かに俺は英雄たちと居ても辛いことばかりの人生だった。彼らはどんなことがあっても俺より先に死んでしまう。必ず俺が看取る側になる。

それでも俺には彼らと共にいたい理由がある。

「……言われたんだ」

「何を？」

☒お前がいてくれて良かった、ありがとう☒って

「それだけか」

「それだけさ。それだけで十分だ」

ギルガメツシュに言われた。☒本来ならお前は存在しない☒と。そんなことで興味をもったあいつと友人になった。

あいつは歳をとってから俺に言ってきた☒本来なら、我もエルキドウもこんな充実した人生にはならなかった。お前がいてくれて良かった、ありがとう☒と。それがあいつが俺に感謝を述べた最初で最後だった。

「何人もの英雄と出会った。そいつらは辛いときには誰にも相談できないような奴らばかりのただの人間だった。お前も含めてな。なのに希望やらなんやら背負わされて苦しそうな顔をしていた。そんなの見たらさ、こいつらが笑って生きるために俺ができることをしてやりたいって思った」

「自分が苦しむと分かっているのか？」

「俺が苦しむことが辞める理由にはならない」

笑顔で言う。とロムルスは寂しそうな顔をした。

「お前が苦しむのを見たくない者もいることを考えて欲しいものだ」

「知っているよ。それでもこの生き方を変えないと決めただけだ」

後ろでサーヴァント達が見守る中。部屋の内から声がした。

「いつまで話をしている、さっさと片付けろ！」

「レフ！」

レフ教授を睨みつける藤丸君とマシユちゃん。

「分かった。では、見るがいい我が槍、私が此処にあることを！」

「来るぞ、春樹！」

「ああ！ 藤丸君！ レフを頼む」

後ろで余裕そうな顔をしているレフに、ロムルスにこんな役割を押し付けたレフが憎くなった。

「分かりました。やるぞマシユ、みんな！」

「はい！」

レフの方に走っていく藤丸君を見送って俺とネロはロムルスに対峙する。

「安心しろロムルス。お前だけにはローマを破壊させたりはしないよ。なあネロ！」

「当たり前だ！」

第二十六話

先に動いたのはロムルスだった。彼は俺たちに対して両手を上げたYの字のポーズで俺たちを威嚇してきた。

「あのポーズはまさか!!」

「何、知ってるの?」

警戒態勢を取るみんなの前でオルタがロムルスから視線をそらさずに尋ねてきた。

「ああ、あれは……」

「あれは……?」

ゴクツとのどが鳴る。

「ローマポーズだ」

「ローマポーズ? 何それ?」

「偉大なるローマ専用のポーズが欲しいと言われて俺が発案したかっこいいポーズだ。あの姿勢ならば週刊少年誌でも表紙を飾れるほどの最強のポーズだ」

「……意味は?」

「特にない。強いてあげればかっこいい」

俺も昔のように彼と同じポーズを取る。

「さすがは我が友、完璧だ」

「ふ、お前には負けないぜ」

お互いに視線が外せない、少しでも動けばやられる。緊張感が辺りを支配する。

「意味がないならやるわよ」

均衡を崩したのはオルタだった。彼女が手をかざすとロムルスの足元に黒い炎が発生した。

「当たらぬ！」

一歩も動かなかったロムルスの足元から急に木々が生えロムルスを炎から遠ざけた。

「あれは何?! 宝具？」

「この木? 何の木かって? 気になるの?」

「別に木の種類はどうでもいいわよ!」

「でも、名前の知らない花が咲くかもしれないよ」

「その時は凶鑑で調べるわよ。それよりあれ!」

「うーん、たぶんローマを守護する大樹じゃないかな」

「他に情報は？」

「彼が本気出したら最強質量兵器ローマになる」

「ローマってろくでもないわね！」

「ローマを馬鹿にするな！ それに話してる場合ではないぞ！」

ヴラドとネロが木の上を駆け上がりながら器用に戦っている。ネロって人間だよね？ なんてあんな動きできるの？

「分かつてるわよー！」

オルタも駆け上がるとそこに加わり剣を振り回し始めた。どんどん伸びていく木は天井を突き破り空まで伸びていった。

ジャックと豆の木、あそこまで登った少年って凄いな。改めて空高く伸びる木を見て考えてしまった。

「あんたもぼつとしてないで来る！」

マルタに連れられてタラスクに乗り俺も空の上、天空へ向かう。天空ではロムルスが3人と均衡した戦いを行っている。

「実にローマである！」

「うつとおしいわね、ローマ、ローマって私はローマとは無関係よ！」

「余は……関係があるな」

「そうだ！ すべてはローマに通ずるのだから」

ヴラドの槍とオルタの剣が空を舞いロムルスを攻撃するが全て槍と木々に防がれる。

「強いわね、どうしたらいいの？」

「木が守れないように空に突き上げたら？」

「それよ！」

俺発案の作戦を実行するらしいので念話で知らせる。

『何とか空に突き飛ばせない？』

『難しいがやれと言われればやるぞ春樹』

『同じくよ』

手短かに作戦を組んでいく。ネロにも協力してほしいけど会話が届かない。そこはアドリブでなんとかしよう。

「令呪をもって命じる！最強火力を叩き込め！」

「了解！」

俺の声が聞こえたネロが大きく後退したところで、オルタの黒い炎が先ほどの比ではないくらいに燃え上がりロムルス足場を燃やす。そこにヴラドの槍が一気に下から押し寄せる。

先ほどはバックステップや槍で防いでいたが辺り一面が炎と槍になったことでロムルスは大きく飛び上がった。

「そー！ タラスク！」

そこに高速で飛来するタラスクによってロムルスは大きく空に吹き飛ばされた。

「このまま地面に着地されたらやり直した、ここで決着つけるぞ！」

ネロがおそろおそろとタラスクに乗り、全員で彼を追いかける。追いつくと彼はローマポーズで俺たちを待ち受けていた。

「このような場所で戦うとは予想していなかったぞ、友よ！」

「予想通りに生きてこなかったやつが言うな」

「その通りだ、決着を着けようではないか！」

圧倒的に不利なはずなのに決して弱気を見せないロムルス。やはり偉大なる建国の祖である。

追いかける時に事前に打ち合わせしていた作戦を取る。先ほどのようにヴラドとオルタが空中に浮かぶ槍や炎、剣で下や正面から攻撃する。しかし、決め手が欠けるのか空中でも凌ぐロムルス。

「足りんぞ！ こんなものでは私を倒すことはできないぞ！」

吠えるロムルスは俺たちを見て驚く。

「ネロはどこに？」

「余ならここに！」

ロムルスが上を見上げるとネロが急降下し、そのままロムルスに剣を突き立てた。そ

れはどう見ても致命傷であった。

ごほつと血を吐くロムルス。そして共に落下するネロ。マルタに頼み二人の下に行き彼らを拾う。無事に成功してほつとする。

俺たちが事前に立てていた作戦は単純だった。ロムルスが俺のサーヴァントに気を引かれている間にネロを移動させて不意打ちさせるというものだった。

やはり、サーヴァント戦において人間よりもサーヴァントに注意を向けてしまうのは仕方ないことだ。実際にロムルスも注意していたとはいえ、二人に集中攻撃されれば気を逸らしてしまうというものだ。

ネロはヴラドの槍に乗って上に上がりそのまま槍を蹴って急降下したというわけだ。

「大丈夫かネロ？」

「うむ、それより……」

ネロは倒れているロムルスに近づく。

「ネロ。永遠なりし真紅と黄金の帝国。そのすべてをお前と、後に続く者たちへ託す。忘れるな。ローマは永遠だ」

「はい」

涙ぐみながらネロは返事した。

「そして友よ。世界を任せただ」

「俺には頼りになる英雄たちがいる。大船に乗ったつもりでいろよ」

「そうだな。お前には助けてくれるものがある。ローマの全てがお前を応援しているぞ」

満足そうに笑って消えたロムルス。やれることはやるよ、じゃあな。

「じゃあ、下に戻るか」

そうして下に戻ると黒い触手の化け物がレフに戻ったところだった。触手人間とは業が深いな世界を滅ぼそうとしているやつは。

かなり引いていると、下に到着した俺は藤丸君の隣に立った。

「夏目さん、そっちは終わったんですか？」

「うん、被害無く終わったよ。ロムルスがかなり力を抑えてくれたおかげだ。そっちも終わった様だね」

「はっ」

彼と共に前を見るとフラフラになったレフが怖い顔でこちらを見ていた。そして聖杯を掲げた。

「このままでは終わらん！ 古代ローマを生贄に最大の英雄を召喚しよう。ふははははははははは！ ローマに終焉を運ぶもの、来たれ！ 破壊の大英雄アルテラよ！」

そして現れたのは褐色の肌に白い礼装を纏った女性、アルテラであった。

第二十七話

遠い遠い昔の話、遊牧騎馬民族の大王である女性はある男と二つの約束をした。一つは、あなたが文明を破壊しないように一緒にいます。もし破壊しようとしたら止めますというもの。そして二つ目はお前は私の虜である。そして私はお前の虜だ。だからどんな時でも私といてくれ。絶対に他の女性とは駄目だぞというものである。一つ目は男から。二つ目は女性からの約束であった。

男性はこの約束をこの生涯のみであると考えた。しかし、女性は……。

◇

「レフううううううううううう！」

俺は久しぶりに怒鳴った。俺の声にびっくりしているマシユちゃんや藤丸君には悪いが俺は怒りでどうにかなりそうだった。

「ロムルスに続いてアルテラにローマを破壊させるだと。ふざけるなよ！ ロムルスがどんな思いでローマを建国したのか、アルテラがどれほど嘆きながらローマを滅ぼしたのかわらないくせに！」

「だから何だと言うのだ。虫けらが吠えるな！ 建国者と終焉者がローマを破壊する。」

「何故……」

「私はフンヌの戦士であり、大王だ。何より、私は文明を壊したくない」

「ふざけるな！ 私はお前を召喚した！ 無理やりにも言うことを聞かせる。聖杯よアルテラに、このローマを滅ぼさせろ！」

「死ね」

叫ぶと同時にレフはアルテラによつて首を飛ばされた。転がったレフの頭は何も話さなくなった。

レフに言いたいことがあつたのに今はそれどころでは無くなった。あいつは最低なことをしていきやがった。このままでは彼女がローマを滅ぼしてしまう。

焦っているとレフが使用した聖杯はアルテラに吸収された。するとアルテラは先ほどまでは機嫌の悪そうな顔をしていたのに対して今度は無表情になった。

「私は世界を滅ぼす」

彼女が愛用していた三色蛍光ペンの剣を前に構えた。するとその剣が回りだした。それは前世で何度か見た彼女の剣が真価を發揮する前兆であつた。

「マズイ！ ヤバいの来るぞ！」

「分かっています、ジャンヌ、マシユ、宝具解放だ！」

「はい！」

藤丸君が令呪を発動したことによって二人はすぐに宝具を発動した。俺のサーヴァントには防御できるやついなと思いつながら、二人に守られた。

そしてアルテラの宝具が発動したのだった。

◇

俺たちは無事に生き残れた。藤丸君があそこですぐに令呪を発動していなければ俺たちは全滅していたかもしれない。そしてアルテラの宝具から生き残っていたブーデイカや荊軻と合流した。スパルタクスと呂布は直撃してしまったらしい。

荊軻にアルテラの偵察を頼みながら全員で今後について話し合う。

「これから、どうするんですか？」

「止める。アルテラにこんなことさせるわけにはいかないからな」

「その通りだ！ 神祖にもローマを守ると約束したのだ。何があつても後世にローマを繋いで見せる！」

ネロの言葉に全員が頷く。そのタイミングで荊軻が戻ってきた。

「奴は歩きながらゆっくり移動中だ。すぐにでも追いつける」

「よし、皆の者追いかけるぞ！」

俺たちは走り出した。しかし、アルテラを追いかける途中、聖杯の影響で現れたワイバーンに足止めをくらってしまったが簡単に突破して彼女の前に立った。

「行く手を阻むのか」

「当たり前だろう。約束したからな、☒あなたが文明を破壊しないように一緒にいます。もし破壊しようとしたら止めます☒って。約束はちゃんと守る」

「約束……?」

少し動きを止めるアルテラ。俺とした約束を彼女が忘れてしまったのか、それとも聖杯によって記憶を変えられたのかは分からない。でも俺がすることは変わらない。

「余は貴様を絶対に先に行かせない。この世界は美しいものであふれている。それを貴様に破壊されてたまるか!」

「……私は破壊の大王、ただ壊すだけ」

「会話では止まらぬか、ならば実力で止めてみせよう。春樹、立香、力を貸してくれ。これが最後の戦いだ!」

「はい!」

「おう!」

◇

アルテラとの戦闘は苛烈であった。しかし、こちらはサーヴァントが六人ということもあって無事に勝つことができた。

そして、彼女は地面に倒れ伏して空を見上げている。

「アルテラ……」

消えかけている彼女に近づく。

「ああ、●●●か。思い出した」

「忘れるなよ、お前は俺の虜なんだろう」

「違う、お前が私の虜なんだ」

「どっちもだよ」

「そうだったな」

アルテラはずっと見せていなかった笑顔を俺に見せた。

「約束を守ってくれてありがとう」

「当たり前だろう。約束は絶対に守るって約束したじゃないか」

「そうだったな。ああ、こうしてお前と再び会えて嬉しいのにすぐにお別れなんて悲し

いな」

「きつと、会えるよ」

少し泣きそうになりながら言った。

「そうか、ならよかった。また会おう。そして会ったら約束を守ってもらおう」

「ああ」

アルテラは満足そうに消えた。

「ああ、また会おう」

俺が呟いた後ろでは藤丸君が聖杯を回収した。ネロとの別れが訪れた証拠だった。

第二十八話

「それがそなたたちが探していたものか？」

ネロは藤丸君から離れマシユちゃんが持つている盾に入っていく聖杯を見つめながら尋ねた。

「そうです。これで私たちは目的を果たしました。あなたのおかげです、ありがとうございます！

藤丸君とマシユが頭を下げる。そして俺も一緒に下げた。彼女とはこのままお別れなのが辛い。そう考えていると体が透けてきた。どうやらお別れの時間らしく荊軻やブーデイカの体も消え始めた。

「おい、そなたたちの体が消えてきているぞ！ まさかこのままお別れなのか？ まだ、褒賞もだしていないのだぞ！」

ネロが泣きそうな顔で言った。

「未来から来たと言っていたのだ、いつか別れが来るのは分かっていた。けれども、こんな急な別れでなくてもよいではないか！ 春樹！ お前は、また、いきなり余の前から消えるのか！」

俯きながら尋ねてくるネロに俺は言った。

「大丈夫だよネロ」

「え？」

「俺はすぐに君と会えるよ」

「本当か？」

「ああ。この俺が言うのだから本当だよ」

今、思い出しても恐ろしかった。逃げ出して僅か三日で俺は捕縛された。ローマの首都から近い町の宿で寝ていたなら、次の朝には例の部屋で寝かされていたのだから。

「なら、すぐにお前を見つけて出すぞ」

「俺は君を待っているよ。きつと」

そう言うのとネロは涙を拭いて前を見た。頑張れこの時代の俺。

「そうだ、約束しよう春樹！」

「何を？」

「春樹が言っていたサーヴァントは過去の英雄なのだろう。ならば英雄である余もお前を助けに行くぞ！ 未来で待っておれ！」

「……待ってるよ」

「よし、ではこの前藤丸に教えてもらったことをしよう」

すると、ネロは小指を出してきた。ああ指切りか。そう思い小指を出しネロの小指に絡める。

「指切り拳万嘘ついたら幽閉して一生飼いならず、指切った」

うん？ 疑問符を浮かべながら藤丸君を見る。すると藤丸君は思いつきり首を横に振った。

「俺の知ってるのと違うけど」

「もちろんだ、死なれたら困るからな。もし嘘ついたら殴って動けなくしてから幽閉してやるぞ」

「……」

あの召喚するときを使う石粉々に砕いておこう。俺は心に決めた。

ネロは俺から離れ、俺たち全員に言った。

「ありがとう。そなたちがいなければこのローマは滅んでいたかもしれない。だから、礼を言おう。そなたたちの働きに、全霊の感謝と薔薇を捧げる！」

「ありがとうございました！ また会いましょう！」

藤丸君が手を振ってお別れを言っている。俺は言葉が見つからずに無言で手を振る。そうしていると俺は氣を失った。

◇

帰還した二人を迎えたDr. ロマン、オルガマリー、ダ・ヴィンチと医療チームの人々はすぐに夏目春樹を医療室に運んだ。彼が気絶することはすでに想定されていたからだ。

あまりにもてきぱきした動きに藤丸はこれがプロの動きかと感心した。

「落ち着いたところで、ご苦労様でした。聖杯も無事に回収できたことは私たちにとって大きな進歩であると思います」

夏目が運ばれた後に残った三人の中で代表であるオルガマリーが話し始めた。

「所長、回収つてあれでよかったですか？」

「大丈夫です。回収のためにマシユのその盾に少し細工していますから。ちなみに改造したのはダ・ヴィンチよ」

「私の盾にそんなことしていたんですね」

驚いているマシユにダ・ヴィンチは近づくとすぐに聖杯を回収した。

「ひとまず、二個目の聖杯に喜びましょう」

「けれどレフの目的は結局分かりませんでしたね」

「気にしなくてもいいです。私たちもレフがそんな簡単に白状するとは思っていませんでしたので」

「分かりました」

頷く藤丸に満足したオルガマリーは今日はゆっくり休むように言った。そして二人が部屋に戻るのを確認して三人で会話を再開した。

「レフの言ったあの名前……本当だと思うロマン、ダ・ヴィンチ」

「……確証がないから何とも言えないけど、もし本当だとしたらかなり厄介な敵ですね」「そうだね。これは天才である私も予想していなかった。あんなビッグネームが世界を滅ぼそうなんて考えるとは」

全員が黙る。レフが名乗った名前。フラウロスとはある魔術師の使い魔である。もしその魔術師が本人だとしたらこれからの特異点も大変だと考えるべきだろう。

「そういうえば春樹は大丈夫なの？」

心配そうにするオルガマリーに対してダ・ヴィンチとロマンは安心させるように笑った。

「任せてくれたまえ。ここにいる医療チームはスペシャリストの集まりなのだから」

「しかし、なんで春樹だけ気絶するのかしら？」

その疑問に対してロマンが説明する。

「たぶんだけど、彼が特異点で実際に生きていたことが関係しているのかもしれない」「どういうこと？」

「所長も特異点で死んだ人が辻褃を合わせてこちらの世界で死んでしまうのは知っている

ますよね」

「もちろんよ」

このことは三人だけの秘密であった。藤丸と夏目に知られると彼らに想像を絶するプレッシャーを与えるかもしれないとロマン発案で内緒にされている。

「未来に生きている僕たちには関係がないのかもしれないけどその時代に起きた春樹には直接影響がでると思われれます。いわばAルートで生きていたのに急にBルートの記憶が混ざる感じですね」

「なるほど」

「それを整理するために眠るのだと考えられます」

ロマンの言葉にオルガマリーは頭をがしがしとかくとため息を吐いた。つまり彼は特異点を修復するたびに気絶するってことだ。どうしようもないことだが彼が不憫だとオルガマリーは思ってしまった。

彼について考えているオルガマリーはふと思いついたように尋ねた。

「春樹って結局ネロ帝とどうなったのかしら？」

その言葉に対してダ・ヴィンチが反応した。

「根拠はないけど春樹らしき人物が出る物語があるけど聞ukai？」

「どんな物語？」

「物語と言うより劇だな。教えてあげよう」

ダ・ヴィンチは演説するように話し始めた。

◇

この劇には歴史的価値は全くない。いつ書かれたのかも分からないものである。けれども一部の地方では今も人気のある劇だよ。

え？ どうして歴史的価値がないかだって。

それはネロ・クラウディウスを女性として書いているからだ。男性と考えられており、実際に像でも男性として造られているネロ・クラウディウスを女性として書いているのだから、誰かの適当な妄想だと考えられたとしても仕方ないだろう。

それでだ、この劇は三部構成なんだ。一部では彼女とその夫との出会い。二部はそこから結婚して幸せに過ごすところ。三部は夫に別れを言って元老院と戦うところだね。三部はとても興味深いから読んであげるよ。

ネロ・クラウディウスは苦悩した。自分がこのまま元老院と戦ったとしても負けると分かっているからだ。

ここで彼女は二択を迫られる。一つ目は皇帝としてローマを繋げるために最後まで戦うか。そして二つ目は家族と過ごすために戦わずに逃亡するかだ。

苦悩する彼女に夫は言った。☒あなたはあなたらしい道を選んでください。けれども

覚えておいてください、私はどんな道を選んだとしても着いていきます☒とね。

この夫の名前は何かだつて？ 不思議なことにくら調べても出てこないんだ。

続けるよ。そうして彼女は皇帝として戦うことを選ぶ。そして彼女は歴史の通りに追いつめられて自害してしまう。自害した彼女の死体を彼が丁寧に埋葬して墓の前で涙を流しながらお別れを言つてこの劇は終わる。

少し飛ばし気味に説明したけど、どうだった？ 確かに悲しい物語だね。

何だつて？ じゃあ、この夫が春樹だとして、もしネロ・クラウディウスが召喚されたらどうなるかだつて？

さあ、それは本人たちの問題だから知らないな。でも、今のカルデアではマズイことになりそうだね。

笑うダ・ヴィンチに対してロマニとオルガマリーは気の毒そうな顔をした。

第二十九話

俺は再びレイシフト後に気絶したらしい。ロマンの話では異常がないので心配しなくていいと言っていた。

異常がないのに気絶するって逆にヤバくない？

俺の疑問に答えてくれる人がいなかったので諦めて自室に戻った。部屋の中に入ると景色が変わっていた。

サーヴァントがフリーダムに遊んでいるのは変わらないが俺のベッドと仕事机が無くなっていった。

誰かが粉碎したかな。犯人はマルタ、ジャンヌ、この二人のどちらかだな。

俺が犯人を推測しているとクー・フリーリンに声をかけられた。

「お前さんが探している物は隣の部屋だけ」

クー・フリーリンが指さすほうを見てみると部屋の中に今まで無かった扉ができていた。中を確認したら前の一人用の部屋と同じ作りをしていた。クー・フリーリンに聞いてみたところ俺が寝ている間に作ってくれたそうだ。

手遅れかもしれないけど、出口を廊下の方にも付けてくれないかな。いちいち部屋を

經由しないといけないとか面倒じゃないか。

再び、クー・フリーンに尋ねたところ、盗難防止（俺が盗まれるらしい）のためらしい。

ふーん……、ネロ対策だね。まだ召喚するなんて決まってるのに。分かるからそんな目で見ないで。俺も召喚される気がするから。

クー・フリーンと話して俺の女難はまだ終わっていないような気がしたのでロマンおすすめのマギ☆マリに俺も相談することにした。

『こんにちわ、女難の人です。相談があるのでどうしたら避けられますか？』
パソコンの画面を見ると俺の行動に興味を示したアルトリアが覗きに来た。

「何をしているのですか？」

「人生相談？ これからこのカルデアで生き残れるかの」

「ほう、どのような返事が来るのでしょうか？」

「ロマンの話ではとても優しいらしいから、期待できるね」

待っていること数分返信が来た。画面を覗いてみると……。

『君のラッキーカラーは青色。だから青い色が好きな女の子と仲良くなればいいんじゃないかな？』

ん？

「素晴らしいですね、このマジ☆マリ?というものは。ぜひやってみましょう!」

「ちよ、ちよつと待つて。絶対におかしい。こいつ絶対におかしい。女難を避けたいのにまるで女難を加速させようとしてるって」

「そんなことはありません。さあ親睦を深めましょう。今夜は寝かせませんよ!」

「今夜つてまだ昼の12時だぞ!」

テンションがおかしくなっているアルトリアを宥めているいつもの放送が流れた。

『サーヴァント召喚を行います。マスターは集合してください』

よし、隠れよう。今回だけは見逃してもらおう。

方針を決めた俺が部屋から出ると、ジャンヌや他のサーヴァントが待ち受けていた。

「さあ行きましょう」

……そうか。盗難防止だけじゃなくて逃走防止の役目も担っているのか。これ考えた奴は絶対に許さん。

俺が心の中で憎しみを吐いている間に連行されいつもの召喚する場所に着いた。

終わった。なんかいろいろ終わった気がする。

「さて、みんなが集まったところで早速召喚していくよ! 今回は春樹からだね。ほら

この石をはやく投げたまえ」

ダ・ヴィンチさんに渡されたのは石9個、ちようど三回分だ。逃げるのも無理そうだ

し召喚しよう。

びくびくしているとダ・ヴィンチさんから有難い助言を頂いた。

「特異点での記憶はなくなるからネロ帝がああの時の記憶を持つていないことはない。だから安心したまえ」

そう言われて、安心したが少し寂しいとも思ってしまった。

そして覚悟を決めて石を9個、一気に使った。

召喚が始まった。大きく輝きサーヴァントが現れると思った時、事件は起きた。

「招き蕩う黄金劇場！」

声が出た瞬間、景色が変わり黄金の劇場が現れた。

みんながいない？ あれ、俺はピンチなのでは？ 辺りを見回していると目の前に奴

が出現した。

「会いたかったぞ、あなた」

そこにいたのはウエディングドレスを着たネロだった。懐かしい呼び名である。彼女と過ごしたときに彼女が照れながら言ってきたのを覚えている。

少し感慨深いな。このような状況でなければな！

何でいきなりこんな状況になっているの？

俺の反応が無かったことに少し訝し気になった後に何かしら納得したのか再び、言っ

た。

「そうだったな。結婚式に相応しい場にしなければならぬな」

彼女が手を振った瞬間、劇場は結婚式場へと変化した。

「うむうむ、これで完璧だな。では誓いのキスをするでしょう」

ネロが俺に近づいてきた。彼女の目を見てみると餌のお預けをずっと食らっていた獣のような目をしていた。

「この場所には邪魔が入らないからな、このままベッドインまで行くのもよいな！」

さすがローマ皇帝全てが早い！

このままではまずいと思い俺も訂正を入れる。

「ま、待つてくれ。いきなり結婚式は早すぎる。俺たちは初対面なんだから」

俺はそう言った後、後悔した。彼女の目から光が消えた。

「初対面？ ふふふふふ、何を言っているのだ。夫婦の契りを交わしたというのに。あなたは酷いなあ。もう二度と忘れないように記憶に深く刻みこんでやるぞ」

ゆらゆら、近づいてくるネロ。ミスった！ そうだよ。何故か分からないけどサーヴァントは俺であることを見抜けるのだった。早く覚えていることをアピールせねば！

弁明しようとしたら彼女は俺の目の前に来ており、いきなりキスされた。

「う、うんんんん!!」

いきなりすぎでしょう!

頭の中が混乱していると後ろのほうから声が聞こえた!

「友と娘(のようなもの)が結婚する。これこそまさにローマである!」

何を感じているんだロムルス。助けてくれよ!

いつの間にか出てきていたロムルスに助けを求めたいが未だにキスをされて動けない。

そう考えたとき、劇場のドアがバンツと開かれた。そこには彼女がいた。

「その結婚式待った!」

現れたのはアルテラであった。彼女は登場と同時にネロに切りかかった。ネロは咄嗟に反応して彼女愛用の剣で防いだ。

「何をする!!」

ネロが激怒する中アルテラはネロを無視して俺の手を握った。

「待たせたな。さあ行こう!」

彼女はすぐに俺をお姫様抱っこすると外へと駆け出した。

「なにになに、この状況? マジで何が起こっているの?」

あまりの急展開に混乱しているとアルテラと目があつた。

「あの約束ちゃんと守るよ」

あの約束って？ そう聞こうとした瞬間、アルテラにキスされた。走ってきていたネロがその光景を見てしまった。

後ろではロムルスがワインを瓶のまま飲んでいた。

あまりの状況の推移に俺はひたすら混乱するのだった。

第三十話

アルテラとネロの睨み合いが続く。キスが終わり顔を上げたアルテラは勝ち誇った顔をしてネロを鼻で笑った。それを見たネロは瞳の中の光を消して無言で剣を構えた。

「ちよつと、落ち着こう。これから共に戦う仲間なんだからさ」

仲裁に入る夏目を無視して二人は剣を構える。

「余はこやつと結婚していた。その余から奪うとは些か礼儀を知らぬようだな」

「私も結婚していた。それよりもいきなり結婚式を挙げるほうが礼儀を知らないと思うぞ」

夏目は心の中で☒こいつらが礼儀を語る日が来るとは世も末だな☒と考えていた。

「……そなたも結婚していたのは理解した。ではここはこやつに選んでもらおう。えーと、今の名前は何だ？」

「…夏目春樹です」

「そうか。では選んでくれ。もちろん余だと思いがな」

「何を言っている。私たちはどんな時でも一緒にいると約束した。勝つのは私だ」

二人に見つめられ黙る夏目。どちらを選んでも碌なことにならないと分かっていた。それにもう一つ理由があった。

「優柔不断だと思うけど二人とも選べないよ。俺は前世、君たちと一緒に生きたときに本気で君たちを愛した。だから結婚したんだ。だから今回、本気で愛している君たちのどちらかを選ばないなんて俺にはできない。ごめん」

頭を下げるのを少し気まぎれに思う二人。本気で愛してくれているのに選べなんておかしいではないか。そもそもすでに選ばれた後なのにどうして再び選ばれる必要があるのだろうかと考える。

「すまぬ、余が間違っていた」

「私もだ。今は非常事態なのに少し焦っていたのかもしれない」

「余もだ。少しアルテラと話がしたいいいか？」

「はいよ」

ネロはアルテラを呼ぶ。不思議に思いながらアルテラはずっとお姫様抱っこしていた夏目を降ろしてネロに近づいた。

ネロの言葉にアルテラが頷く。そして握手した。あれは何かしらの契約が成立したのかもしれない。そしてもう少し話すと夏目にネロが問いかけた。

「春樹よ、おぬしはどれほどの女性と結婚した？」

この質問は何だろうか？ それに浮気を一回もしたことがなく純愛を貫いてきたのに不倫をしたような気持ちだと夏目は思った。

「……数えてないです」

「告白された回数はいくつ？」

「……数えてないです」

「結婚してはいないが好きだったやつはいったか？」

「……いたと思います」

「今は好きな人がいるのか？」

「いいないです」

すぐに返答したことにはふむと頷くネロ。数回の会話で理解したのは、1つ目、夏目を好きな者がたくさんいること。2つ目、現代でまだ相手を決めていないこと。そして3つ目は前世で結婚していた相手をまだ、憎からず思っていること。

ネロはこの考えを1秒で完結させた。彼女は前世、夏目を獲得するために裏であれこれやっていたのだ。彼が自分を好きになるように積極的にイベントに誘ったり、邪魔な女がいれば人知れずご退場してもらったりと。ローマの皇帝、謀略の中で生きてきた彼女の力を見せるときが来た！

「なあ、夏目よ」

「はい」

「余はな、今もあなたが好きなのだ。ここにいるアルテラも」

「理解しています」

「そんなあなたがな別の女性と一緒にいるのは妻として見ていたくないのだ」

「……うん」

「しかしだ。余もアルテラもあなたの事情を理解している。たくさんの人生を頑張ってきたあなただ。好きな人がたくさんいることは当然だと思う」

「うん」

「あなたは一人を愛すると決めたら本気で愛してくれる。あなたはいつてくれたな☒ネ口が美しくなくても一生愛するよ。俺は外見じゃなくて中身も外見もすべて合わせて君が好きになった☒と」

「はい」

顔を赤らめて下を見る夏目。その姿にときめきを覚えた二人。

「今回は過去の英雄が集まるのだ。あなたと結婚していた者が呼ばれるかもしれない。余も含めてその者たちがな、昔のような関係でいられないのは辛いのだ。本気で愛した者が目の前にいるのに愛せないのは」

「うん」

「だから、余たちを前世のように愛してくれないか。もちろん、無理なことはせぬ。だが、一人だけ選ぶなんてことはしないでくれ。本気で余たちを愛してくれ！」

「……」

ネロの言葉を聞いて夏目は黙って考えた。夏目自身本気で何度も泣いた。ずっと一緒にいたいと思っていたのに突然の別れに。そんな彼女たちと再会したのだ。彼女たちがまた愛し合いたいと言っている。自分は受け入れるべきじゃないかと。

夏目はアルテラとネロを見た不安そうな顔でこちらを見ている。もし自分が断れば彼女たちに再び辛い思いをさせてしまう。それだけではない！

夏目は彼女たちと向かい合った。

「うん。俺は君たちと共にまた笑い合いたい。今は世界の危機だから結婚とか大層なこととはできないけど、昔みたいにみんなといたい。でも、俺は不器用だからさ。迷惑かけると思うけど、こちらこそよろしく！」

「余は嬉しい！」

「私もお前が好きだ！」

その言葉にペア、と顔を輝かせて二人は抱き着いた。夏目はそんな二人を抱きしめ返したのだった。

夏目はその時ネロの顔を見ていなかった。よってネロが何を考えているのか読めない

かった。ネロがこう考えていたと。

(計画通り)

とてもいい笑みをしていることに。

唯一、ネロの顔を見てしまったロムルスは震える手でワインを飲んで呟いた。

「これもローマだ」

第三十一話

夏目春樹がネロの宝具によってどこかへ行つてしまった。残されたカルデアのメンバーは彼を放置して藤丸立香の召喚をすることにした。

何故、放置することにしたかというところとロムルスが事情を説明していたからだ。彼は自己紹介と中で起こっていることを説明すると、ネロの宝具の中に戻ってしまった。さすがは神祖、ローマが関わる場所では万能である。

カルデアメンメンバーも慣れたもので「いつものことか」と考えるようになってしまった。哀れ夏目春樹。

夏目春樹を無視した藤丸の召喚によってステンノ、タマモキヤット、ブーデイカが呼び出された。

初めに召喚されたステンノは藤丸に約束を守ってくれたことに対してお礼を言った。それについて藤丸は夏目に土下座しようか考えた。しかし、夏目なら逃げ切るだろうと考えて謝罪はするが土下座は止めることにした。

2人目のタマモキヤットとは意思疎通が困難かと思われたが普通に会話ができたことに驚いた。そしてブーデイカはマシユと嬉しそうに話しており、無事にカルデアに今

回のメンバーが馴染めるだろうと思つた。

今回の召喚も問題なく終わるだろうと考えた藤丸。しかし、夏目が戻ってきたことによつてその気持ちは一気に消し飛んだ。

「みななもの、春樹の妻のネロだ！ よそしく頼むぞ」

「同じく、春樹の妻のアルテラだ。よろしく」

二人から腕を組まれて凄く疲れた顔をした夏目が出てきた。その後ろでロムルスは明後日の方向を見ていた。何があつたのだろうか？

「そのですね、二股の最低野郎に見えるかもしれないのですが、事情がありましたね。その、浮気はしてないんです。本当です。信じてください」

そんなこと言われても困る。それが全員の感想だつた。いろいろな言いたいことはあるがほぼ初対面なのだから自己紹介だけはしておこうと全員が挨拶する。

この時、ステンノを見た春樹がどんな表情をしていたかは想像に難くないだろう。

自己紹介も終わり、このまま解散かという流れで、この場にいる二人。ジャンヌとアルトリアが物申した。

「兄さん、結婚してたんですか!？」

「そんな話聞いていませんよ!？」

焦る二人を見てネロはすぐに二人の事情を理解した。

「その通りだ。余たちが生きていたときに結婚していた。前世で結ばれていたのだから、今世でも結ばれるのは普通であろう？」

「その、その通りですけど」

「では、問題ないな」

普通ではないが、ローマの皇帝としてのカリスマが発動したのか反論ができなくなってしまうアルトリア。彼女が黙ると今度はジャンヌが言った。

「前世のことは理解しました。しかし、それでも二人と結婚するのはおかしいです！」

「では、前世で愛した夫が他の女と仲良くしているのを黙ってみておけというのか？それはあまりにも酷いのではないか？」

「……そうかもしれません」

倫理的にはおかしいのは分かる。しかしだ、ネロが言っていることも理解できるジャンヌも黙ってしまった。

誰も何も言わなくなったので少し気まずい空気を残しながら解散することになった。

その場に残ったオルガマリ、ダ・ヴィンチ、ロマンは予想はしていたが、予想の遥か斜め上の女性問題が生じたことにただ驚いた。何か解決策を出そうかとも考えた。しかし、どうにかなるだろうと考えるのを止めた。他人の女性問題について考えるぐら

いなら別のことを考えたくなつたのだった。

◇

自室に戻つたジャンヌは考えた。自分も彼が好きだつたのだ。カルデアで前世ではできなかった彼との恋愛をしたいと考えていたのにこれはあんまりではないか。

泣きそうになるのを我慢していると、部屋の扉がノックされた。

「はい」

「私よ。ステンノ」

「?」すぐに開けます」

扉を開けると入つてきたのは今日召喚されたステンノであつた。ジャンヌはどんな用事があるのだろうかと思つてしているとステンノが楽しそうに微笑みながら尋ねてきた。

「あなた、あの男が好きなんでしょう?」

「え?! いや、その」

「恥ずかしがらなくてもいいわよ。誰かを好きになるなんて人として普通じゃない」

「そうですけど……」

「何を悩んでいるのか当ててあげるわ。彼に妻がいたことでしょう。そしてあなたは妻がいるなら彼と愛し合えないと考えた。あつてるかしら?」

「……はい」

下を向いて落ち込むジャンヌの頭をステンノは撫でた。

「いいことを教えてあげる」

「なんですか?」

「彼女たちが結婚していたのは前世なのよ。つまり、今世には全然関係無いのよ。冷静になつてみなさい。あなたは前世にイギリスと戦ったからつて今も戦う必要はないでしょう?」

「その通りです」

「なら、前世なんて気にせずあの男に告白しちやいなさい」

その言葉に顔を上げてステンノを見る。

「しかし、いくら前世が関係ないと言つてもすでにあの人たちは恋愛関係です。その方から相手を奪うのを主は許さないと思います」

「主つて神様のことよね?」

「そうです!」

「なら、安心しなさい。神様である私が許すわ」

「え?」

「よく考えなさい。あなたがサーヴァントとして召喚されて前世で好きだった人と出会

えるなんてこの世の全てを探しても見つからない奇跡よ。そんな奇跡のチャンスに巡り合えたのに逃がすの?」

「私は……」

「このチャンスを逃した貴女の後悔はどれほどでしょうね? 彼と出かけて帰ってきたら泣く第二の人生を歩むつもり?」

「私は行きます!」

「それでいいのよ。さあ行つてきなさい、幸せが待つてるわよ」

「はい!」

笑顔で飛び出すジャンヌを見てステンノは本日最高の笑みで呟いた。

「ああ、課題を出すのもいいけどこうして彼が苦しむように仕向けるのも楽しいわ」

こうして女神さまの悪だくみは成功したのだった。ちなみに突撃したジャンヌをオルタが見て、唾然とするのは今から数分後の話である。

◇

自室に戻ったアルトリアはやけ酒をしていた。何だというのだあの女は。似たような顔して無駄に脂肪を蓄えるなんて。許せん。

しかし、泣けてくる話である。好きな人と奇跡的に巡り合えたのだ。なら、このままゴールインしてもいいではないか。

そう考えるも妻がいるならどうしようもできないとさらに鬱になるアルトリア。

恋人がいる者から相手を奪うなんて最低な奴の行いだ。自分にランスロットみたいなことをしろというのか。そんなもの人理が焼却されても絶対にやらん！

ため息を吐いて酒を一気に煽る。自分はちゃんと結婚はしたのだ。愛のある関係ではなかったが大事な女性と。

待て、そもその話、おかしいではないか？ 自分は男と結婚するのが普通だろう。ではなぜ女性と結婚したのだ。それは自分が男として王位に就いたからだ。

アルトリアは机に両手を叩きつけた。

「マーリン！　せめて私を男にしろよ！　女性同士の結婚って絶対に失敗するに決まっているじゃないですか！　見つけた瞬間に切り刻んでやる！」

ああ、私が男だったらこんなことに苦しまなくてもいいのか？　そう悩んでいるアルトリアに雷が走る。

そうだ、私は考え違いをしていた。私は男だ（錯乱）。そして春樹は女性だ（錯乱）。ならば結婚しても問題ないな。男性として結婚していたとしても、女性としての結婚はまだのほずだ。

いける！

アルトリアはまず、エミヤの元へ行つた。

「シロウ、ドレスを作ってください！ 春樹に似合うやつを！」
「は？」

呆然とするエミヤにアルトリアはさらに詰める。

「春樹に似合うドレスです。はやく！」

「あ、ああ分かった」

エミヤが作ったのはピンクのフリフリのドレスだった。

「ありがとうございます」

そう言うとアルトリアは走って行った。

「……なんでさ？」

彼の疑問に答えるものは誰もいない。

◇

この後、アルトリアとジャンヌが突撃したことによって女性によるプライドをかけた戦いが行われ、春樹の部屋が粉碎された。

その光景に涙を流す春樹を嬉しそうにステンノが見ていた。それを、見た藤丸は土下座をして謝罪したらしい。

この事件後、カルデアのトップによって、本人同士の同意があれば例え複数でも男女の関係になってもいいとのお達しが出たのだった。

この知らせによつて、夏目が胃薬を頻繁に使うようになった。そして、清姫が焦りを覚えて短期決戦を仕掛けるようになるのだった。

第三十二話

俺は今、取調室にいる。目の前にいるのはアルトリア被告。罪状は俺を女装させたこと。ちなみにネロも大きくこの事件に関わっている。ジャンヌは巻き込まれた。そして俺の部屋は半壊した。

「アルトリア、どうしてこんなことしたのか言つてごらん。怒らないから」

事件後、速やかに移動したので俺はピンクのフリフリのドレスを着たままである。誰がこれを作つたのだろうか。

「……はい。あなたがネロ帝やアルテラとイチャイチャしているのを見て私はやけ酒に走りました。私は、先ほども言いましたがあなたが好きです。王である私をただの一人の女性として見てくれたあなたが。王の仕事に追われる中、あなたとの語り合いが私にとって最も大切な時間でした。アーサー王ではない、アルトリアにとつて。そんな私にとつて、急に現れた女性にあなたを取られたショックはとても大きかったです」

頷きながら俺は心の中で大きく狼狽えた。彼女が俺のことを好きとは考えてなかったからだ。前世でアルトリアから色恋沙汰の話題が全く出なかったからだ。王になつて、そのまま同性と結婚していたし。

「酒を飲んでいるうちにだんだん分からなくなってきたのです。私が男として生きていく一方でああなたの前だけでは女性でいれました。あなたを愛していたのは私の私なのか、女としての私なのか」

「女としてだろ」

男として好きになったら俺が困る。

「そうです。今ならはつきり言えます。しかし、酔った私は男である私は女性であるあなたを好きになったのだと」

………俺は今女装しているが、前世では女性らしい振る舞いをした記憶が一個もないよ。

「俺は女じゃないよ」

「でも、あなたはそこらへんの女性よりも女性らしいです！」

「ええ……」

「家事万能で、シロウにもひけを取りません。そしてこの人理崩壊中、あなたは姫のごとく攫われては救出されています。これを聞いてあなたは自分が男であると言えますか

!!」

「言えるよ！」

「……」

「……」

黙るなよ。

「しかし、私は相手から妻を取るなんて最低な行為はしたくありませんでした」

「妻じゃないよ、夫だよ。それとお前が本気でそう思っているのは理解している」

彼女にとってはトラウマだからだ。

「そう考えた私は、こう考えました。男であるあなたが女性と結婚したのなら、女であるあなたと男として結婚すれば奪ったことにはならないと」

「……俺はなかなかハードな二重生活を送る必要があるそうだな」

「申し訳ありません。私が馬鹿なことをしたのは理解しています。それでもあなたが好きであるこの気持ちを伝えておきたかったのです」

俺はどうすればいいのだろうか。告白されたからと言って何も考えずに受け入れるのは違うだろう。しかしだ、前世に結婚していたとはいえネロ達に対して受け入れたのに前世から好意的に見えてくれたアルトリアの拒絶するのも違う気がする。

悩んでいると俺の部屋を破壊して、途中からアルトリアと協力して俺を女装させた、男装したネロが入ってきた。何がしたいの君は？

「話は聞いた、余は別に良いぞ。春樹の妻や夫が何人増えようとな。恋こそローマの本質なのだからな！」

またいらぬのが来た。そして夫はいらん。それよりもネロが許可を出しているのだつたらアルテラも出したということだろう。……あんなに俺を独占していた彼女が認めているのだ、ネロとの取引で何が行われたのだろうか？

「そうは言ってもな……」

「あなたに対して余は前世の話を出した。それには結婚できなかつた者も含まれているのだ。聖女も含めてな」

ジャンヌのことか。彼女は女装させられている所に告白しに来たのだ。そこで、告白したい相手が女装している状況なんて認めませんと叫んで2対1の戦闘を開始したのだ。結局、負けたが思いは伝わった。

「分かっているけど」

「あなたは、複数の方と付き合うことを不誠実であると考えている。しかしだ、誠実に複数人と付き合うことがあなたならできるとみんな信じている」

「ネロ……」

「だから、迷う必要はないぞ」

意を決して俺が発言しようとしたところでマリーが入ってきた。とても疲れた顔をして。

「協議の結果、複数のサーヴァントと付き合ってもいいことになったわ。そもそもの話、

倫理観が別なのだし、変に止めても何するか分からないし。自由に。双方の合意があれば好きにやってちょうだい」

マリーはそれだけ言うところ、ここまで考えるのが辛い仕事は久しぶりだわと呟いて戻っていった。

覚悟を決めよう！　まるで世界がそうしろというように後押しされてるようだし。

「アルトリア！」

「はい」

「前世では俺は君のことを大事な妹のような存在と考えていた」

「……分かっていきます」

「それでもだ、前世は関係あるが今の時代には深く関わらない。だからだ、現代でこれから、前世以上に仲良くなるう！」

少し驚いた顔を見るとアルトリアはほほ笑んだ。

「はい」

こうして俺たちは照れたように握手したのだった。

◇

エミヤは食堂でのんびり紅茶を飲んでた。アルトリアが急にドレスを作つてと言ってきたときには焦ったが、あれから、春樹の部屋が半壊する以外は問題が起こって

いないので大丈夫だろう。例え、食堂の入り口でドレスを着た春樹が青い顔でジャンヌに抱きしめられていても、その後、アルトリアにも抱きしめられて苦しんでいても。その後ろでステンノが最高の笑みを浮かべていても。

春樹が着ているドレスを見て、エミヤは笑った。あれはエミヤが彼のために作った服だ。高校生の時に文化祭の劇で彼がお姫様に決まったときに全員で笑いながら作ったドレスである。完璧なお姫様を演じた彼には笑い以外は出なかったが。やはり、あの服は彼に似合う。

過去を思い出しながらエミヤは席を立った、あの死にかけの友達を救うか。それとも、清姫に追いかけてられている自分のマスターのどちらを助けるか考えながら歩き始めたのだった。

悪は人理に太陽を登らせる

第三十三話

あの女性限定の狂乱事件から数週間、いろいろなことがあったが今はのんびりとした時間を過ごしていた。普段は藤丸君の物語を書いたり、今の俺の仕事をしたり、サーヴァントたちと共に訓練をするなど暇を持て余すことがなかった。他にも俺にちよっかいをかけてくるサーヴァントに対してガンドで対抗するなど、マスター力を上げているところだ。

しかし、最近では俺のガンドを避けるサーヴァントが増えてきたのでスリルが日に日に増してきている。ダ・ヴィンチさんに頼んだらガトリングガンかショットガンを作ってくれないだろうか。

そういうえば俺の部屋も修理と共に強化されて出口が増えた。しかし、逃げ出すときにはどちらにも見張りが立つことがあり、結局逃げられない。まだまだ問題が残っており、改善の余地がある。これからさらなる開発が俺の平穩を作る鍵になるだろう。

こうした毎日をご過ごしていた俺だが、今日はのんびりできないらしい。朝一だというのに管制室に呼ばれてしまった。

嫌な予感しかしない。……いつものことか。

諦めの境地に達している俺は、ぼーとしながら管制室に行った。そこに着くとすでに藤丸君とマシユちゃん、リーダー格の三人が揃っていた。

「さて、そろつたわね。分かっていると思うけど特異点が見つかったわ。時代は1573年の大海原よ。ただし、特異点を中心に地形が変化しているから具体的な地域ではないわ」

へー、聖杯つてやつぱすごいな。俺も聖杯で安住の地とか作れないかな？

「ちなみにあなたたちの中に船酔いする人はいる？」

「俺は大丈夫です」

「私も平気です」

「とても心配です。船と海の組み合わせが。もつと言えばそこに女性が加わると最高にやばくなる可能性が高いです。だから行きたくないです。本当に勘弁してください。船の思い出でいいやつないです」

マリーが気まずそうな顔でこちらを見て、すぐにロマンを見た。

「安心してくれ。酔い止めはすでに作ってある」

「違うよ！ 確かに盛大に吐いたけど、俺の心配は生命の方だよ！」

「安心してくれ。僕たちは医療のスペシャリストだ」

「せめて、もっと安心できる言葉をくれえ」

医療の発展、そして今度の海で女性に絡まれないことを祈ろう。

「では、話も付いたようだし今から1時間後、早速第3特異点に向かつてもらいます。なので準備をお願いします」

マリリーに言われて俺たちはそれぞれ準備に取り掛かった。

◇

「特異点が発見された。今度は海の上らしい。それを考慮したうえでメンバーを選出したい。誰か行きたい人！」

食堂に集まってもらい、サーヴァントの自主性に期待して挙手をお願いした。そして手を上げたのはネロ、アルテラ、ロムルスであった。ロムルスよ、そのポーズは挙手ではない気がする。

「本当にいいのこのメンバーで？ 後悔するよ？」

ネロと海は嫌だ。ネロと船は嫌だ。

「お前には悪いがすでに話してあつたんだ。新メンバーに特異点を任せるつてな。問題が発生すればすぐに交代もできるしな」

サーヴァントの自主性が高くてマスターはとても嬉しいです。泣きそうなほど。

「任せるがよい！ 船と言えば余だ。また、あの操舵を見せてやるぞー！」

はい終わった。

「緊張するが、私も頑張る」

アルテラは癒しになってきた。

「私も全力を尽くそう」

お願いします。なんとかネロを止めてください。

こうして不安がかなり残るメンバーが決まったのだった。そういえば祈る相手がなくでもないことを思い出したのだった。

◇

管制室に戻ると藤丸君が、タマモキヤット、ブーディカ、ステンノを連れてやってきた。……ステンノとネロか。嫌な予感が高まってきたぜ！

ブーディカさんとは料理など家事の話すことが多く、仲良くさせてもらっている。初めはネロと結婚をしていたことに対してかなり嫌われていたが、それも少しマシになった様だ。ネロとは表面上は話しているように見えるが内面のことまでは分からない。

タマモキヤットも実は警戒されている。俺が安倍晴明と共に玉藻の前と関わったのが原因かもしれない。

ステンノは……諦めた。あやつ、恋愛相談とかして女性を唆して恐ろしいことを喋ってくる厄介な女神である。藤丸君、お願いだから彼女を止めてくれ！

見事に女性サーヴァントが多いことに顔を引きつらせながら、俺たちは並んでマリィを見た。

「これより第三の聖杯を求めてレイシフトします。頑張ってくださいー！」

「はいー！」

返事をして俺たちは特異点に向かったのだった。

◇

「さて、大まかな準備は出来たな」

満足そうに船上で頷くのは金髪の青年、イアソン。かの有名なアルゴナウタイの船長である。

「ええ、アタランテさんもヘクトールさんもすでに行動に移しています。後はあの方たちが来るのを待つだけです」

答えたのは幼さが残る魔女メディアであった。

「本当ならこんな小悪党みたいなことはしたくないが、あいつがいるなら話は別だ」

すでに彼らには人理を修復する者の噂が入ってきていた。一人は平凡な青年。これから英雄に成るであろう卵。そしてもう一人は……。

「人類の未来なんてどうでもいい。けれどもあいつのためなら、あの小説好きの奴のためなら俺は、命を懸けられる！ あいつらが先に進めるなら悪党としてあいつらに倒さ

れてやる」

「はい、イアソン様が望むなら。私も恩人であるあの方のために命を懸けましょう」

恩人のために文字通り命を懸けた行動をしようとする二人は決意を秘めた瞳で空を見上げる二人。彼らによつてこの海はどう変わるのだろうか。

第三十四話

レイシフトが無事に終了し、目を開けると陸ではなく海の上、それも船の上で海賊に囲まれていた。何を言っているのだと思うかもしれないが真実です。

「てめえら何者だ!!」

混乱している船長らしき人物が尋ねてきた。

「同業者です」

俺からとつきに出たセリフ。昔の癖が抜けていないようだ。こう見えても海賊モドキをしていた期間があつた。

「嘘つけ! そんなカラフルな海賊見たこともないわ!」

「裸みたいな恰好で略奪する海賊がいるんだから、カラフルでもいいじゃないか!」

「裸の海賊と派手な海賊を一緒にするんじゃないやねえ。カラフルだつたらすぐに捕まるだろ! それにカラフルなのは海賊じゃなくて演劇団の方が向いているだろ!」

「……でも、略奪もするし、襲い掛かるし、容赦しないメンバーだよ」

後ろで一部のサーヴァントたちが頷く。おそらく、いや、絶対に海賊よりも質が悪い奴が多い。

「うるせえ、やっちまえー！」

ここで一次カルデア海戦が行われた。結果は一方的だったの言うまでもない。戦いが終わり、一段落ち着いたところでマシユちゃんも藤丸君がロマンに文句を言っている中で俺は懐かしい気持ちになっていた。

海賊をやっていた時はよくこんな目に会っていたな。はは、懐かしいぜ。あの頃に戻りたくないよお。

「今から、この船の船長は余だ。皆の者ついてまいれ！」

船長を初めに倒したネロが元氣よく叫んだ。せめて目的地を教えてください。

「船と海はいい文明。春樹と海水浴もいいな」

海を眺めながら呟くアルテラ。君、すごく乙女してるね。足元にのびている海賊さえいなければ。

みんながハチャメチャに船内で遊んでいる中、藤丸君が聞き出した情報によると近くに海賊島なる場所があるらしくそこに行けば何かしらの情報が得られるかもしれないとのこと。なので、全員で海賊を脅してその島に向かうことになった。

◇ やっぱり海賊じゃないかな、俺たちは？

ネロが運転すると言って聞かなかつたが、俺が船の上でネロと踊るのならば諦めると

いう謎の発言により、俺は着くまでの時間ネロと踊り続ける羽目になった。ちなみにアルテラとも踊りました。

「腰が、足が、腕が、体の全てが痛い。決めた、俺は決めたよ藤丸君。絶対にこれからは運動する。それが無理でも筋トレはする！」

「……頑張ってください」

死にかけの俺の発言に頬を引くつかせる藤丸君。君にも同じ体験をさせたいよ。

砂浜で休憩していると、まるで狙ったかのように新しい海賊が現れた。

「獲物だ！ 野郎どもやっちまえ！」

「皆の者、獲物だ！」

ネロと海賊が同時に発言して再び戦闘が始まった。すげえ、あいつこの短時間で海賊になったな。

ん？ よく見るとあの吹き飛ばされた奴、フランシスの部下じゃね？ え、じゃあ、フランシスいるの？ やだー。女性と海の組み合わせは駄目だって言ったじゃないか！

「くそ、姉御ならこいつらを倒すことができるのに！」

あつという間にポロポロにされた海賊Aはそんなことを言い始めた。

馬鹿止める！ 興味を持つ奴がいたら困るだろ！

「姉御とは誰ですか？」

「姉御はフランシス・ドレイク様だ！」

やっぱりあいつだあ！ 問題事を持ってきて丸投げするあいつだあ！ エリザベス女王と話をする時に俺に交渉役を任せてきたあいつだあ！

めんどくさくて逃げ出して結局捕まって、二人で行くことになったけど。

「先輩、聞きましたか！ あのフランシス・ドレイクですよ。世界を一周して、スペインの無敵艦隊を壊滅させた英雄です。彼ならば何か知っているかもしれません、会いに行きましょう」

マシユちゃんの提案により、フランシスに会いに行くことになった。しかし……

「けれども、海賊であることに注意してください」

「そうだね、海賊には苦しめ……られてないけど気を付けよう」

すでに海賊に対して不信任を抱くようになった二人。まさしく前途多難である。

◇

「姉御、助けて下さい。こいつらヤバいです！」

フランシスの部下に誘導されて出会ったのはやはり赤髪に赤い服を着た女性フランシス・ドレイクだった。絶賛酔っ払い中らしく結構楽しそう。

彼女を見た全員が驚いている。そりゃあそうだろう。あの大悪党が女性なんて誰が信じるだろうか。でも、俺なら速攻で信じるかもしれない。女性は俺にとって悪が多

い。

フランススは俺たちをジロジロ見ながら部下に尋ねた。

「ヤバいつて、こいつらは客人かい？ それとも敵かい？」

「不明ですが、たぶん敵です。出会った瞬間、襲い掛かってきました！」

「お互い様じゃないでしょうか」

マシユちゃんが言っていることは正しい。しかし、敵らしい行動しかしてない。

「しかし、俺らをだれ一人殺してないので、完全に敵というわけではなさそうです」

「……そうかい。分かった。アタシが話をつけよう。あんたらの船長は誰だい！」

さて、本物のリーダーであるマリーは現地にはいない。本部の方で仕事に追われている。そして現地にはいない者をリーダーと言ってもフランススは納得しないだろう。ならば彼しかない。

「藤丸君」

「え、俺ですか？」

「ああ、君が俺たちの船長だ。それはみんなが認めている」

狼狽えている藤丸君にマシユちゃんが力強く頷いた。

そうこの物語の主人公は彼なのだ。ならばリーダーは彼でいいだろう。例え目の前でリーダーは余だよと言った瞬間にロムルスに回収されたネロがいたとしても、彼

が船長だ。

「分かりました、やってみます。俺が船長です!」

「ほう、イイ面の男が出てきたじやないか。いいだろう話してみな」

藤丸君の注文は☒この世界がおかしいので修復したい。でも足がないので船貸して。☒
まとめるとこんなかんじ。対してフランスは☒分かった、ただし勝つたらな!☒とい
うかんじ。

そこでマシユVSフランスの戦闘が行われたが見事にマシユちゃんが勝利した。
遠くから見てて思ったが、フランスも生身のくせに人間離れした動きするよな。この
世界の人間はどうなってるやがる。

しかし、提案は置いておいてせっかく仲間になったということで親睦を深めるために
フランスたちと宴会を開くことになった。

各々好きな場所で酒を飲んでおり、俺は藤丸君とフランスの三人で酒を飲みながら
軽く雑談をした。

「あんたは話してて分かるが頭の回転が速いね。部下に欲しいよ」

「絶対に嫌です」

「あはははは、バサッと断ったなあ。これは仕方ない諦めるとするかあ」

楽しそうに笑うフランス。そう言いながら諦めずに俺を無理矢理船員にしたこと

は今でも忘れていない。銃やら操舵を教えてやったのに恩知らずめ。

心の中で愚痴をこぼしていると急に真面目な顔になったフランシスが切り出した。

「先ほどの話に戻るが、この海はおかしい。アタシが調査したところアタシの知っている場所のどこにも該当しない。なによりも大陸が存在しない。しかも海流も風もおかしいときたもんだ」

海賊の天敵のような海だな。

「かなり厳しそうですね」

「ああ。それでも明日には旅立つつもりだよ。あんたたちタイミングがいいねえ。最高の船旅が待ってるよ！」

ケラケラ笑いながら酒を飲むフランシス。それにつられて酒を飲む藤丸君は勢いに釣られて乾杯した。その時フランシスが持っているグラスは聖杯に似ていた。

第三十五話

カルデアのサーヴァントたちがあちらこちらで自由に酒と料理を楽しんでいる中、俺と藤丸君、マシユは驚きで言葉が出なかつた。

何故ならドレイクが所持している盃が本物の聖杯であつたからだ。

それに気付いたマシユは興奮しながら藤丸君に伝えたが、すでに酔いが回っているらしくふらふらで、全く話を聞いていない。

未成年の飲酒はやっぱ駄目だよな。法律を定めている日本は滅んでるけど。

しかし、これは嬉しい。聖杯発見したのだからこの旅はもう終わりか。かーつ、残念だなあ。俺の船旅がこうして終わるなんて残念だなあ。

旅の終わりに喜ぶながら酒を飲んでいるとフランススが、聖杯を手に入れた経緯を話し始めた。

まとめると、大渦の中から現れた沈没都市、アトランティス。そこにいたポセイドンから聖杯を手に入れたらしい。ついでに都市も沈めてきたとか。

お前凄いな。下手な古代の英雄よりヤバい偉業を成し遂げているぞ。

俺が感心しているとフランシスは、☒だが…☒と付け加えた。

「気になることが一つある。私たちがあの偽神と戦っていた時に、援護してきた船だ」

「ああ、ありましたね。確かにあの船がなければ俺たちもやられていたかもしれない
し」

「あの船つてことは違う海賊でもいたんですか？」

「んー、あれは海賊とは違うさね。でもヤバい連中ではあると思う」

「この海、おかしくない。気候がおかしいとかじゃなくて。存在している生物がおかしい。

「どのような方がいたんですか？」

「遠くからだっただんで正確じゃないけど、まずは金髪の男、そして緑髪の女、後は色黒の大男。それぐらいしか分からなかったけど、凄かったよ」

「あれはスゲエゼ。弓を空から大量に降らせたり。まさに人間技じゃねえよ」

楽しそうに盛り上がる部下を前にフランシスがほつりと呟く。

「あいつらに助けてもらったのは確かだが、謎が多い。まるであたしたちにこの盃を持たせるために動いていたのではないかという動きでもあったね」

☒まあ、どうでもいいさね☒と言い再び酒を飲むフランシス。

フランシスの言っている奴らが気になる。とても気になる。俺に不幸を届けてきそ

うな気しかしい。

気にはなるがどうしようもないので諦めることにした。

酔いが回ってフラフラになった藤丸君をマッシュちゃんとブーデイカが運んで行った。その結果、俺はフランスと差いで飲むことになった。

お互いがいい感じに酔っている状態であった。

「で、あんたは何者だい？」

「……元海賊」

「へえ、じゃあ今は？」

「世界を救う小説家」

「あつはつはつは、それは面白いね。そんな真逆な方向に進んだ人間なんて見たことな
こよ」

普通はそうだろうな。でもな、俺は見たことあるよ。極悪の海賊から騎士になった英雄を。

「お前さんもいつかそうなるよ」

「へえ、あたしがかかい？」

「ああ、お前だよ。きつと凄い人物になれる。歴史に名前を残すような」

「……ふーん。あたしはお前と似たようなことを言う人を一人知っているよ」

「それは誰だ？」

「あたしの……先生さ。いろいろ教えてもらったよ、操舵やら航海術やら。あたしが尊敬している数少ない人間だよ」

「そいつは凄いな。あんたが尊敬するなんて大物だ」

「その逆さ。小心者で、絶対に海賊になんてなるかって頑固だね」

「普通は海賊になりたいなんて言わないと思います」

「面倒だからコイントスで決めようって話になったんだ」

そっから先は知っているわ。

「先生は昔から不運だね、コインなら勝てると見越していたんだが……」

「見越していたんだが？」

「本当に弱くてね、10連勝しちゃったんだよ！」

本当に可笑しそうに笑うフランシス。

うるせえよ。俺の運が悪いんじゃないかってお前の運がいいだけだよ。……そうだよ。うんそうだよ。泣きながらも一回、もう一回って頼み込んで惨敗したのは俺が不運だからじゃない。

自分に言い聞かせるように呟いた。

「そうだ、あんたこの海域での旅が終わったら一緒に世界一周しないかい？」

「嫌だよ。俺は世界より自宅のほうが好きなんだ」

俺の発言を聞いたフランシスがニヤツと笑った。

「意見が割れたならコイントスで決めようじゃないか」

「俺が勝つたら？」

「あたしの船をやるよ」

「大事なものをそう簡単に賭けるなど誰かに言われなかったか」

「言われたよ。あたしは、どうしても欲しいものがある時は、それと同等の物を賭けると

返してやったよ」

やれやれ、どこぞの馬鹿娘と賭けをした日を思い出す。どうせこの勝負を最後まで覚

えているものは、俺だけなんだ。

「交渉成立だ。ほらトスしな」

「はいよ」

フランシスが空にコインを上げて、ゆっくりと落ちてきたコインを受け止めた。

「表」

コインの結果がどうなったかは、お楽しみだ。

◇◇◇

藤丸君の酔いが醒めてから、改めて聖杯の話を行った。フランシスが所持しているの

ものは、人理を乱しているものではないので、結局のところ、レフがばら撒いた聖杯を回収しなければならぬようだ。

こうして俺たちはフランシスと協力して航海に出ることになった。

◇◇◇

航海に出たはいいが、面倒なことに海賊の幽霊のような者に襲われた。しかしサーヴァントの相手にはならず、簡単に撃退して進んでいると島を見つけた。

上陸して島を探索すると石板が落ちていた。内容は血斧王が目覚めたとのこと。その人きちんとは知らないなあ。

「どのような人物だったのでしょうか？」

マシユがロマンに尋ねると、なぜかダ・ヴィンチさんが答えた。

『確か9世紀のノルウェーの王様だったはずだよ。とても怖い妻がいたという話だ。何でも夫の敵を呪い殺したりとか、違う女性と話していると拗ねて呪いをかけたりとかね』

……かわいそうに。でも他人事と思えないのは何故だろう？

「その気持ち分かるぞ。夫には自分だけを見ていて欲しいものだからな」

「うん。その妻は間違っていないぞ」

ああ、自分事だからか。

遠い目をしてしていると、フランシスが楽しそうに藤丸君と世界一周の話をしていた。

「どうだい、この海域を出たら一緒に世界一周をしようじゃないか!」

「世界一周ですか? うーん検討しておきます」

「つれないねえ。もちろん、マシユが来るならアンタも来るんだよ藤丸」

「ええ!!」

「当たり前だろ。あんたはマシユのマスターなんだから」

「えーと、け、検討しておきます」

「それだけ聞いたら十分さね」

あつはつはつはと笑うフランシス。藤丸君たちも大変だな。

「あんたは絶対に来るんだよ、夏目!」

「H A, H A I c a n n o t s p e a k E n g l i s h」

「やかましい!」

足元に銃弾を撃ち込まれた。これだから海賊は粗暴で嫌なんだ。

藤丸君や他のサーヴァントたちが興味を持ったように尋ねてきた。

「何かあつたんですか?」

「浮気か?」

「浮気?」

君たち怖い。

「コイントスで負けた。1-1連敗」

やれやれと肩を竦めてため息を吐く。

連勝を重ねて嬉しそうにはしゃぐフランスの顔が憎たらしかった。

藤丸君が引きつった顔で何を言えばいいか迷っていると、前から石板で記してあったサーヴァント・エイリークが現れた。

今回は藤丸君チームが戦うことになっており俺たちは観戦となった。6人で一人と戦うって味方同士で攻撃が当たる場合もあつて危ないしね。

あ、タマモキヤットの右ストレートが決まつて、エイリークが消滅した。

戦闘終了後、島を歩き回っていると続いているとエイリーク一行が乗ってきたであろう船を発見。船の中を探索して地図を見つけた。地図には別の島が書いてあつた。

エイリークたちもかわいそうに。たまたま来た島に、こんな奴らがいるなんて想像しなかつただろうな。

とにもかくにも、俺たちの次の目的地がその島に決まつたのだつた。

第三十六話

エイリークが乗ってきた船から強奪した地図を元に移動をしているところ、海賊の幽霊（実態）に襲われることとなつたわけだが、面倒この上ない。

しかも、この幽霊たちが掲げている地図にとでも見覚えがある。

あいつもこの特異点にきちやつたか。ある意味では尊敬する人に出会うという聖杯戦争の念願が叶うんだろうけど、かわいそうに。

理想の海賊が男性と思つていたら女性だったなんて知つたら悲しむぞ。……俺が何回説明しても信じてくれなかつたから、いい機会かもしれない。

みんなに海賊旗の人が誰か説明しようと思つたが、もし間違つていたら恥ずかしいので黙つておこう。それにロマンが調べてくれていたみたいだし。ロマペディアの方が優秀でしょう。

無事に次の島に到着。この特異点修復の旅ではどこことなくローマと同じ空気を感じる島であつた。ネロとロムルスが少しはしゃいでいる。

「ああ、地面が大好き。海賊なんてなるもんじゃないよ。海賊王になつても苦勞するだけだつて」

「海賊王ってなんだい？」

俺の独り言に反応するドレーク。

「ありったけの夢をかき集めて、探し物を探しに行く人」

「なら、私は海賊王さね！」

「子供の夢じゃなく、大人が持つどす黒い夢を集めたお前には言って欲しくない」

「どちらも夢さ」

「さようぞ」

平成の日本に帰ったらドレークは海賊王だったって書こう。

雑談をしながらエネミーを撃退し、召喚用のターミナルポインタを設置し、その中で、ダ・ヴィンチさんよりドレークに香辛料を見せてみたらと話があったので、見せることにする。

「ドレーク、こっち見て」

「何だい？」

興味津々にこちらを見るドレークに俺が長年の人生をかけて培った手品を見せてあげる。

香辛料の入った瓶を破壊したふりをするものを見せたのだが、どうやら彼女の逆鱗に触れたらしく、ジャーマンスーププレックスを食らう羽目となった。

ダ・ヴィンチさん許さん。……さんで韻が踏めてるやん、すてきやん。

一人で自画自賛していると、地震が発生し嫌な予感がしたため船に帰還することに。

しかし、謎のパワーにより出航ができない状態となった。

「なあ、誰かの力で動かすことできない？」

俺の問いかけにそれぞれ首を横に振る。

「藤丸君のサーヴァントで誰か活躍できそうな人いる？」

「いや、無理みたいです。でもステイノが気になることを言っています」

「何？」

「もう一人の私がいるとか」

「はい、この島から離れよう。この島には疫病神がいます。しかも、かなり質の悪いやつです。普通の疫病神が1週間下痢状態にしてくるなら、この島にいる疫病神は1ヶ月間ノロウイルスに感染させてくるタイプのやつです」

俺が大声で脱出宣言をしていると、後ろから頭を鷲掴みにされる。

「……あのー、ですね。悪気があったわけではないです。はい」

「うふふふ、とても面白いことを言っていたわね。私が疫病神と」

「いえ、あなたでなく、もう一人というか、なんというか」

「私、言いたいことをはっきり言える人間が好きなの」

「……………下痢は2週間でも辛いです」

「死刑」

ステンノからキャメルクラッチを食らって悶絶している横で、話が決まったらしく、動けない原因を探るために島を探索することのこと。

首に大ダメージを受けながら、移動していると、見るからに怪しい洞窟が出現。

昔見たような記憶がうつすらとあるが、何の洞窟（中は何かの建物のようになってい
る）か覚えていない。

全員で入ると危険であるため、探索班と入り口防衛班と別れることに。

「俺は防衛班になろう。入り口は任せてくれ。ちなみに中に神様らしきものがいたら
サーチ&デストロイをお願いします」

「先にあなたをデストロイしましょう」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

ステンノに十字固めを食らわせられて悶絶している間に探索班は出発。暇な時間と
なる。

「みんなごめん。一緒に行きたかっただろうに」

「別に気にせぬ。夫と共に生きるのが良い妻というものだ！」

あら、かつこいいわこの皇帝。

「私もだ。こうやって一緒にいられるだけで、私は幸せだ」

あら、かわいいわこの族長

「マスターが決めたなら従う。これもローマである」

好きです。あなたが私の友だ。

こうして昔話やら何やらに話を膨らませていると探索組が戻ってきた。俺の後ろで Jones の BGM が流れ出した。

出てきたのは、ギリシヤの怪物ミノタウロスとステンノの姉妹であるエウリユアレであつた。

ミノタウロスはテセウスについていったときに目撃したんだつた。あー、だからこの建物に見覚えがあつたのか。

そしてもう一人は言わずもがなである。

「下痢止めの薬買いに行くか」

ぼそりと呟いた言葉に反応するエウリユアレ姉妹。

「あら、あなたはあの時の無礼な人間じゃない」

「ワタシ、ギリシヤ語分らない。あなたが何者か分らない。この女神コワイヨー」
変に片言を混ぜながら逃げようとしたところで、ステンノに捕縛される。

「アー、メガミサマ、許してくあダサイ。イケニエに藤丸立香をささげマスカラー」

「ちよ、何で僕の名前だけ流暢にも戻るんですか。てか、僕を巻き込まないで下さいよ」
「うるさい！ 毎度、毎度女神を連れ帰ってきおつて。俺がどんな気持ちかわかるか」

藤丸君に文句を言おうとした瞬間、エウリュアレが俺の前に立つ。

「どんな気持ちなの？」

「……ハッピーセットで頼んだベーターのアップパーカットを見たような気持ちです」

「……ねえもう一人のマスターさん。それはどんな気持ちになるの？」

「え？ それはですね……」

「あなたの顔を見て分かったわ。あの時、悪口を言って逃亡した人間に罰を与えるとして
ましよう」

絶望した顔をしていると、後ろから声をかけられる。

「私もまだ、罰をあたえていないのよね。今回で少し罰を減らしてあげる」

「……oh」

こうして全員が俺から目を背けて次の方針を決めている中、俺は女神さまから天罰
(暴力) を与えられるのだった。